

あさぎり町文化財調査報告書第4集

熊本県球磨郡あさぎり町

陸軍人吉秘匿飛行場跡

木製有蓋掩体壕跡の埋蔵文化財発掘調査

2017. 3

あさぎり町教育委員会

熊本県球磨郡あさぎり町

陸軍人吉秘匿飛行場跡

木製有蓋掩体壕跡の埋蔵文化財発掘調査



米軍撮影の「陸軍人吉秘匿飛行場」

米軍は独自の情報から、本飛行場を知ることとなり「MENDA AIRFIELD」と認識していた。

本写真は米軍F13による「飛行場報告第144号」での撮影で、陸軍人吉飛行場の固有攻撃番号は「2557」番である。撮影は「3PR5M317」で1945年8月5日に行われた。

米国立公文書館蔵 工藤洋三氏提供

2017. 3

あさぎり町教育委員会

序 文

あさぎり町は、豊かな歴史と自然に恵まれています。遠くは旧石器時代から近くは太平洋戦争の戦争遺跡までと文化遺産は多種多様です。

今回の調査は、戦争遺産研究と保護を推進している方々が、長い時間をかけてあさぎり町の戦争遺跡の価値を説明され、その保護活用を要望してされました。

当初、あさぎり町はもとより、県内行政機関でも太平洋戦争期の戦争遺跡を優先的に調査されているところはありませんでしたが、あさぎり町は戦争遺跡の価値を認め、調査費用を単独予算計上して、この戦争遺跡の埋蔵文化財発掘調査を実施しました。

本書は、『陸軍人吉秘匿飛行場跡 木製有蓋掩体壕の埋蔵文化財発掘調査』と命名され、飛行場跡に関連する「掩体壕跡」の遺跡調査を主としています。その遺跡にまつわる貴重な証言や資料も載せられています。

戦後72年となり、戦争体験した人も少なくなりました。このことは、悲惨な戦争体験を証言する人も少なくなり、同時に戦時の記憶も色褪せてゆきます。

今後、この報告書をとおして平和教育と平和維持に貢献できるよう関係機関に広く御活用いただければ幸いです。

最後に、調査の円滑な実施にご指導いただいた方々並びに関係機関に対して厚く御礼申し上げます。

平成29年3月31日

あさぎり町教育委員会

教育長 中村 富人

例 言

1. 本書は、熊本県球磨郡あさぎり町上北(うえきた)、上東(うえひがし)、岡原南(おかはるみなみ)地内に所在する、太平洋戦争期の『陸軍人吉秘匿飛行場跡木製有蓋掩体壕跡の埋蔵文化財発掘調査書』である。
2. 本事業は平成27・28年度熊本県球磨郡あさぎり町において町教育委員会が単独で予算化した学術調査事業である。
3. 今回発掘調査の対象とした遺構は、2号～5号木製有蓋掩体壕跡である。すでにその概要が判明している1号については、2009年に玉名荒尾の戦争遺跡をつたえるネットワークで作成し、町教育委員会に提出報告した『神威原秘匿飛行場永山1号木製掩体壕の調査概要報告』の内容を一部加筆修正し、本書に掲載する事で内容の補完を図った。また、掩体壕番号も既にその成果が熊本の戦争遺跡研究会発行の『戦後65年熊本の戦争遺跡』等で示されており、混乱を避ける意味からも2号・3号の番号をそのまま踏襲し、調査途中で発見確認された4・5号については、発見された順番で標記した。
4. 飛行場名称については、詳細は後述するように地域に残された人吉海軍航空隊基地跡との混同を避け、陸軍飛行場名称、飛行場性格もさらに加味し「陸軍人吉秘匿飛行場跡」とした。
5. 調査された遺構名称で、飛行機用「掩体」については、これまでの地域での慣習的な呼称に従い、木製構造物を有する本遺構形状から「木製有蓋掩体壕」と呼称した。
6. 木製有蓋掩体壕内部の名称は、開口部から掩体内部に向かい手前側空間を「前室」、次第に狭くなった奥側を「後室」とし、内部で一段高くなった箇所を周帯部と呼称した。また、左右に張り出したコンクリート基礎部は「袖部」と呼称し、「開口部右側袖部」や「左側の前後室変換部袖部」等と、遺構部位を特定しやすいように心がけた。
7. 調査体制等は後述した通りであるが、現地調査は北川賢次郎・高谷和生が、調査の写真撮影と本書の構想・執筆は高谷が、図版作成・体裁・トレースは北川が担当した。なお、第V章第1節「現地での証言」では、一部の聞き取りと文字興しを高谷のほか人吉・球磨の戦争遺跡を伝えるネットワークの山下完二・多田喜一郎が執筆し、第V章第2節「歴史資料」では、軍事郵便等の読み下しを高谷のほか同ネットワーク尾方保之・多田喜一郎の協力を得た。(敬称略)
8. 遺跡で使用していた掩体壕木製品等は、多くは所有者保管のままであるが、その一部はクリーニング及び虫害処理を経た後、あさぎり町生涯学習センター文化財収蔵庫内で保管している。
9. 調査に関わる写真・記録図面等はあさぎり町教育委員会で保管している。

凡 例

1. 遺構の縮尺は、平面図 1/200、1/250、断面図 1/40、1/50 を基本として作成・掲載した。
2. 挿図に記載した方位は磁北である。
3. 遺構挿図中の「LH」の数値は、標高を示し、単位はメートルである。
4. 断面図ポイントは、それぞれの図に「A~A'」等と表示した。また、頭頂部方向が見通しの方向である。
5. 図面中のコンクリート基礎等の標記等は以下のとおりである。



目 次

扉 口 絵
序 文
例 言
凡 例

本 文 篇

第1章 序章	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制・調査期間	1
1 調査の方法	1
2 調査の経緯	2
第II章 熊本県内の航空概要	3
第1節 熊本県における航空の概要	3
1 大正期の陸海軍航空	3
2 昭和前期の陸海軍航空	3
3 昭和20年期の陸海軍航空	4
4 民間航空	5
5 航空工業	5
第2節 熊本県内陸・海軍飛行場の概要	6
1 大正期	6

2	昭和前期	6	
3	昭和20年期：特攻用秘匿飛行場	8	
第III章	人吉・球磨地方の軍施設と木製有蓋掩体壕	12	
第1節	立地・地理的環境	12	
第2節	太平洋戦争期の歴史的環境歴史的環境	13	
1	人吉海軍航空隊周辺地域	13	
2	人吉海軍航空隊飛行場跡	13	
3	第二十二海軍航空廠人吉分工場	16	
4	佐世保鎮守府軍需部施設	16	
5	人吉球磨の軍需・疎開工場	17	
6	防空施設	18	
第3節	木製有蓋掩体壕	18	
1	掩体壕	18	
2	ロタコ(山梨県南アルプス市・御勅使河原飛行場)と木製有蓋掩体壕概要	20	
第IV章	調査内容	22	
第1節	陸軍人吉秘匿飛行場の概要	22	
1	立地、設営	22	
2	飛行場名称・呼称	23	
第2節	先行調査された1号掩体壕の概要	23	
1	調査経緯と状況	23	
2	1号木製有蓋掩体壕の構造	27	
3	遺物 木製有蓋掩体壕に使用された木製品	28	
(1)	A材(方形ほぞ穴を持つ角材・基礎部連結材)	28	
(2)	B材(平行四辺形ほぞ穴を持つ角材・基礎部連結材)	29	
(3)	C材(天井を支える梁板材)	31	
(4)	D材(天井を支える梁板材)	32	
(5)	梁板材への墨書銘	32	
第3節	発掘調査の概要	34	
1.	2号木製有蓋掩体壕	34	
(1)	調査方針と当初概要	34	
(2)	2号木製有蓋掩体壕各トレンチ(試掘坑)の概要	35	
ア	第1トレンチ	イ 第2-1トレンチ	ウ 第2-2トレンチ
エ	第3トレンチ	オ 第4トレンチ	カ 第5トレンチ
キ	第6トレンチ	ク 第7トレンチ	ケ 第8トレンチ
コ	2号木製有蓋掩体壕の環境整備		
2.	3号木製有蓋掩体壕	39	

(1) 3号木製有蓋掩体壕の調査方針と調査時の当初概要	39
(2) 3号木製掩体壕各トレンチ(試掘坑)の概要	39
ア 第1トレンチ イ 第2トレンチ ウ 第3トレンチ	
エ 第4トレンチ オ 第5トレンチ カ 小屋部材の確認作業、使用材の解体作業	
キ 木製部材	
3. 4号木製有蓋掩体壕	48
(1) 調査方針と当初概要	48
(2) 4号木製有蓋掩体壕各トレンチ(試掘坑)の概要	48
ア 第1-1トレンチ イ 第1-2トレンチ ウ 第2トレンチ	
エ 第3トレンチ オ 第4トレンチ カ 第5-1・5-2トレンチ	
キ 第6トレンチ ク 4号掩体壕の一部埋め戻し作業	
4. 5号木製掩体壕	54
(1) 調査方針と当初概要	54
(2) 5号木製有蓋掩体壕各トレンチ(試掘坑)の概要	54
ア 第1-1トレンチ イ 第1-2トレンチ ウ 第2トレンチ	
エ 第3トレンチ オ 第4トレンチ カ 第5トレンチ	
キ 第6トレンチ ク 第7トレンチ ケ 第8トレンチ	
第4節 発掘調査現地説明会、発掘調査成果報告会	60
1. 発掘調査現地説明会：町民・一般向け	60
2. 発掘調査成果報告会：関係自治体及び保存団体向け	61
第V章 総括	62
第1節 現地での証言	62
1. 山下完二さん「神殿原飛行場と掩体壕」	62
2. 森山哲夫さん「15歳のころ、神殿原飛行場の造成作業に従事」	64
3. 那須明さん「復員して目にした異様な建物」	65
4. 松本和幸さん・山代レイ子さん「3号掩体壕の姿」	66
5. 中村眞壽夫さん「戦後残された4号・5号掩体壕」	66
第2節 歴史資料	66
1. 陸軍第九振武隊の軍事郵便	66
2. 陸軍人吉秘匿飛行場から戦後持ち出しの航空機部材と思われる資料	72
第3節 木製掩体壕の技術的系譜	72
1. 『膠着梁木造掩体壕 参考図及び概要』	72
2. 『海軍 W工法構築要領』	74
第4節 調査成果と今後の課題	75
1. 当初の木製有蓋掩体壕の構造理解	75
2. 発掘調査による陸軍人吉秘匿飛行場木製有蓋掩体壕の概要	75
(1) 有蓋掩体壕の規模・構造の把握	75

(2) 前室左袖部の構築方法の把握	76
(3) 戦後も残された木製部材、現地での木製部材の発見	76
3. 関連調査による陸軍人吉秘匿飛行場の姿	77
(1) 当時証言	77
(2) 軍事郵便	77
(3) 米軍空撮資料	78
4. 今後の課題	78
(1) 木製有蓋掩体壕調査事例の集約とRC有蓋掩体壕調査資料との比較検証	78
(2) 地元啓発と広域連携での戦争遺跡の保存整備活用	79

(巻末)

参考引用文献

あとがき

調査抄録・奥付

附図目次

附図 1 熊本県内戦争遺産と旧軍飛行場位置図	10
附図 2 熊本県内旧軍飛行場系譜図	11

挿図目次

第 1 図 1号木製掩体壕のイメージ図	1
第 2 図 あさぎり町位置図	12
第 3 図 海軍人吉飛行場跡と陸軍人吉秘匿飛行場の位置関係図	12
第 4 図 「人吉海軍航空隊基地跡現存遺構案内図」	13
第 5 図 人吉海軍航空隊と周辺部の戦時状況図	14
第 6 図 飛行場地区の地下施設配置状況図	15
第 7 図 人吉海軍航空隊基地跡 I 区(本部作戦地区)地下壕位置図	15
第 8 図 人吉海軍航空隊地下工場地区地下壕位置図	16
第 9 図 掩体壕実測図	19
第 10 図 ロタコ(御勅使河原飛行場)全体配置図	20
第 11 図 3号掩体壕模式図	21
第 12 図 陸軍人吉秘匿飛行場滑走路跡位置図	22
第 13 図 「飛行場配置要図 陸作命甲第二号 別紙資料」	24
第 14 図 陸軍人吉秘匿飛行場滑走路跡及び各掩体壕位置図	24
第 15 図 1号掩体壕の当初復元図	25
第 16 図 平成 20 年 4 月 1 日・6 月 7 日の調査の様子と永山 1号掩体壕平面図での相関図	25
第 17 図 陸軍人吉秘匿飛行場 1号掩体壕平面図	26

第 18 図	陸軍人吉秘匿飛行場 1 号掩体壕利用の基礎部連結材 (A 材・B 材) 実測図	30
第 19 図	梁板材 (C 材) 実測図	32
第 20 図	2 号木製有蓋掩体壕平面図	34
第 21 図	2 号木製有蓋掩体壕第 1 トレンチ平面図・断面図	35
第 22 図	2 号木製有蓋掩体壕第 2 トレンチ延長部断面図	36
第 23 図	2 号木製有蓋掩体壕第 5 トレンチ出土木製品実測図	37
第 24 図	2 号木製有蓋掩体壕第 5 トレンチ左袖基礎部アンカーボルト実測図	37
第 25 図	2 号木製有蓋掩体壕第 7・第 8 トレンチ断面図	38
第 26 図	3 号木製有蓋掩体壕平面図	40
第 27 図	3 号木製有蓋掩体壕第 1 トレンチ平面図・断面図	41
第 28 図	3 号木製有蓋掩体壕第 2 トレンチ平面図・断面図	42
第 29 図	3 号木製有蓋掩体壕第 3 トレンチ平面図断面図	43
第 30 図	3 号木製有蓋掩体壕第 4 トレンチ断面図	44
第 31 図	3 号木製有蓋掩体壕第 5 トレンチ断面図	45
第 32 図	3 号木製有蓋掩体壕 コンクリート基礎部にボルトを通した柱材	46
第 33 図	3 号木製有蓋掩体壕で使用された黒書銘板材及びブステンシル銘板材	47
第 34 図	4 号木製有蓋掩体壕平面図	49
第 35 図	4 号木製有蓋掩体壕第 1 トレンチ平面図・断面図	50
第 36 図	4 号木製有蓋掩体壕第 2 トレンチ平面図・断面図	51
第 37 図	4 号木製有蓋掩体壕第 3 トレンチ平面図・断面図	52
第 38 図	4 号木製有蓋掩体壕第 4 トレンチ平面図・断面図	52
第 39 図	4 号木製有蓋掩体壕第 5-1・5-2 トレンチ平面図・断面図	53
第 40 図	5 号木製有蓋掩体壕平面図	55
第 41 図	5 号木製有蓋掩体壕第 1-1・1-2 トレンチ平面図・断面図	56
第 42 図	5 号木製有蓋掩体壕第 2 トレンチ平面図・断面図	57
第 43 図	5 号木製有蓋掩体壕第 4 トレンチ平面図・断面図	57
第 44 図	5 号木製有蓋掩体壕第 6 トレンチ平面図・断面図	59
第 45 図	5 号木製有蓋掩体壕第 7 トレンチ平面図・断面図	59
第 46 図	右 W1 工法 附図 1 抜粋	74
第 47 図	左 W1 工法 附図 4 抜粋	74
第 48 図	山梨県南アルプス市のロタコ例でのコンクリートスラブの状況	75
第 49 図	1 号木製掩体壕の復元イメージ図	75
第 50 図	2 号木製有蓋掩体壕寸法線入り平面図	76

写真目次

写真 1	熊本県球磨郡あさぎり町の風景	9
写真 2	人吉農芸学院内に残された「耐弾式地下発電所」	13
写真 3	人吉海軍航空隊・飛行場の航空写真	14
写真 4	上 教育隊庁舎兵舎地区の隊門	14
写真 5	中 飛行場地区跡の格納庫基礎	14
写真 6	下 飛行場地区跡の魚雷調整壕	14
写真 7	迫地区の機械工場壕	16
写真 8	白坂地区の補給備蓄壕	17
写真 9	通称「岡本工場」の現存建物	17
写真 10	陸軍四式戦闘機疾風の主脚下部部品で「トルクリンク」	17
写真 11	健軍飛行場陸軍四式重爆撃機「飛龍」用無蓋掩体壕の様子	19
写真 12	3号掩体コンクリート	21
写真 13	基礎部拡大	21
写真 14	3号掩体全景	21
写真 15	神殿原秘匿飛行場滑走路付近	23
写真 16	岡原霧島神社境内	23
写真 17	アンチモニー鉱山坑道入口	23
写真 18	神殿原秘匿飛行時用に労働徴用された朝鮮人住宅跡付近	23
写真 19	コンクリート基礎部の本体掘下げ状況	28
写真 20	コンクリート基礎の袖部掘下げ状況	28
写真 21	納屋の床板に利用された梁材	28
写真 22	左 那須 明さん宅に保管されていた方形基礎部連結材 2本	29
写真 23	中 長方形ほぞ穴を有する A材	29
写真 24	右 A材全長	29
写真 25	長方形ほぞ穴を有する A材仕口部	29
写真 26	A材の地用方形ほぞ穴部の拡大と釘打ち方向	29
写真 27	左 B材・仕口部全容	31
写真 28	中 B材・平行四辺形ほぞ穴形状拡大	31
写真 29	右 B材・平行四辺形ほぞ穴材全長	31
写真 30	左 B材・仕口仕様	31
写真 31	右 B材・仕口部拡大「左 2」墨書	31
写真 32	左 C材を用いての梁材復元の様子	32
写真 33	中 C材での復元のほぞ部の拡大	32
写真 34	D材・上から 2本目	32
写真 35	左 マーク“○”に“熊”か	32
写真 36	右 “本熊本材株式会社人吉第二工場”か	32

写真 37	上左	“杉厚板”と“○”か	33
写真 38	上右	“三尺二寸”	33
写真 39	中	“三月二十一日”か	33
写真 40	下左	“A2C”か	33
写真 41	下右	“○側梁○2”か	33
写真 42	2号木製有蓋掩体壕の調査時当初の全景	34	
写真 43	第1トレンチ作業風景	35	
写真 44	第5トレンチ作業風景	37	
写真 45	3号木製有蓋掩体壕の前室左袖部コンクリートの露出状況	39	
写真 46	第2トレンチ外側(前室・奥室変換点箇所)の基礎外側の掘下げ状況	42	
写真 47	第5トレンチ基礎部の確認作業の様子	45	
写真 48	掘入れ大型びつひの解体作業	45	
写真 49	小屋内でコンクリート基礎部にボルトが通された柱材	46	
写真 50	カットされた屋根利用の板材	46	
写真 51	4号木製有蓋掩体壕の調査当初の様子	48	
写真 52	第2トレンチ作業風景	48	
写真 53	4号木製有蓋掩体壕の埋め戻し作業	54	
写真 54	第2トレンチ掘下げ状況	58	
写真 55	第8トレンチ掘下げ状況	58	
写真 56	上右 開会前の会場の様子	60	
写真 57	教育課職員北川氏からの主催者挨拶、説明会の趣旨説明	60	
写真 58	2号木製有蓋掩体壕での見学の様子	60	
写真 59	3号木製掩体壕看板前でのくまもと戦跡ネット高谷による説明の様子	60	
写真 60	発掘調査成果報告会の様子	61	
写真 61	同報告会	61	
写真 62	証言者の山下完二さん	62	
写真 63	証言者の森山哲夫さん	65	
写真 64	証言者の那須 明さん	65	
写真 65	証言者の中村眞壽夫さん	66	
写真 66	左 陸軍人吉秘匿飛行場から戦後持ち出しの航空機部材と思われる鉄材資料	72	
写真 67	右 鉄材資料の拡大写真	72	
写真 68	左 木製格納庫事例	73	
写真 69	右 膠着張大張間掩体壕	73	
写真 70	左 基礎部における梁及び底地板変位測定状況	74	
写真 71	中 立型釘打掩体内構造の一部	74	
写真 72	右 昭和20年松本市源池国民学校での10分の1模型	74	
写真 73	物置小屋		
写真 74	振武隊員の決意のハンカチへの寄せ書き	77	

写真 75	写真偵察機 F13 腹部の偵察カメラ類の様子	78
写真 76	出水海軍航空隊 2 号掩体の外観	78
写真 77	その掩体内部の掘下げられた半地下状況の様子	78
写真 78	県道 48 号(岡原通り)・北側からみた 2 号木製有蓋掩体壕	79
扉口絵、本文編中扉写真	米軍撮影の「陸軍人吉秘匿飛行場」	
本文編写真	米軍『AIRFIELD REPORT No144』	
図版編写真	米軍撮影の陸軍「九五式中等練習機の特攻仕様機」	

資料目次

資料 1	小楠飛行隊桜井隊員名	67
資料 2	小楠飛行隊墨書	67
資料 3	大内隊員戦死電	68
資料 4	「牛山 長山」	68
資料 5	「仁張惣右衛門」	69
資料 6	「番 富次男」	69
資料 7	「久保左利」葉書	70
資料 8	「牛山 昭」葉書	70
資料 9	「牛山 昭・長山正言」封書	71
資料 10	「牛山 昭・長山正言」封書に同封された一式戦闘機「隼」のスケッチ	71

図版目次

図版 1

- ①1号掩体壕の確認調査
- ②2号掩体壕全景

図版 2

- ①3号掩体壕の調査の様子
- ②3号掩体壕の物置小屋

図版 3

- ①4号掩体壕全景
- ②5号掩体壕全景

図版 4

- ①1号掩体壕の調査
- ②1号掩体壕の調査図版

図版 5

- ①1号掩体壕の調査
- ②1号掩体壕の調査

図版 6

- ①2号掩体壕第1トレンチ状況
- ②2号掩体壕第1トレンチ状況
- ③2号掩体壕第2トレンチ状況
- ④2号掩体壕第2トレンチ延長部の状況
- ⑤2号掩体壕第4トレンチ状況
- ⑥2号掩体壕第5トレンチ状況

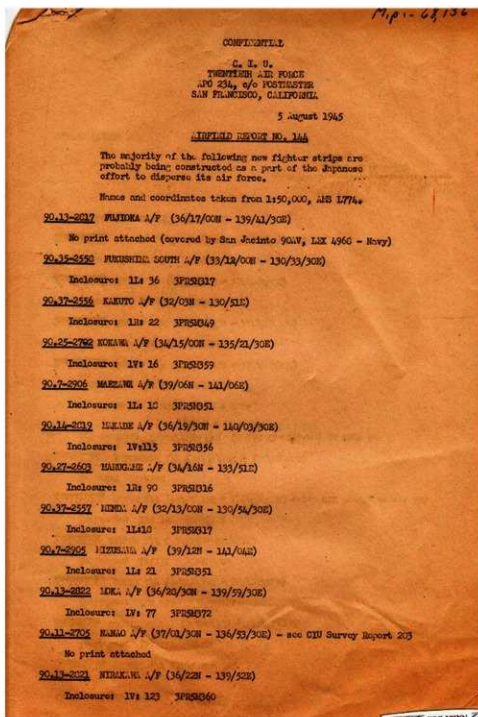
図版 7

- ①2号掩体壕第5トレンチ状況
- ②2号掩体壕第5トレンチ状況
- ③2号掩体壕第6トレンチ状況

- ④2号掩体壕第7トレンチ状況
⑤2号掩体壕第8トレンチ状況
⑥2号掩体壕の環境整備
- 図版 8
- ①3号掩体壕第1トレンチ状況
②3号掩体壕第3トレンチ状況
③3号掩体壕第3トレンチ状況
④3号掩体壕第3トレンチ状況
⑤3号掩体壕第3トレンチ状況
⑥3号掩体壕第3トレンチ状況
- 図版 9
- ①3号掩体壕第3トレンチ状況
②3号掩体壕第3トレンチ状況
③3号掩体壕第4トレンチ状況
④3号掩体壕第4トレンチ状況
⑤3号掩体壕第5トレンチ状況
⑥3号掩体壕第5トレンチ状況
- 図版 10
- ①3号掩体壕柱材
②3号掩体壕柱材
③3号掩体壕柱材
④3号掩体壕柱材
⑤3号掩体壕板材
⑥3号掩体壕板材
- 図版 11
- ①4号掩体壕第1-1トレンチ状況
②4号掩体壕第1-1トレンチ状況
③4号掩体壕第1-1トレンチ状況
④4号掩体壕第1-1トレンチ状況
⑤4号掩体壕第1-2トレンチ状況
⑥4号掩体壕第1-1-2トレンチ状況
- 図版 12
- ①4号掩体壕第2トレンチ状況
②4号掩体壕第3トレンチ状況
③4号掩体壕第4トレンチ状況
④4号掩体壕第5-1トレンチ状況
⑤4号掩体壕第5-1トレンチ状況

- ⑥4号掩体壕第5-2トレンチ状況
- 図版 13
- ①4号掩体壕第6-1トレンチ状況
②4号掩体壕第5-1トレンチ状況
③5号掩体壕第1-1トレンチ状況
④5号掩体壕第1-2トレンチ状況
⑤5号掩体壕第4トレンチ状況
⑥5号掩体壕第4トレンチ状況
- 図版 14
- ①5号掩体壕第4トレンチ状況
②5号掩体壕第4トレンチ状況
③5号掩体壕第6トレンチ状況
④5号掩体壕第6トレンチ状況
⑤4号掩体壕の測量調査の様子
⑥5号掩体壕の測量調査の様子
- 図版 15
- ①3号掩体壕遺存木製品
②3号掩体壕遺存木製品
③3号掩体壕遺存木製品
④3号掩体壕遺存木製品
- 図版 16
- ①3号掩体壕遺存木製品
②3号掩体壕遺存木製品
③3号掩体壕遺存木製品
④3号掩体壕遺存木製品
- 図版 17
- ①3号掩体壕遺存木製品
②3号掩体壕遺存木製品
③3号掩体壕遺存木製品
④3号掩体壕遺存木製品

[本 文 編]



米軍『AIRFIELD REPORT No 144』号に
記載された陸軍人吉秘匿飛行場

米軍は8項目に「MENDA AIRFIELD」と標記し、固有攻撃番号は「2557」番としている。

撮影年月日は「1945.8.5」である。

米国立公文書館蔵 工藤洋三氏提供

第1章 序章

第1節 調査に至る経緯

本報告は、平成27・28年度熊本県唐津郡あさぎり町において町教育委員会が単独事業で実施した「陸軍人吉秘匿飛行場跡 木製有蓋掩体壕跡」の発掘調査報告書である。

陸軍人吉秘匿飛行場は、大戦末期陸軍が全国に40箇所造営した特攻用秘匿飛行場の一つで、滑走路と掩体壕は上北神殿原・上東永山・上東狩所・岡原南の広い地域に位置している。滑走路は全長1200m、幅50m、東西方向で滑走し、西端のあさぎり中学校管理棟付近には中練習機6機が駐機していたという。

今回の調査のきっかけとなった1号木製有蓋掩体壕は滑走路から

2kmほど離れ分散されていた。平面形状が「ホームベース型(奴型)」

でコンクリート基礎部の縦(主軸方向)18.2m、コンクリート基礎部の横(短軸方向)23.0m、コンクリート両袖間15.5mを測った。

また、全国で初めて1号掩体壕で確認された有蓋部を構成する木材は、方形ほぞ穴もしくは平行四辺形ほぞ穴を持つ基礎部連結材二種のほか、平面形が長方形もしくは天井を支える長辺一辺が緩やかな曲線形状を有す梁板材多数が、戦後の壕解体後に隣接民家で保管されていた。木材には墨書がなされ、基礎材仕口部に「左2」、他材には「本熊木材株式会社人吉第二工場」「杉厚板」「三尺二寸」等が実見できた。

全国での木製有蓋掩体壕の発掘調査事例は、山梨県南アルプス市の「ロココ飛行場(御馳使河原秘匿飛行場)」の事例のみであり、また木製部材の確認事例は本遺跡のみである。

そこで、あさぎり町教育委員会は、本遺跡の熊本県における戦争遺跡としての重要度を鑑み、平成24年に永山1号掩体壕を町登録文化財として熊本県内に菊池市菊池飛行場給水塔について、自治体認定の登録文化財とした。

その後、町内の聞き取り調査等で上北神殿原に2号、上東狩所に3号が所在する情報を得たことから、平成27年度調査事業を、さらには岡原南永岡に4・5号所在の情報を得たことから平成28年度調査を実施したものである。本調査報告書の刊行後は、地権者のご承諾の基、地域住民や有識者の文化財保存の機運が高まれば、残り4基の町登録文化財への道筋を検討している。



第1図 1号木製有蓋掩体壕のイメージ図
永山1号掩体壕の調査成果を基に、当時の証言を含めて山下完二氏が作製

第2節 調査方法・体制、調査期間等

1. 調査の方法・体制

平成27・28年度の2カ年の期間あさぎり町教育委員会は、以下の通りの体制で町内に所在する「陸軍人吉秘匿飛行場跡」の調査を実施した。

その概要は、所在する2号～5号木製有蓋掩体壕跡の発掘調査と現地で関わった滑走路づくりや自宅裏に造られた掩体壕の様子等の聞き取り調査、敗戦時本飛行場に待機した第九六振武隊隊員の軍事郵便、米軍写真資料に示された「MENDA AIRFIELD・免田」の調査と多岐に及んだ。

特に、近現代戦争遺跡調査の専門家である「くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク代表高谷和生氏」を招へいし、現地調査や調査全般の指導協力をおおき、あさぎり町文化財専門委員の北川賢次郎が現地調査を担当した。

調査に関係された方々のご芳名を記し、感謝の意を表したい。

なお、鑑町教育委員会からは、人吉海軍航空隊基地跡全域図面2種の提供、伝陸軍人吉秘匿飛行場資料の紹介の

機会を得た、併せて感謝申し上げます。

調査主体 熊本県球磨郡あさぎり町教育委員会

調査責任者 平成27年度 教育課長 甲斐龍馬 平成28年度 教育課長 木下尚宏

調査事務 参事 早川 幹 調査担当 文化財専門委員 北川賢次郎

調査・指導 くまもと戦争遺産・文化遺産ネットワーク代表 高谷和生

調査協力者 同理事 末永 崇

現地協力者 人吉球磨戦争遺産ネットワーク代表 山下完二 同事務局長 多田喜一郎 同会員 尾方保之

専門調査協力者 田中大輔 平川豊志 工藤洋三 宮田逸民 十菱駿武 出原恵三 村上康藏 上村文男

手柴智晴 橋本正和 松本重美 戸崎孝行 石川幸彦 八巻 聡 松本晋一 本田清悟

牧原敏孝 国崎 潤 鈴木裕和 鈴木義宏 菊池 実 上谷昭夫 原田弓子 織田祐輔

佐藤邦彦 中村泰三 杉山弘一 松本晴樹

地権者 1号掩体壕：那須 明 2号掩体壕：稲富和子 3号掩体壕：豊永憲二 4号掩体壕：井本清一

5号掩体壕：中村眞壽夫・井本清一

調査作業員

平成27年度 前田正末 玉村広海 溝口親男 森山正光 清水勝幸 池田義人 畑崎逸男 前田俊夫

田中典幸 椎葉重人 林 博士 瀬戸正利 尾方富義 椎葉初美 馬場正明 瀬戸口亘

平成28年度 増田健一郎 馬場正明 田口勝巳 前田俊夫 椎葉初美 溝口親男 寺田安男 入田正美

尾方 厚 宮脇立美 宮原茂邦 梅田 忠 前田正末 林 博士 清水勝幸

※順不動敬称略

2. 調査の経過

(1) 第Ⅰ期

平成20年～21年に断続的に市民グループ「玉名荒尾の戦争遺跡をつたえるネットワーク(現くまもと戦争遺産・文化遺産ネットワーク)」と人吉球磨退職者協議会山下完二氏による上永山の1号掩体壕の状況確認の調査を行った。詳細は後述するが、平成20年1月5日、4月1日、6月7日、9月27日、平成21年1月6日の調査期間で『子どもと歩く熊本の戦争遺跡Ⅲ 熊本県南編』に記載されている遺跡内容の確認調査である。本概要は『神殿原秘匿飛行場永山1号木製掩体壕の調査概要報告』として、玉名戦争ネット高谷和生、球磨郡退職者協議会山下完二氏とあさぎり町教育委員会への調査概要を説明した。

(2) 第Ⅱ期

あさぎり町教育委員会による調査事業として平成27年度4回に分け実施した。

平成27年9月19日～23日：2号木製有蓋掩体壕の全域調査、4号木製掩体の現地確認

平成27年10月10日～14日：3号木製有蓋掩体壕の全域調査、地元証言聞き取り調査、現地設置小屋内の木製部材調査

平成27年11月21日～23日：2・3号木製掩体壕の現地説明会の開催、3号木製掩体関連木製部材の実測作業、4号木製掩体の伐採作業、5号掩体の想定地の現地聞き取り調査

平成28年2月6・7日：関係自治体及び保存団体向けの発掘調査成果報告会、2号木製有蓋掩体壕関連聞き取り調査

(3) 第三期

あさぎり町教育委員会による調査事業として平成28年度4回に分け実施した。なお、調査終了後は整理作業、報告書作成作業をただちに着手した。

平成28年9月17・18日：4号木製有蓋掩体壕の全域調査、5号木製有蓋掩体壕の聞き取り調査

平成28年9月22～25日：4号木製有蓋掩体壕の全域調査、5号木製有蓋掩体壕の全域調査、陸軍人吉秘匿飛行場より戦後持ち出しの航空機部材の調査

平成28年10月9～12日：4号木製有蓋掩体壕の全域調査・埋戻し、5号木製有蓋掩体壕の全域調査・埋戻し

平成29年1月14日・2月19日：現地証言調査他

第Ⅱ章 熊本県内の航空概要

第1節 熊本県における航空の概要

熊本県内では、陸軍正規飛行場は大正期に1箇所、昭和前期に6箇所、昭和20年敗戦間際の特攻用秘匿飛行場5箇所、海軍正規飛行場では昭和前期に3箇所の計15箇所が存在する。（「附図1 熊本県内戦争遺産と旧軍飛行場位置図」、附図2「熊本県内旧軍飛行場系譜図」を参照）

本稿では、日本の航空略史を概観しつつ、熊本県内における陸海軍航空、民間航空、航空工業の各項目毎に航空略史をまとめてみたい。

1. 大正期の陸海軍航空

我国で航空機を最初に操縦して飛行に成功したのは、明治43年12月19日、徳川・日野両大尉である。その後、陸軍では早くも明治44年には、黎明期の研究教育用の飛行場である群馬県所沢飛行場の開設となった。一方海軍では1920年(大正9)茨城県霞ヶ浦に、水陸兼用の飛行場を設置したのが緒言となる。

当時の陸上の滑走路は、ほぼ方形に近い平坦な芝地等が主で、中央部に格納庫等の管理区画を有し、風の方向により離着陸を行う方式で、これはひとえに風の影響を受けやすい、軽量低馬力の複葉機の性能によるものである。

九州地域では、陸軍では福岡県に大正8年大刀洗飛行場が開設され、西日本の陸軍飛行場の中核となった。また、海軍では福岡県雁巣飛行場が水上機専用飛行場として開設され、中国大陸に向けての民間航路として利用された。

本県における本期唯一の飛行場である宮地飛行場は、後述のとおり陸軍大刀洗飛行場を補完するため、大正14年開設された飛行場である。本格的な管理施設を有せず、利用時に天幕を設置するなどして、現存する写真記録資料では昭和6年頃まで断続的に利用されたと推測される。

2. 昭和前期の陸海軍航空

昭和10年代、大型の爆撃機等の登場により従来までの、草地を主体として風向に併せた様式から、地盤を強固にして滑走距離が確保できる本格的な滑走路を要すようになった。一方では、小型機の性能の向上にともない、国内各地にも多くの飛行場が建設されてきて、搭乗員の養成も進められた。

県内での本格的な飛行場の設営は、昭和10年代後半期の飛行第四聯隊の大刀洗飛行場からの移駐にともなう菊池飛行場開設を皮切りとする。

太平洋戦争開戦頃までの飛行場状況は、広々とした平坦地に滑走路、格納庫、宿舍等の設備を配置していた。開戦当時の国内の飛行場の大多数は、増員された操縦者を養成するための教育訓練用飛行場が主体であった。本県陸軍基地の多くでは、この最重要課題である航空機搭乗員の養成を「陸軍大刀洗飛行分教所・学校」を主体として行

い「菊池・隈庄・黒石原・熊本・玉名」に分教所・各学校を設けた。

1941年12月8日、日本軍による真珠湾攻撃による太平洋戦争の開戦に伴い、これまで以上に航空機は重要な役割を持つようになった。陸海軍では各々で戦闘機や爆撃機を増産するとともに、飛行場の建設を拡大していった。

それまでは「内地に60箇所あった飛行場に、さらに24箇所を新設し、7箇所の既存飛行場が拡張され」、さらに搭乗員の訓練が重ねられた。

本県でも航空機工場の附属飛行場であった熊本飛行場の一部を利用したり、黒石原にあった通信省航空機乗員養成所を拡張し接収したり、玉名・八代飛行場でも良好な水田を強制的に買上を行うなど、近隣からの労働徴用を行いつつ軍直営で急速に展開した様子が伺える。

一方海軍でも、当初整備員の養成のみであった人吉・天草飛行場を、数度の改編をへて、航空機操縦員の養成にも助んだ。

1942年頃からは、外地での空襲被害の増大に伴い、飛行場設営状況が大きく変容する。既存の飛行場では、飛行機や建物の分散や偽装隠蔽が行われ、コンクリート等による防御、さらにはより防御性の高い隧道工事も実施されてきた。本県の飛行場も、戦局の悪化にともない施設の分散や掩体壕の設置を積極的に実施した。県内における当時の様子は、立山茂著『隈庄飛行場工事の記録』(立山茂著『隈庄飛行場工事の記録』2006 自家製版)に、詳細記録されている。

1942～43年には、本格的な日本本土空襲を迎えるにあたって、防空用飛行場の設営や飛行隊の編成、さらには航空作戦の飛躍的な発展に対応するために、数個の飛行場を運用する飛行場群を構成し配置するようになってきた。

本県の陸軍飛行場も後述する一群を形成するとともに、大刀洗飛行学校の廢校にともない、航空機搭乗員の養成は終止符を打ち、多くの錬成部隊を編成し、訓練途中の生徒は「と号要員」として再配置された。

さらに既存飛行場では、来るべき米軍本土上陸をむかえる決号作戦用に資材集積を進めた。西部飛行場十二個に充てられた熊本では「熊本・菊池・隈庄に、戦五・重五中隊分の燃料、爆弾等の集積が進められた。敗戦時にはその半数程度と認められた」とされている。

敗戦時の菊池飛行場での物資集積の写真が、敗戦状況として、新聞紙上に公にされている。(参考資料『戦史叢書 陸軍航空作戦基盤の建設運用』「航空総軍作戦編」)

3. 昭和20年期の陸海軍航空

陸軍では、戦局の悪化に伴い1945年に入ると、内地飛行場の整備と防御強化が全国的に実施される。6月には特攻機を秘匿する簡易秘匿飛行場が、簡易道路、運動場等を利用して、主として本州西部地域に38箇所設営された。(『基地設営戦の全貌』)

一方海軍でも、本土上陸に備えて55箇所の秘匿飛行場に進入する特攻隊を編成し、訓練を継続して行った。(『海軍航空年表』『いま甞る大社基地』)この55箇所の内訳は、所管名を「牧場」とし秘匿につとめ、横須賀・舞鶴・呉・佐世保の各鎮守府ごとに独自で設置された。九州を管内とする佐世保鎮守府では、熊本県内への秘匿基地の配置は見られなかったが、近郊では雲仙・島原・小城・戸次他の13箇所の設営を行った。

昭和20年7月に策定された「第六航空軍決号作戦大綱」によれば、本県一般飛行部隊は第16飛行団に属し「51F、52F、59F、244F、62F(重爆)」の配備を行っている。特攻機は「一式戦×4、四式戦×4、偵察×2、襲撃×10」の部隊配備を行い、その配当飛行場は「熊本、隈庄、菊池、黒石原、玉名、山鹿、植木、熊本北、大津」の9飛行場とされる。

多くの県内基地は特攻機の中継基地として使用されたが、玉名・黒石原・健軍飛行場と陸軍人吉飛行場には「と

号要員の中練機」が配置された。

さらに第六航空軍の指揮下に入った第三十戦闘飛行集団司令部はこれまでの福岡から熊本に移駐し、仮本部を花岡山の料亭「蓬萊閣」に、兵舎を花岡山北側丘陵に設置し指揮をつかさどった。

また海軍では、既存飛行場である県南の人吉飛行場への「と部隊」配備がなされるが、部隊名は判明していない。

4. 民間航空

大正12年4月民間航空に関する保護、奨励、監督等を司る行政官庁として陸軍省より移管された逓信省航空局では、当初の軍への完全委託から、民間航空要員の自主養成の方針を打ち出した。その後陸軍の全面的な協力を得て、昭和13年6月以降は中央養成所を松戸、福山に、地方養成所を陸軍系10箇所、海軍系5箇所を設け組織的な育成に乗り出した。

熊本県での民間航空機乗員養成は、陸軍系の熊本地方航空機乗員養成所を合志市黒石原に昭和16年4月に開所し、本科第1～5期生までが本所で訓練を受け、操縦科・機関科の訓練も一部実施された。また、海軍系の天草地方航空機乗員養成所を天草市佐伊津に、開所準備中であつたが、そのまま海軍が引き継ぎ博多海軍航空隊天草分遣隊として開所した。

その後、昭和17年頃から航空機乗員の養成が急務となったことから、熊本地方航空機乗員養成所では、陸軍との併行育成期を経た後閉所され、飛行場施設を拡張しての本格的な軍飛行場への転換を見た。

当初スポーツ航空より発足した日本における「滑空」では、県内においても昭和8年8月の九大・九州航空会による阿蘇草千里での滑翔、昭和12年8月の阿蘇大観峰での研究飛行会の開催などを、自然地形を利用した滑空場で継続して実施された。

昭和16年には、県内中学校で軍事教練の強化にとともに、滑空訓練を正科に組み入れ、各学校内では文部省初級滑走機等により初歩的な訓練が行われた。さらには戦時色が濃厚となった昭和19年以降には「訓練実施要綱」を提示し、大学・高専の生徒にも、航空要員増強のための基礎として学徒航空訓練の強化が図られた。

県内においては、阿蘇、山鹿、人吉地方等に牧草地や休耕地を利用したグライダー滑走場が複数設けられたが、軍の利用状況は見られない。

5. 航空工業

日本における航空機工業の発展過程を概観すると、第1期の日露戦争後から第1次世界大戦勃発時までの、「欧米航空機の輸入による訓練時代」から、第2期の第1次世界大戦から満州事変までの、「先進機の技術導入による開発生産の手法取得の機微期」を経て、昭和10年代からは「我国独自の開発能力による国産時期」の三期となる。

県内での航空機生産は、昭和16年12月31日の三菱重工業熊本航空機製作所の建設内定をその緒言とする。昭和9年社名を三菱重工業株式会社に変更し、続いて三菱航空機を合併し、巨大な軍需会社に成長した三菱は、折からの陸海軍の急激な需用の増大に応え、国の第2次生産能力拡充命令を受け、官設民営工場である熊本航空機製作所を開設したのち、昭和20年には工場の大分散を実施し、本工場を第9製作所と呼称した。

熊本市健軍町で開始された四式重爆撃機「飛龍」(キ-67)は昭和19年4月29日に一号機の進空の後、健軍工場の継続建設、二次にわたる工場の大分散疎開を実施しながら、最終的には計42機(46機との統計もある)の生産を行った。

なお、この戦況が厳しさを増す時期、熊本の地場資本による、航空機工場の設立が相次いだ。昭和17年には古庄航空工業株式会社の設立があり、春竹工場・迎町工場・日吉工場で、当初は木製グライダーを、その後は海軍機上作

業練習機「白菊」(K-11)の木製主翼部分の製作を行い、雑所隈(福岡県)の九州飛行機に移送した。また、古庄航空は、附属の古庄航空工業青年学校、古庄航空工業技能者養成所を開所し、関連会社として昭和18年1月には城北航機株式会社(山鹿市来民)、その後分工場として菊池市隈所に大洋航機株式会社を設立し、航空工場の発展に傾注した。

その他、市内では飛行機金属部品製造の三陽航機株式会社(熊本市迎町)が、昭和18年1月には、田迎町に市内商業者が出資しての東肥航空機株式会社が、昭和19年2月には、熊本航空工業株式会社が相次いで設立された。

熊本市春竹町八王子にあった「三陽航機株式会社(取締役社長：野田卯三郎、専務取締役：木下嵩、取締役：古荘信一、監査役：岡田米記)」の八代工場である。八代工場の所在地は、八代市井上町91番地ほかである。工場は1943年(昭和18年4月頃)に開設され、海軍練習機の胴体後半部、海軍艦上爆撃機「流星(B7)」の風防を生産していた。記録では、昭和18年4月「三陽航機株式会社、八代に青年学校開設」、昭和19年3月11日「挺進隊社行会(三陽航機・興国人絹・浅野セメント・昭和農産加工)」が見られる。会社報・記念誌等は確認できていない。

航空機生産行政に関しては、昭和10年満州事変で得た戦訓により、後方支援の強化を図り、補給、修理能力を拡充するため航空廠を新設した。東京に航空本廠、航空支廠を大刀洗をはじめ5箇所を設置した。

本県では「大刀洗支廠」の下部組織として菊池飛行場に「菊池分廠」が設置され、航空兵器、燃料、材料などの保管、貯蔵、調達、補給、修理改修などを行った。なお、本県に配置された海軍基地には同類の機構は存在しない。

第2節 熊本県内陸・海軍飛行場の概要

1. 大正期

本時期に設置されたのは、県内で最古となる宮地飛行場の1箇所のみである。

① 宮地(みやじ)飛行場

阿蘇市宮地に所在。大正14年、陸軍大刀洗飛行場を補完するために、在郷軍人団等の奉仕工事等で完成。その後は宮地グライダー練習場として利用。大正14年11月の新設時、甲式四型戦闘機(ニューポール29c1の国産機)による演習写真・記録、昭和6年には乙式1型偵察機(サルムソン2A2の国産機)の演習写真が残されている。

2. 昭和前期

本県においては、陸軍飛行場が7カ所、海軍飛行場は陸上人が吉、海上が天草の2箇所を、県総数で9カ所を数える。

② 菊池(きくち)飛行場

菊池市花房富の原所在。花房・隈所飛行場の別称。昭和15年4月開隊し、同年8月大刀洗陸軍航空支廠菊池分廠を設置。同年10月には大刀洗陸軍飛行学校菊池分教所を設置し、後の昭和18年12月には同菊池教育隊に改称。昭和16年1月、第三航空教育隊・西部第九部隊が移駐し、航空兵教育を実施し、防衛警備も担当。昭和19年5月には陸軍航空通信学校菊池教育隊が開隊し、菊池陸軍病院第一飛行集団に所属し、菊池気象観測所を配置。

本飛行場は熊本県最大の陸軍基地で、多くの実戦部隊が配置される。昭和16年9月に第一〇六教育飛行連隊(中部第一一五部隊)～17年4月、昭和17年5月に第一〇三教育飛行連隊(西部第一一四部隊)～18年9月、昭和19年3月には第三教育飛行隊と改称、昭和17年12月に西部軍直協飛行隊(西部第一二七部隊)～18年9月が中心となった。昭和20年5月13日に空襲を受け、多くの建物は焼失したものの、昭和20年7月、第三十戦闘飛行集団の配当

飛行場となり、特攻中継基地に変貌する。敗戦時は、第二二九飛行場大隊(靖第 19388・昭和 20 年 4 月編成)、第五五飛行場中隊(靖第 18464・昭和 19 年 4 月編成)が配備。

飛行場東側の教育隊・実戦部隊区画には、全高 16m の給水塔 1 基が現存。門柱 6、立哨所基礎 1、木製大型格納庫基礎 1、鉄骨小型格納庫 基礎 1、大型弾薬庫 1、油倉庫 1、兵舎等建物基礎 10～15 が遺存。また、飛行場西側の通信教育隊区画には風呂場 1、便所 2、円形防火水槽 4、酒保門柱 6 等が遺存。さらに、台地崖面には多数の防空壕と合わせ、菊池市飛熊には大刀洗航空支廠菊池分廠の大型格納庫穴壕 2 基が遺存する。

③ 熊本(くまもと)飛行場

熊本市健軍町・西原町所在。健軍飛行場の別称を持つ。当初は三菱重工工業株式会社熊本航空機製造所で生産する重爆撃機「飛龍(キ-67)」の試験飛行のための飛行場として設営。飛行場開設の詳細時期は不詳であるが、昭和 19 年 4 月の飛龍第一号機進空式には空港施設も南・西側に完成していた模様。昭和 19 年 4 月には大刀洗陸軍飛行学校熊本教育隊が、飛行場東側に管理区画を設け開校する。その後大刀洗飛行学校の廃校に伴い、実戦部隊の配備も行われ、昭和 20 年 4 月には、重爆隊の第六十戦隊の配置に伴い機能がさらに拡充。昭和 20 年 5 月の義勇作戦では、沖縄に向け義烈空挺隊の発進が行われた。昭和 20 年 7 月、第三十戦團飛行集団の配当飛行場となり、敗戦時は第六〇戦隊(重爆)、第一七独立飛行隊、第一七四飛行場大隊が配備。

滑走路は、現熊本日赤熊本病院前道路、熊本県立大学周辺で、飛龍用の無蓋掩体壕 1 基が完形で遺存。南側に隣接する三菱航空機製造所の全長 200m の総組立工場が、西部方面総監部内補給支廠の建物として現存し、義烈空挺隊慰霊碑も本所に移転されている。また、六十戦隊の墜落機の尾翼等部品が大江町収蔵室に保管され、慰霊碑が大津町外牧畑、西原村宮山の 2 箇所に建立されている。

④ 黒石原(くろいしばら)飛行場

合志市黒石原所在。幾久宮飛行場の別称あり。昭和 16 年 4 月通信省熊本地方航空機乗員養成所として開所。本科第 1～5 期生までが本所で訓練を受け、操縦科・機関科の訓練も実施。昭和 19 年 4 月には大刀洗陸軍飛行学校黒石原分教所を開所し、一時期は両者の訓練生が並行して訓練が実施されたが、昭和 19 年 8 月には陸軍が周辺部も含めて接收し、養成所は閉校。昭和 20 年 7 月、第三十戦團飛行集団の配当飛行場となる。

現地には、二段基礎築造で大理石製外壁の奉安殿が唯一遺存し、市民運動の高まりから合志市で用地を買収し、市指定文化財へ指定予定である。

⑤ 玉名(たまな)飛行場

玉名市大浜町所在。高瀬・大浜飛行場の別称を持つ。大刀洗陸軍飛行学校玉名教育隊として昭和 16 年 4 月開隊。少飛 14 期 140 名、特幹 1 期 140 名卒業。大刀洗飛行学校閉校に伴う改編で、錬成飛行第八戦隊・空五四二に改称。昭和 20 年 5 月 10・13 日の空襲で、西側管理区画内建物は全壊。その後は米子飛行場へ移駐し決と号要員として訓練実施。昭和 20 年 7 月、第三十戦團集団の配当飛行場となり、練習機特攻機の中継基地として利用され、敗戦時には第九十・九十一振武隊 24 機が配置済み。

現地には正門、木製大型格納庫 2 と小型格納庫 6 の基礎部、兵舎 2 の基礎部、本部棟基礎部とコンクリート製拝殿、風呂場 2、井戸 1 等が遺存。大型格納庫 2 基を登録文化財へとする運動も活動中である。

⑥ 隈庄(くまのしょう)飛行場

下益城郡城南町舞の原所在。舞の原飛行場の別称。昭和14年から舞の原台地に造成を始め、昭和16年10月頃に完成。当初は大刀洗陸軍飛行学校隈庄分教所として発足し、昭和18年6月には大刀洗陸軍飛行学校隈庄教育隊と改称。昭和19年には実戦部隊も配置され、昭和20年4月、重爆隊第一〇戦隊の配置に伴い、大型の無蓋掩体壕30基造営、滑走路を2,400mに延長し、一部はコンクリート舗装され現存する。昭和20年7月、第三十戦闘飛行集団の配当飛行場となり、特攻機の中継基地となり、敗戦時は第一六二飛行場大隊、第一〇戦隊(重爆)の駐留があった。

現地には、城南病院内に心字池、駐機所1、格納庫基礎部4、弾薬庫1、油倉庫1、円形水槽2他が遺存するが、平成28年熊本地震で油倉庫は甚大な被害を受け、現在は震災遺産としての保存を熊本市へ要望中である。教育隊当時の飛行場や訓練風景等撮影写真約40枚が残されている。

⑦ 八代(やつしろ)飛行場

八代市鏡町北新地所在。文政飛行場の別称。昭和17年5月から干拓地に近郊住民及び学徒徒労働員で造成開始。幅250m、全長1,000m滑走路のみが完成。同年完成後は、部隊配置はなされず、着陸場として使用。敗戦後の8月20日に海軍艦爆母艦、23日に九五式中等練習機が復員の為に着陸。その部材は鍋・釜に転用され現存する。

⑧ 人吉(ひとよし)飛行場

第Ⅲ章第2節2項の人吉海軍航空隊基地跡の項を参照。

⑨ 天草(あまくさ)飛行場

天草市佐伊津に所在。佐伊津・御領飛行場の別称があり、水上機専用の飛行場。昭和19年3月第12連合航空隊博多海軍航空隊天草分遣隊、整備教育隊として発足したが、その後は水上機操縦の教育も行う。昭和20年3月、天草海軍航空隊として独立、第5航空艦隊第12航空戦隊に編入。昭和20年5月13日2機、6月21日には6機の零式水上観測機での沖縄特攻を実施。本部跡の高台には、沖縄作戦で亡くなった隊員の特攻慰霊碑が建立される。

現地の練兵場跡地は、規模を保ち佐伊津中学校のグラウンドとして使用され、海側には幅60m×奥行30mの斜路・スリップが半壊して遺存。また、北側凝灰岩崖面には、約30基の横穴格納壕が現存しており、それらは内部で連結され、一部にはコンクリート製の本部司令壕も良好に遺存する。本渡歴史民俗資料館に天草海軍航空隊展示コーナーが常設され、天空会誌、手紙、航空時計、グラウンド出土品等、戦意高揚で志柿尋常小学校に寄進された水上艇‘エフ5’の4枚プロペラが展示されている。

3. 昭和20年期：特攻用秘匿飛行場

本県における陸軍の秘匿飛行場は5箇所、海軍は設置されていない。順次概要を述べる。

⑩ 山鹿(やまが)飛行場

和水(なごみ)町竈門所在。戦史叢書に記載の「山鹿」飛行場と想定でき、小字名から赤穂原・竈門飛行場とも呼称。滑走路は全長1,000m、幅40m、台地下の菊池川より川原石を採集し表面に敷き転圧。昭和20年2月陸軍部隊の200人が国民学校、寺に駐中し、ブルドーザー1・ローラー2台、朝鮮人100人と直営工事で完成。その後はトラックレール等で封鎖し秘匿。当時の証言から、土製無蓋掩体壕の5基が滑走路北側の傾斜地に設営されるが、現存

していない。なお、昭和20年2月近隣の玉名飛行場より、特攻用の練習機2機を陸路移送し、江田国民学校講堂で敗戦まで保管。昭和20年7月、第三十戦闘飛行集団の配当飛行場となったが、部隊の常駐はなく敗戦を迎える。

⑪ 植木(うえき)飛行場

合志町木原野所在。戦史叢書内に記載の「植木」飛行場と想定でき、小字名から木原野・合志飛行場とも呼称。弁天山南側が起点で、南北方向の全長1,500m、幅100mの滑走路。合志川より川原石を運び、天地返して埋め込み、表面はブルドーザー2台で削平転圧。滑走路はツツジ植栽の移動式木箱でカモフラージュし封鎖。昭和20年4月から陸軍陸第七〇五六部隊が直営工事し、6月には完成。その後、敗戦まで靖部隊(第239飛行場大隊)が野々島集落教法寺他に駐屯。弁天山南側民家隣接畑地に木製有蓋掩体壕1基のコンクリート基礎部が残されている。昭和20年7月、第三十戦闘飛行集団の配当飛行場となるが、部隊の配置はない。

⑫ 大津(おおづ)飛行場

大津町古閑原・三本松所在。戦史叢書に記載の「大津」飛行場と想定でき、小字名から古閑原飛行場とも呼称。昭和20年3月陸軍部隊が測量し、滑走路は、国道325号線の東側に位置し、全長1,000m程度で東西方向に整備、滑走路北側には掩体壕5基の造営、燃料秘匿のためのドラム缶埋設を行う。現在の室中核工業団地敷地側にも誘導路1と掩体壕1が延伸されていた。昭和20年7月、第三十戦闘飛行集団の配当飛行場となる。

⑬ 熊本北(くまもときた)飛行場

阿蘇郡西原村高遊原所在。戦史叢書に記載の「熊本北」飛行場と想定でき、小字名から高遊原飛行場とも呼称。阿蘇郡西原村と下益城郡益城町との境、現熊本空港付近に所在。昭和20年4月頃、陸軍直営部隊で造営された模様。現空港滑走路東端付近から、東西方向に平坦な原野を全長1,000mにわたり利用し、周辺にはそば畑も広がる。昭和20年7月頃、駐機所には鉄網を敷設し九七式戦闘機3機が常駐し、周辺部には燃料秘匿のためドラム缶埋設を大津中学生徒が実施する。本秘匿飛行場は7月、第三十戦闘飛行集団の配当飛行場となる。

⑭ 人吉(ひとよし)飛行場

第四章の陸軍人吉秘匿飛行場の項を参照。



写真1: 熊本県球磨郡あさぎり町の風景 高山から陸軍人吉秘匿飛行場方面を望む



くまもと戦争遺産・文化遺産ネットワーク『くまもとの戦争遺産ガイドマップ』

附図1 熊本県内戦争遺産と旧軍飛行場位置図

第三章 人吉・球磨の軍施設と木製有蓋掩体壕

第1節 立地・地理的環境

陸軍人吉秘匿飛行場が位置するあさぎり町は、熊本県の南部、球磨盆地の中央に位置し、南は宮崎県えびの市、小林市に接しており、日本三大急流の一つに数えられている球磨川、国道219号線、くまがわ鉄道が町の中央部を東西に、陸軍人吉秘匿飛行場の北側を走っている。

地勢は、盆地の中央部を縦割りする形で町の北と南側が山地となっており、両側の山地から流れ込む球磨川の支流に沿った形で穏やかな平地を形成している。

陸軍人吉秘匿飛行場の位置する水田部は西側には免田川、東側には井口川、北側に中球磨盆地を潤す灌漑水路である「百太郎溝」に限られた地帯である。

気候は比較的温暖多雨であるが、盆地特有の内陸的気候となっており、年間を通じて霧の発生が多い地域でもある。

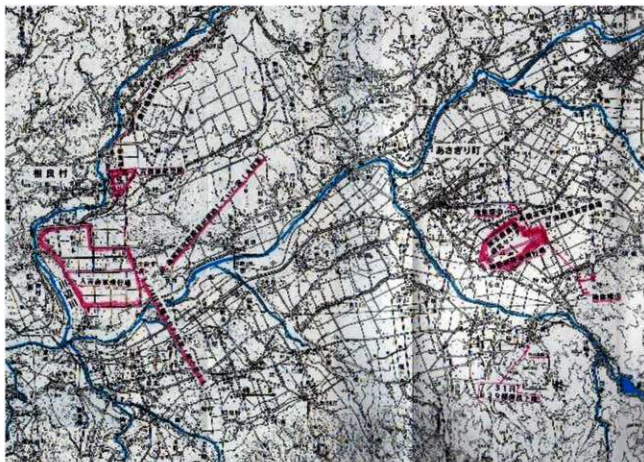
このように本地域の気象は、航空機の飛行条件として決して良好で

はなく、本飛行場の選地にあたっては、あくまでも地勢要因と戦時判断が優先したものと想定できる。

本飛行場の所在するあさぎり町は、旧須恵村、旧深田村、旧上村、旧岡原村、旧免田町の5か町村が2006年の平



第2図 あさぎり町位置図



第3図 海軍人吉飛行場跡と陸軍人吉秘匿飛行場の位置関係図

生訓練は中止し本土防衛協力を行う。その後は簡易兵器、松根油製造、爆弾運搬用木箱製作、諸自活作業を行う。華山海軍航空隊「飛行隊」をはじめ各地の操縦訓練や飛行機疎開等を受け入れ、昭和20年7月10日解散。敗戦時には中練機特攻部隊が、近郊の錦町木上集落に分宿。昭和20年2月18日、5月14日の両日に米艦載機による空襲を受ける。

本航空隊施設は二分され県道33号線を挟み南側の新立・由留木周辺部には「飛行場地区跡」があり、地上には河原石で造作した正門1、格納庫基礎部2、方形水槽4他が遺存。地下には木上加茂神社裏RC壕「地下魚雷調整所」、地下作戦室RC壕、地下無線室RC壕、設営隊壕、兵舎壕、弾薬庫壕、地下格納庫壕、無蓋掩体壕・地下倉庫(未確認)他が遺存する。



写真3: 人吉海軍航空隊・飛行場の航空写真
 1945年5月18日米軍撮影 国立国会図書館憲政資料室蔵

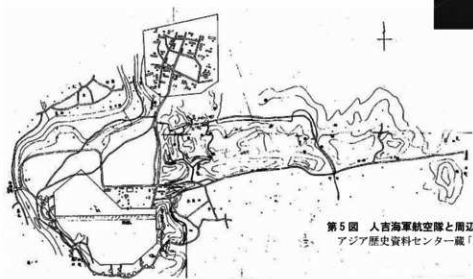
北側の人吉農芸学院周辺部には「教育隊庁舎兵舎地区跡」がありには、隊門のほか練兵場土塁、耐弾式地下発電所(大型水槽1)、防火水槽3、避難兵員・交通壕2他が遺存する。高台下を流れる川辺川からは、高原大地に灌漑用の飛行場用水路も導引し現在も利用する。



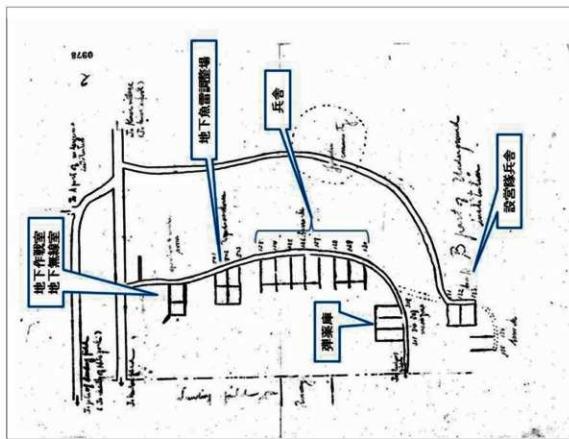
写真4: 上 教育隊庁舎兵舎地区の隊門

写真5: 中 飛行場地区跡の格納庫基礎

写真6: 下 飛行場地区跡の魚雷調整壕

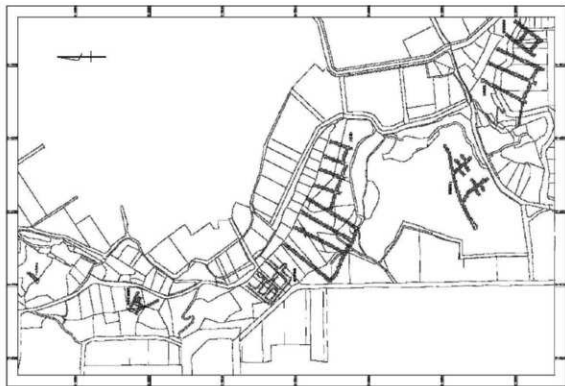


第5図 人吉海軍航空隊と周辺部の戦時状況図
 アジア歴史資料センター蔵「軍需品引渡目録人吉地区」図面



新6図 飛行場地区の地下施設配置状況図

アジア歴史資料センター蔵「軍用品引渡目録入吉地区」内の「英字社釈図面」に福田良氏が施設名称を記入、福田氏提供



新7図 入吉海軍航空隊基地跡1区(本部作戦地区)地下壕位置図

(熊野教育委員会提供)

3. 第二十二海軍航空廠人吉分工場

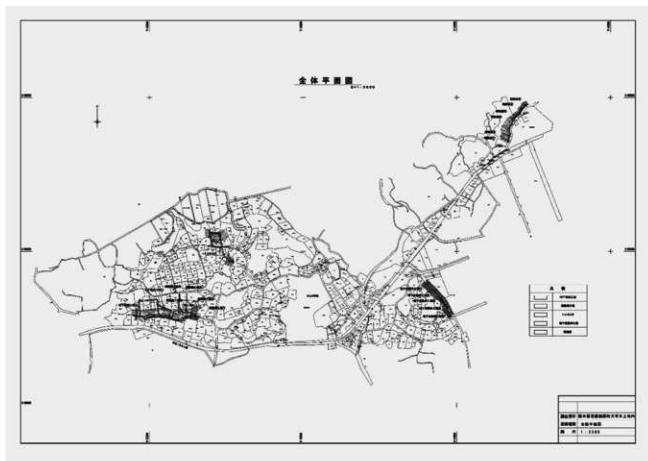
海軍鹿屋航空隊には、戦前から真珠湾攻撃計画を練った第五航空艦隊司令部が設置され、戦中は日本最大の特攻基地となり、総勢で908名もの特攻隊員を送り出した基地でもあった。基地に隣接して、昭和16年10月1日の海軍航空廠令に基づき第二十一海軍航空廠(大村)鹿屋支廠を置き、昭和19年9月1日には施設拡充に伴い第二十二海軍航空廠として発足した。

海軍航空廠とは、海軍航空隊で用いられる軍用機の製造、部材の調達、保管、各種修理などを行う施設である。現在、本飛行場は海上自衛隊鹿屋基地となり、基地内には航空廠の鋸屋根工場建物、空襲待避の防空壕1基が残されており、資料館には空襲時銃撃の跡が残る工廠鉄柱も展示されている。本人吉分工場は出水分工場とともに本廠の分工場である。



写真7: 迫地区の機械工場

現在、「地下工場地区」と示される野間・迫・岩城周辺部には、機械工場、設営隊兵舎、自動車工場多数が残されている。



第8図 人吉海軍航空隊地下工場地区地下壕位置図 (錦町教育委員会提供)

4. 佐世保鎮守府軍需部施設

昭和20年決六号本土決戦準備の為、資材・燃料等を備蓄するために敗戦間際には多くの横穴壕が掘削された。昭和20年5月の陸西作命丁第二十号により、弾薬・燃料・糧秣被服陣中用品・衛生材料・獣医材料の交付計画が示され、作戦軍では作戦用資材を集積するための簡易洞窟の構築を、「第三期ホ号演習」と称し、熊本師管区で実施された。

人吉地区は、南九州決戦に対しての予備集積地となり「簡易洞窟構築要領」で兵器・貨物に関して、「格納物件に対する洞窟要量は計45,000立方メートル、全長7,893メートルの洞窟延長」を7月末までの工事完成時期も示された。

佐世保鎮守府軍需部鹿児島支部人吉出張所主管で、先述の本土決戦準備の為、資材等の備蓄を行った。施設設営は第521設営隊が行い、資材保管用隧道や地下工場の建設を担当した。現在「資材備蓄地区」と示される白坂・山下周辺部には、地下倉庫壕、地下兵舎壕、地下機械工場壕、地下発動機工場壕、地下自動車工場壕他多数が残されている。なお、敗戦時に残された本施設保管の航空機機材・軍需品等の引渡は目録を作成し、佐世保経理部鹿児島支部人吉出張所が残務整理を行っている。



写真8: 白坂地区の補給備蓄壕

5. 人吉球磨の軍需・疎開工場

球磨地方には、本土決戦に向けて多くの軍需工場等が分散疎開している。『熊本県警察史 第2巻 大正・昭和』昭和20年5月10日現在での記述状況を記す。

- ①小倉兵器廠補給所(福岡県小倉市)→深田村字荒尾奥高山一帯・着工中。
- ②鹿屋航空廠(鹿児島県)→深田村東部高地付近一帯・横穴掘削中。
- ③宮崎陸軍病院(宮崎県)→湯前町田上・馬場方面の部落・準備中。
- ④球磨鉄工有限会社(人吉市駒井田町)→渡村、一勝地村奈良口・疎開中。
- ⑤第二十二海軍航空廠人吉分工場(木上村)→木上村、深田村の分散・隧道53本工事着工中とある。

なお、人吉海軍航空隊教育隊庁舎兵舎地区の横に通称「岡本工場」と呼ばれる工場建物・作業員宿舎が残されている。

戦後本建物は地元酪農組合が事務所及び乳牛舎として利用し、当時写真には「岡本工機工作場跡・192坪」と書かれている。本工場沿革は、調査中で詳細は不明であるが、昭和11年4月にそれまでの「株式会社 岡本自転車・自動車製作所」から「岡本工業株式会社」に社名を変更した本工場の「人吉工場」であることが聞き取り調査等から判明している。

平成27年1月高谷の調査で、人吉市内個人宅で航空機主脚のタイヤに掛かる主脚下部部品「トルクリンク」が発見された。全長18cm、横10cm、中央に肉抜き穿孔、材質はアルミニウム合金鋳物で、その特徴的な形状等から陸軍四式戦闘機「疾風」の部材であることが判明した。ただし部品には「製造番号・社印刻印」がなく、未使用品と想定された。

県内で岡本工業株式会社航空部品は、戦後菊池飛行場の大刀洗航空廠菊池分廠から持ち出された未使用の中実ソリッド構造200径の後期尾輪がある。リムには陸軍「星章」に金色塗彩「〇」に「IS」刻印、さらに「S」刻印、□(不明)岡本工業株式会社 No14223 が刻まれている。

本工場に関わる詳細な今後調査が望まれる。



写真9: 通称「岡本工場」の現存建物



写真10: 陸軍四式戦闘機疾風の主脚下部部品で「トルクリンク」

6. 防空施設

人吉・球磨地方での防空施設は、肥薩線球磨川鉄橋への三箇所である。また、短期間地域の防空のため現山江村役場横公園の高所に高射砲配置の証言もある。

① 陸軍熊本師管区高射砲隊

沖縄作戦の進展に伴い、特に南九州の戦備を速急強化するために、昭和20年5月、熊本師管区高射砲隊が西部高射砲集団を母体として編成された。高射砲第百三十二聯隊第二大隊が熊本県内(健軍飛行場・三菱飛行機工場・機関庫、高瀬川鉄橋、緑川鉄橋、球磨川鉄橋)及び大分(大分川鉄橋)に配置されている。装備は特七高二中隊、八高五中隊で、砲36門である。(「陸西作命甲第百十八号」)

県内先行調査例では、各地区2～6門の配置で、球磨川鉄橋防御に関しては、鉄橋左岸の八代市現高田小学校校庭に高射砲砲6門、鉄道横に高射砲6門、鉄橋右岸の古麓に機関砲3門が配置されていたことが判明している。このことから人吉には配置せず、優先度の高い八代地域に全部隊を配置していたことも想定される。

② 陸軍特設機関砲隊

管内の「重要交通施設の防空強化」のため、主に鉄橋防御のため、昭和20年5月に編成された高射第四師団に属する第1機関砲教育隊の一部隊である。装備は十三耗機関砲、配置は球磨川第一鉄道橋梁に6門、球磨川第一鉄道橋梁に2門、球磨川橋第三鉄道橋梁に2門の計10門である。(「陸西作命甲第百四十五号」)。人吉地域2箇所の現地配置状況の詳細は判明していない。

③ 海軍機関砲部隊

錦町発行『人吉海軍航空隊基地跡』リーフレット内地図の渡地区の球磨川第三鉄橋横に「海軍第四機関砲隊」の配置が示されている。この部隊は、証言では五名市菊池川鉄道橋梁の防空のために配置された海軍高射機関砲隊の半分であり、指揮官は両所を兼務していたという。菊池川では機関砲は3基であり、部隊員は50名程度、高瀬尋常小学校講堂に逗留していたとの証言を得ている。

第3節 木製有蓋掩体壕

1. 掩体壕

掩体壕は軍事用語では「掩体」と称している。ここでは飛行機を守る設備であるので正しくは「飛行機用掩体」と言うべきものであるが、これまで慣例や地元等での呼称にあわせ掩体壕と言う。

掩体壕は、太平洋戦争後半期に、連合国軍の空襲から、飛行場の周辺部に分散して作られた半地下式の防衛用の格納施設である。村上康蔵分類に沿って掩体壕概要を述べる。(村上康蔵「掩体壕のいろいろ」『日本の戦争遺跡』平凡社新書)

掩体壕には有蓋と無蓋の二種類がある。

(1) 有蓋

有蓋には、①アーチ部補強コンクリート型②無筋コンクリート型③木造型④横穴型⑤トンネル型の5類型である。概要をまとめると次のとおりである。

① アーチ部補強コンクリート型

コンクリートの補強に鉄筋を利用するが、希に竹筋・木筋もある。形状として、陸軍では、ドーム形後半部。海軍

では、次第に狭くなる平面形と奴型の2種である。全国で約1000基ほど造成されたと思われる、現存は約100基弱である。宇佐市城井1号掩体壕例。

② 無筋コンクリート型

補強材のないタイプ。鹿児島笠之原飛行場例、沖縄読谷北飛行場例。

③ 木造型

基礎はコンクリートで、アーチ部に木材を利用する。千葉県松戸飛行場例、奈良県柳本飛行場例、山梨県ロココ例、熊本県神原例。

④ 横穴型

地山崖状になった箇所に造られ、千葉県大東飛行場例、岐阜県各務原飛行場例

⑤ トンネル型

横穴型をさらに大型にしたもので、神奈川県追浜飛行場例。

(2) 無蓋

無蓋には、土塁式、石垣式、斜面式の三種がある。

① 土塁式

周辺部の土を土手土塁状に盛り上げて、基本コの字状に囲んだもの。臨時的に素材として土嚢やドラム缶等を用いる場合もあり、平面形も単機から3機用と軍教本に示されたように多様である。全国に分布する無蓋型の大多数はこの形状であり、上部には偽装網や竹・枝等で迷彩を施した。熊本県内では、熊本市長嶺町の健軍飛行場の飛龍用の大型壕、菊池市菊池飛行場の小型掩体壕の計2基が確認される。人吉海軍航空隊無蓋掩体壕は未確認である。

② 石垣式

沖縄県石垣島では、素材として石垣を用い、単機構造である。

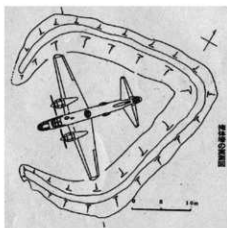
③ 斜面式

緩傾斜面を利用してコの字形状に切り土する。岐阜県各務原飛行場例など多数が見られ、熊本県内では玉名飛行場天水地区に1基見られる。



写真 11: 健軍飛行場陸軍四式重爆撃機「飛龍」用無蓋掩体壕の様子

熊本市東区長嶺南に残されていたが現在は消滅。



第9図 掩体壕実測図 (熊本市文化振興課提供)

2. ロタコ(山梨県南アルプス市・御勤使河原飛行場)と木製有蓋掩体概要

(1) ロタコ(山梨県南アルプス市・御勤使河原飛行場)の概要

本木製掩体壕の調査に際して、先行事例として山梨県南アルプス市に所在する「ロタコ(御勤使河原飛行場)」の調査概要を、報告書から要点のみ抜粋する。

御勤使河原飛行場で言うロタコの「ロ」は、イロハのロ、つまり第2番目を表し、「タ」は立川、「コ」は航空廠をそれぞれ表すと言われている。通牒のための戦時用語である。

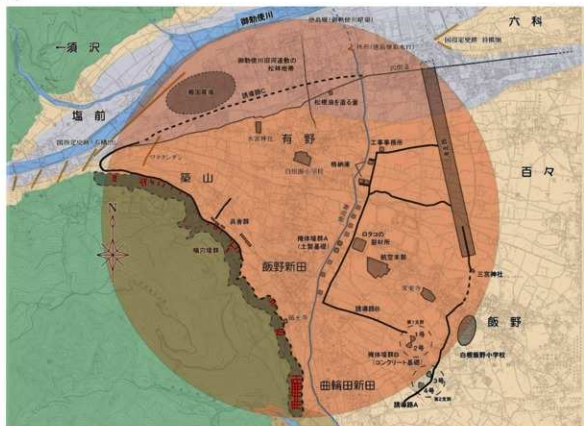
第2立川航空廠を表す暗号名といわれるロタコは、戦時中の文書等に「御勤使河原飛行場(みだいがわらひこうじょう)」などの呼称で記載され、第2次世界大戦終戦直前に東京の立川航空廠の機能を分散する目的で甲府盆地の西部、御勤使河原扇状地の扇央部を中心に構築が計画された秘匿飛行場である。

秘匿飛行場という性格からか、滑走路や飛行機を隠した掩体壕、誘導路、地下壕、兵舎、航空本部などロタコを構成する諸施設は、3km四方約800㍍という広大な範囲に分散し配置され、扇状地やこれに接する山地の山裾に点している。

建設工事は、一部昭和19年の秋頃から始まり、敗戦の年である昭和20年の3月から地域住民を総動員して、終戦の日まで続いた。また、最も危険を伴う地下壕の掘削にはいわゆる「朝鮮人労働者」が従事していた。

2008年までの調査で、第2号・3号掩体壕跡・滑走路跡の発掘調査が実施されている。また、1号掩体壕跡の実測調査、築山地区横穴式地下壕群の測量調査、ロタコ建設に従事した朝鮮人労働者の聞き取りから、文章として「記憶に残す調査」等が積極的に行われている。

これまでに、峡西の戦跡を調査する会、南アルプス市教育委員会文化財課で調査がなされている。南アルプス市より、2006年には『ロタコ概報』『遺跡で散歩 vol15 戦争遺跡「ロタコ」を歩く』の啓発・保存活用資料が刊行されている。



第10図 ロタコ(御勤使河原飛行場)全体配置図

(2) ロタコ(御勅使河原飛行場)3号掩体の概要

調査初年度の平成17年度に3号掩体壕、翌年の平成18年度には2号掩体壕の発掘調査が行われ、次の知見が得られている。これまでの調査・聞き取りで、ロタコでの掩体壕総数は4基である。「3号掩体壕の幅は約21m、奥行き16m程の規模」である。陸軍人吉秘匿飛行場1号掩体のコンクリート基礎部の完掘が出来ていないため、細緻は合致しないが、平面形態が同一であり、ほぼ同規格である。

コンクリート基礎部の前室両「袖部の間口間隔は15.5m」で、永山1号掩体と同値である。また、前室と後室への「2箇所」の袖間隔は6.0m」で、これも同値。後室の開口部も6.0mと同値を測る。「掩体壕内部の底面には幅9.7m、奥行15.0mの頑丈なコンクリート床面」が敷設されている。これは、永山1号掩体では未確認である。

ボルトの突出では、コンクリート袖部は2本、前室では7本と、陸軍人吉秘匿飛行場1号掩体と同数であるが、後室は9本と減じ異なる。



写真12: 3号掩体壕コンクリート



第11図 3号掩体壕模式図



写真13: 基礎部拡大



写真14: 3号掩体壕全景

第四章 調査内容

第1節 陸軍人吉秘匿飛行場の概要

1. 立地、設営

陸軍人吉秘匿飛行場は、熊本県球磨郡あさぎり町神殿原(こうどんぼる)、上北(うえきた)、上東(うえひがし)、岡原南(おかはるみなみ)の広い地域にわたり位置している。

本飛行場の現況の多くは水田地帯であり、県立南陵高等学校神殿原実習農場を中心として拡がっている。旧飛行場内には、あさぎり中学校、上総合運動公園、町立第2保育園、町立有機センター、県立農業研究センターが在在し、戦後入植の平和集落も滑走路横に拡がっている。

滑走路の西端は、あさぎり中学校正門・管理棟付近にあり、滑走路は全長1,300m、幅50m、東西方向で滑走していた。あさぎり中学校正門付近には、複座の複葉練習機5機が常駐しており、通常は幌を掛け駐機エプロンに待機していた。

飛行場の滑走路表面には、ぬかるみを防ぐために岡原村岡本の掘削した貯蔵用横穴塚からの岩滓、旧岡原村のアンチモニー鉱山跡からの鉱石滓を転圧素材として使用し、陸軍設営部隊トラックで運搬されていた。

造営に当たっては陸軍施設部が直営で行い、「靖二〇九〇三部隊」の約200人が直接設営した。なお部隊の一部は旧上村国民学校に宿泊し、ブルドーザー1台も常時使用した。設営部隊の一角を成すトラック部隊は、岡原藩島神社の境内に駐屯しており、トラック8台で編成されていた。



第12図 陸軍人吉秘匿飛行場滑走路跡位置図

現在の地図に戦後まもなくの航空写真を張り付けたもの
(国土地理院 WEB USA M685 28 1947/12/07 画像を引用し加工)



- 写真 15：左上 神楽原秘匿飛行場滑走路付近 ー現平和区集落祈念碑・公民館付近ー
 写真 16：右上 岡原露島神社境内 ー神楽原秘匿飛行場滑走路工事にあった陸軍自動車部隊の駐屯跡ー
 写真 17：左下 アンチモニー鉱山鉱道入り口 ー飛行場滑走路表面に転圧した鉱山の層石を採取していた跡地ー
 写真 18：中右 神楽原秘匿飛行場に労働徴用された「朝鮮人」労働者住宅跡付近 ー岡原南、岡本置、岡本谷入り口ー

また、昭和 20 年 4 月頃から、中球磨、上球磨の住民や青年学校の生徒、国民学校高等科卒業生をあつめて建設に着手したが、作業には「朝鮮人」約 50 人も携わり、住まいとなる長屋が田岡原村岡本に建てられた。

昭和 20 年 7 月頃に完成した神楽原秘匿飛行場では、通常は航続距離の短い複葉練習機である特攻機「と号機」が常駐し、練成に励んでいた。練習機は時には離着陸に失敗し、滑走路からはみ出し墜落し、付近の住民が救出したこともあったという。

2. 飛行場名称・呼称

本飛行場跡は、滑走路が県立南陵高等学校神楽原実習場に位置することから、当初 1 号掩体確認調査までは飛行場範囲を限定的に捉え「神楽原飛行場」と呼んでいた。

防衛庁戦史資料室刊行『戦史叢書 本土決戦準備 (2) 九州の防衛』には、本飛行場の名称は記載されていない。ただし陸軍資料「陸作命甲第二号 別紙資料」の第 13 図「飛行場配置要図」に飛行場名「人吉」との記載がある。

本図は「飛行場配置要図」と示すように、本州・朝鮮半島までを標記の範囲とする。九州地方のみでは、飛行場の位置がやや不正確であったり、一部は細密さを欠ききらいはあるが、「6FA」「30FC」の標記とともに、熊本県内においては状況を良く示している。北から、正規飛行場(正規は丸印実線標記)である「玉名、菊池、熊本、黒石原、隈庄、八代」が、特攻用の秘匿飛行場(秘匿は丸破線標記)として「熊本北、人吉」が示されている。

また、神楽原秘匿飛行場は 30FC として「隈庄、'人吉'」と標記され、鹿児島県内「知覧、萬世、上別府」、宮崎県内「都城西、都城東、木脇、唐瀬原、新田原」の南九州グループと一体化した事情が見て取れる。

このようにその後次いで発見された「掩体(壕)」が田岡原村側にも所在することから、錦町・相良村に所在する海軍人吉飛行場と区別し、飛行場配置要図に記載され破線で表示されている様に「陸軍人吉秘匿飛行場」として呼称する事とする。

第2節 先行調査された1号掩体壕の概要

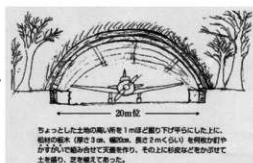
1. 調査の経緯と状況

本陸軍人吉秘匿飛行場1号木製有蓋掩体壕は、球磨郡あさぎり町上東1646番地那須明さん宅の裏山に位置している。現況は檜林で、一部誘導路には椎茸の栽培も行われている。周辺部の大部分は水田・畑地である。

完成した木製有蓋掩体壕には本土決戦に向けて大型艦船を目標とする小型特攻用の単発戦闘機(一式戦車や三式戦飛燕等)を空襲で損傷しないように隠蔽を優先した格納壕である。

昭和20年9月頃、那須明さん(当時21歳)が出征先の鹿児島吹上浜から復員した際に、自宅裏山に掩体壕が築かれていた。父親から

の証言では、「昭和20年4月～6月頃まで、飛行場がつくられ、その際に二基の木製掩体壕も、人吉の木工達を動

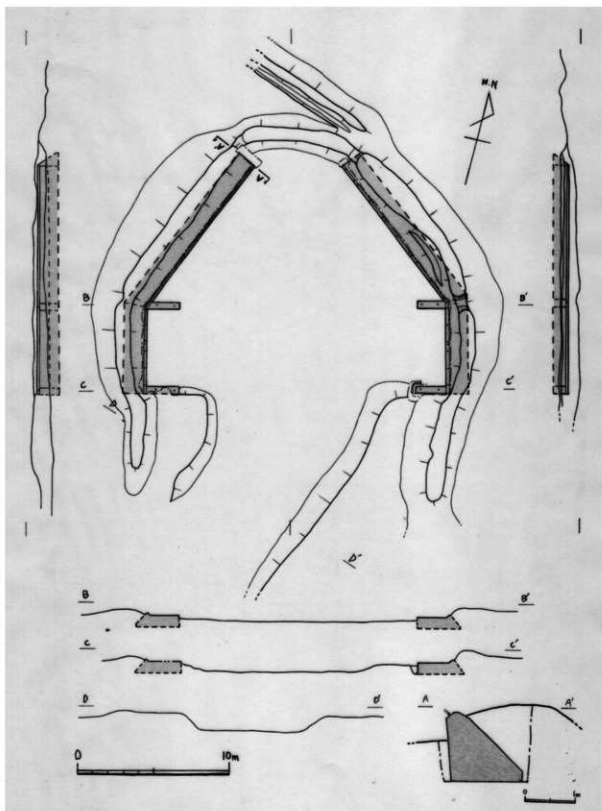


第15図 1号掩体壕の当初復元図

—山下完二氏作成— 『子どもと歩く戦争遺跡Ⅲ 熊本県南編』



第16図 平成20年4月1日・6月7日の調査の様子と永山1号掩体壕平面図での相關図



第17図 陸軍人吉秘匿飛行場1号掩体壕平面図
中央の平面図・断面図は、縮尺1/250
右下のコンクリート基礎部は、縮尺1/125

員して一気に作り上げた」とのことであった。敗戦後、納屋の改築ために木製掩体壕を父親と二人で解体した。現在、一部切断した方形基礎部連結材2本、納屋の床板用として梁材材約70枚が現存している。

これまで調査は、平成20年1月5日、4月1日、6月7日、9月27日の計4日間で、旧玉名荒尾の戦争遺跡をつたえるネットワーク（現くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク）が、町への文化財指定に向けての要望書に添付する資料として、独自に調査したものであり、そこでの調査概要は以下のとおりであった。報告者は本文執筆で同ネットワークの高谷和生である。

平成20年1月5日：『子どもと歩く熊本の戦争遺跡Ⅲ 熊本県南編』に記載されている内容の確認を現地で行う。地権者那須明さんの聞き取り、現地コンクリート露出部の写真撮影を実施する。

平成20年4月1日：球磨郡退職者協議会の山下完二氏と二名で、地権者了解の基、コンクリート基礎部の一部掘り下げを2箇所行う。当初予想した以上に、コンクリート部の遺存状況状態は良好であった。また、山梨県南アルプス市ロタコ例の3号掩体壕の形状に酷似することから、今後の継続調査の必要性を感じた。

平成20年6月7日：関係各所への連絡調整の基、1日間であるが、玉荒戦跡ネット4名、球磨郡退職教職員協議会3名、あさぎり町教委1名、球磨工業高校建築科教諭4名での合同調査を実施する。コンクリート部の露出、四箇所の掘り下げ、平板測量、実測、遺存柱材の現地での該当箇所の充て作業等を実施する。当面の平面形状は確認したが、詳細箇所は本格的な発掘調査による必要を痛感した。

平成20年9月27日：玉荒戦跡ネット末永崇氏・高谷和生、球磨郡退職者協議会山下完二氏の計3名で平板図の補足作業、断面図作成、木材の実測作業等を行う。

平成21年1月6日：玉荒戦跡ネット高谷和生、球磨郡退職者協議会山下完二氏とあさぎり町教育委員会への調査概要を説明。県立球磨工業高校への今後の調査依頼等をさらに行う。

2. 1号木製有蓋掩体壕の構造

1号木製有蓋掩体壕は、滑走路東側端の永山集落の那須明氏宅の裏山に所在する。

掩体壕は飛行場滑走路には直面せず、南側に向け開口している。滑走路までの直線距離は約1,000mであり、南側に向け斜行する、幅約10mの誘導路が12m程続き、先ではクランクして滑走路へと直進する。

掩体壕の平面形状は陸軍の小型規格納壕であるホームベース型もしくは奴型であり、その規格は次のとおりである。

- コンクリート基礎部の縦(南北主軸方向)：15.5m
- コンクリート基礎部の横(東西方向)：23.0m
- 掩体壕部長辺(南北方向)・誘導路部より後部部の排水用側溝：24.0m
- 掩体壕部短辺(東西方向)・両側の掩体壕盛土部：27.5m
- コンクリート両袖間(東西方向)：15.5m
- 後室開口部横幅：6.0mを測る。

本掩体壕は、構造説明及び材特定の関係から便宜上、開口部側を「前室」、三角形に絞り込んだ箇所を「後室」と呼称する。

外面ホームベース形状・奴形状を全周するコンクリート基礎部は、後室左端部の断面形は図示するように、内面が弱く内傾する三角形である。基礎部の最底面はアカホヤ上面であり、全高は145.0cm、底面横幅130.0cm、頭頂平坦部15cmを計測する。また、基礎部連結材A・B材をボルトで固定する内傾する面は23cmを測り、連結材の横幅よりやや幅広い。

コンクリート基礎部より突出した鉄製ボルトは、径3cm、長15cmを測り、全てコンクリートに埋め込まれている。ボルトの取り付け位置は、4基ある袖部には2本ずつの計8本、前室片方に7本の両方で14本、後室片方で12本の計24本の総計46本である。

前室入口の袖部、前室と後室の変換点にある各々2基のコンクリート袖部は、内側に2m幅入り込み、全高は100cm、幅50cmで、両袖間は6mを測る。

なお、掩体壕内部の掘り下げが檜の植栽の関係から実施しておらず、ロタコ例に見られるような「コンクリートの頑丈な床面」の有無は次回以降の課題である。

後室開口部の外側には、幅1mの排水用の小溝が掘られており、証言では当初からの設置と判断される。

掩体壕の外周にある土砂の盛土は、解体時に厚30cm程盛られていた土砂の除去のあとであり、下層に水切り溝等の有無は確認できていない。特に、前面袖部周辺には多量の土砂があり、コンクリート基礎部の確認が必要である。



写真19: 左 コンクリート基礎部の本体掘り下げ状況



写真20: 右 コンクリート基礎の袖部掘り下げ状況

3 遺物 木製有蓋掩体で使用された木製品

敗戦後、1号掩体壕の所有者である那須さん宅では、納屋の改築のために木製有蓋掩体壕を父親と二人で解体したという。現在、一部切断した方形基礎部連結材2本、納屋の床板用として掩体壕の梁板材約70枚が現存している。

(1) A材(方形ほぞ穴を持つ角材・基礎部連結材)

A材は、方形ほぞ穴を持つ角材で、コンクリート基礎部に連結する「基礎部連結材」で、1点が遺存する。解体時に収納の為、便宜的に先端仕口部80cmをのこぎりで切断している。

全長は320cm、一辺は18cm(ほぞ穴面)×15cmの長方形、芯持ちの広葉樹材である。本材の特徴は、方形ほぞ穴5個を有し、片面に仕口形状を有することである。仕口はL型で仕口の先端には貫通したボルト穴を有している。

コンクリート基礎部に連結するボルト穴は径4cmで、4個穿たれた物は貫通せず、15cm～18cmで止まっている。ボルトでの固定はせず、材のズレを防ぐための穿孔であると判断できる。ボルト間隔は芯芯間で115cmと22cmであり、現地での敷設ボルトの2種類間隔と合致している。なお、現地にコンクリート基礎部に埋め込まれているボルトは径3cm、突出長は15mmである。

基礎部連結材に穿かれている方形ほぞ穴は、いずれも材長軸側に長い10cm×7cmで、深さは平均して6cmである。



写真21: 納屋の床板に利用された梁材



写真 22：左 那須 明さん宅に保管されていた方形基礎部連結材 2本

写真 23：中 長方形ほぞ穴を有するA材

写真 24：右 A材全長



写真 25： 長方形ほぞ穴を有するA材仕口部



写真 26： A材の長方形ほぞ穴部の拡大と釘打ち方向

残存 5 個のほぞ穴間隔は、芯芯間でいずれも 60cm の間隔を保つ。奴型の前室部での梁間隔が 60cm を設計したことが判断できる。なお、梁板材 3 枚の基礎部連結材への固定は、証言のとおり釘 2 本で互いからの斜方向での打ち込み痕跡が、いずれのほぞ穴部の小口両側にあり、6～7mm 程の打ち込みが確認できる。

(2) B材(平行四辺形ほぞ穴を持つ角材・基礎部連結材)

B材は、平行四辺形ほぞ穴を持つ角材で、これもA材同様のコンクリート基礎部に連結する「基礎部連結材」と断定でき 1 点が遺存する。これも解体時に収納の為、便宜的に先端仕口部 80cm をのこぎりで見切している。

B材は、全長は 370cm、一边は 18cm(ほぞ穴施工面)×15cm の長方形、芯持ちの広葉樹材である。B材は、A材よりも 50cm ほど長い。使用が想定される、奴型後室のコンクリート基礎部規格に合わせたものと想定できる。

本材では、A材が方形ほぞ穴であるのに対し、平行四辺形ほぞ穴 5 個を有し、片面に仕口形状を有している。先端仕口も、A材同様に L 型で仕口の先端付近には貫通したボルト穴を有している。

2 本の材の固定を仕口だけでなく、ボルトを併用していたことが想定できる。

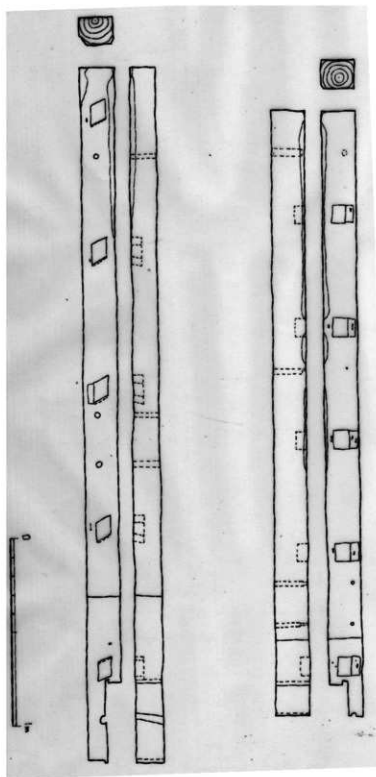
コンクリート基礎部に連結するボルト穴は径 4cm で、3 個穿たれた全てが貫通している。この部位でボルト固定を行っていたことが判断できる。ボルト間隔は芯芯間で 138cm と 26cm であり、現地での敷設ボルトの 2 種類間隔と合致している。

基礎部連結材に穿かれている平行四辺形ほぞ穴は、いずれも材長軸側に主軸を持つ長さ 10cm×10cm で、深さは平

均して6cmである。B材での残存5個のほぞ穴間隔は、芯芯間でいずれも75cmの間隔を保つ。

ただし、梁間隔は前室部と同じく、平行に60cm間隔に保たれ、奴型後室部も前室と同様であったことが伺える。なお、この材にも梁板材3枚の基礎部連結材への固定法として、釘が用いられているが、A材の様に多数の痕跡はなく、数個がほぞ穴周辺に確認できる。

本資料の仕口部の内面には墨書で「左2」の銘が残されている。



第18図
陸軍人吉秘匿飛行場1号掩体壕利用の基礎部連結材(A材・B材)実測図
縮尺 1/20



写真 27： 左 B材・仕口部全容

写真 28： 中 B材・平行四辺形ほぞ穴形状拡大

写真 29： 右 B材・平行四辺形ほぞ穴材全長



写真 30： B材・仕口部仕様



写真 31： B材・仕口部拡大「左2」墨書

(3) C材(天井を支える梁板材)

二種遺存している梁板材の大多数を占める材である。

平面形は長方形で、長辺一辺が緩やかな曲線形状を成している。この曲線形状は、写真 32 に示すように、連続して繋げれば、掩体壕のドーム形屋根形状のカーブをそのまま表しているものである。

本材の材質は一見して杉材、松材がみられるが、詳細の樹種同定は成されていない。また、いずれの材も、表面には多数の釘痕跡が顕著に見られる。

本材の規格は、今回調査した材の9割以上が、全長・長辺側 140cm、全幅・短辺側 20～16cm、厚 30mmを測り、規格化された材形状を成している。なお、A・Bの基礎部連結材のほぞ穴に、差し込む為の、先端をほぞ形状(横長 10mm、深さ 5mm)に凸型に突出させて加工した材も当初は存在したが、解体時に先端部を全て切り落としたとのことである。材の切り落とし状況は確認できていない。

なお、梁材の造作に当たっては本材C(全長 140m、幅 20～16cm、厚さ 3cm)の平板3枚をずらしながら、釘により結束する手法をとる。

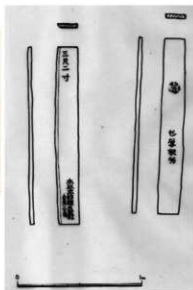
また、図では表現していないが、梁材の長辺側片面には、釘痕跡が見られることから、ドーム型天井部の造作では、証言では得られなかった「薄板状部材」で梁間を渡して、杉皮・土砂の覆いを行っていたことが想定できる。



写真32:左 C材を用いての梁材復元の様子



写真33:右 C材での復元のほぞ部にみの拡大



第19図 梁板材(C材)実測図 縮尺1/30

(4) D材(天井を支える梁板材)

二種遺存している梁板材の少数の材である。

平面形は、長辺側に緩やかな曲線形状を有しない、通常の長方形状で、写真34に示すようにC材よりも短い。全70枚中で2枚にみである。

本材の規格は、全長・長辺側100cm、全幅・短辺側20cm、厚30mmを測る。全幅がC材と同規格であるので、梁材の一部の材と想定できるが、部位の特定には至っていない。

材質はC材同様に杉材で、表面には結束のための多数の釘痕跡が顕著に見られる。



写真34: D材・上から2本目
材で平面長方形形状を有する

(5) 梁板材への墨書及びステンシル書き銘

今回、那須氏がハウス小屋に所蔵されている板材を調査した。短時間の調査ではあるが、実見できた資料の中に墨書及びステンシル書き銘での記述、記載されたものがあり、その一部を写真添付し紹介する。

なお、詳細については、那須明氏宅の納屋の天井板に材約50枚が張り込み利用されているので、継続した調査が今後も必要である。特に、墨書銘の確認が最小限必要である。



写真35:左
マーク“O”に“熊”か



写真36:右
“本熊木材株式会社人吉第二工場”か



写真 37 : 上左 “杉厚板” と “O” か

写真 39 : 中 “三月二十一日か”

写真 40 : 下左 “A2C” か

写真 38 : 上右 “三尺二寸”

写真 41 : 下右 “O割梁O2か”

第3節 発掘調査等の概要

1. 2号木製有蓋掩体壕

(1) 調査方針と当初概要

2号木製有蓋掩体壕跡は、あさぎり町上北字宮床2819-36番地に所在し、所有者は近隣の稲留真由美様である。町道に隣接し、町道開通時に用地の半数が敷地と成り、建設により直ぐ脇は盛土されたという。一方、掩体壕開口部側の北側は、その後の圃場整備で、地下げが行われ、用水路掘削時に左側袖部コンクリートが上部三分の一程度露出していた。

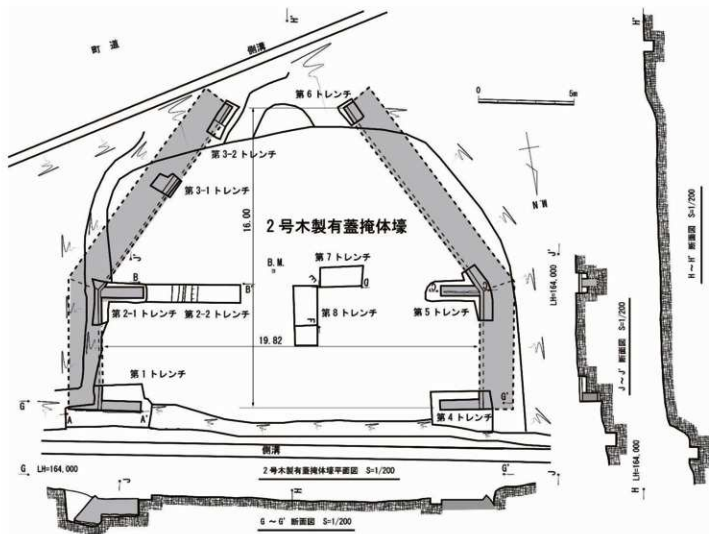
戦後間もなく掩体壕は稲留家で解体し、使用の木製品は小物や焚きものとして使用したとのことである。

現在は遊休地であり雑木等の伐採、除草等により調査範囲

の確定をまず行った。調査概要はトレンチ調査での構造・範囲確認である。周辺地形図作成、遺構配置図作成、トレンチ部分詳細図(平面図・調査期間は、平成27年9月19日～23日である。



写真 42: 2号木製有蓋掩体壕の調査時当初の全景
町道側から見た 2号掩体の様子と市民グループ
作成の掲示看板



第20図 2号木製有蓋掩体壕平面図 縮尺 1/200

(2) 2号木製有蓋掩体壕各トレンチ(試掘坑)の概要

ア 第1トレンチ

前室左袖1のコンクリート基礎状況を確認するために設置。基礎部では袖部平面幅 50.0cm、全長 210.0cm、2箇所の鉄筋金具(アンカーボルト・径 13mm、長 18.0cm)が設置されており、現況では折れ曲がっている。

コンクリート基礎部の掘方は、IV層の地山アカホヤ土まで掘り下げ打設後に 30cmの客土埋め戻しを行っている。ここでは 3回に分けて打設されており、最下層には中型栗石を並べ、その上にコンクリートに小型栗石を混ぜて直打ちでの割栗地業の状況である。

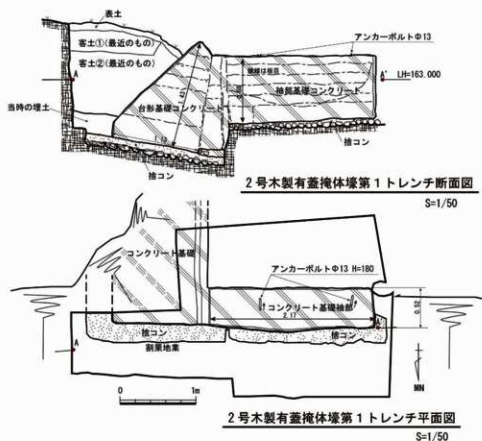
台形基礎部は内深部側に傾斜した斜方向打設で台形基礎が1番、袖部との境部は2番、長方形形状の袖部は水平方向での3番の打設順番となる。

台形基礎部フーチングも捨てコンを敷きならした上での直打ちである。

根切り底は水平ではなく内側に「14度の傾斜」をとっており、全体の重心位置の関係からか、内傾する形状と現地施工となったものと想定される。2号掩体の右側部は掘り下げができていないことから、同様に内傾するのは不明。ちなみに3号掩体左側部には内傾は見られない。



写真 43: 第1トレンチ作業風景



第 21 図 2号木製有蓋掩体壕第1トレンチ平面図・断面図 縮尺 1/50

カ 第5トレンチ

前室・後室の変換点、右側奥の袖部に袖部状況を確認するために設置した。

ここでは、上面ボルト部に装着されたままの状態、木製部材の遺存が確認できた。袖基礎部に設置された木製部材は小径材で、ほぼ半裁されており、戦後解体時の取り上げの残り部材の遺存と考えられる。

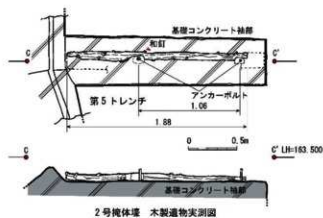
材は、全長190cm、推定径は20～25cmの雑木材(樹種は未鑑定であるが広葉樹系材と想定)を用い、天場は平坦にして方形形状に揃えている。

材は固定する金具に合わせ横長楕円形の穿孔を有しており、その形状からスペーサーを部と隙間が生じることから、金具には径を大きくする鉄製スペーサーが挟み込まれている。

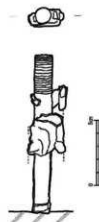
なお材部横から鉄釘2点(全長25mm、全長60mm)が出土している。



写真44: 第5トレンチ作業風景



第23図 2号木製有蓋掩体壕第5トレンチ出土木製品実測図
縮尺 1/40



第24図 2号木製有蓋掩体壕第5トレンチ左袖基礎部アンカーボルト実測図
縮尺 1/3

キ 第6トレンチ

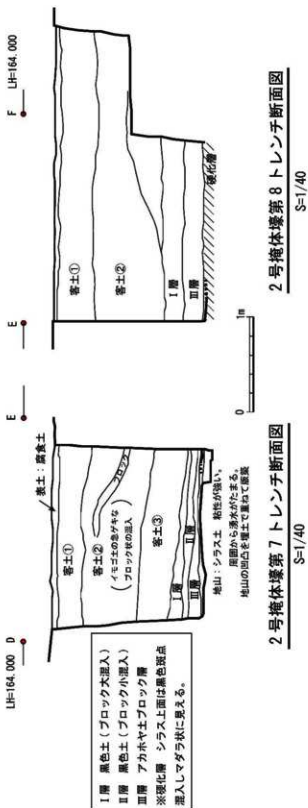
掩体壕開口部コンクリート基礎部の状況把握のため設定。舗装された道路横に奥室の右側コンクリート基礎尻部・端部を確認できた。

ク 第7トレンチ

調査区中央部に、東西方向で奥側袖部の延長上に床面確認のために設定する。表土から最大深度180cmでシラス土(地盤)に到達し、薄くシラスに黒色斑点が入る10cm厚の踏みしめ層を硬化面として認識する。

ケ 第8トレンチ

調査区中央部、南北方向での床面確認のため設置した。第7トレンチ同様に2期に亘る客土(客土①は機械での押し込み、客土②は敗戦後の急激な解体による客土層と判断する)が主体を成す。本掩体壕床面には、コンクリートスラブの打設は見られなかった。



第25図 2号木製有蓋壕体壕第7・第8トレンチ断面図 縮尺 1/40

コ 2号木製有蓋掩体壕の環境整備

見学公開等で不要なトレンチは埋め戻し、オープン部には土嚢を置き、縁辺部の補強を行う。また、基礎部から突出したボルトには、土嚢を突き刺し、安全管理を行う。さらに除草、雑木撤去、進入路を確保し、安全ロープを張り、見学区域を整備する。今後見学会も含めて1年間の現地公開となる。

2. 3号木製有蓋掩体壕

(1) 3号木製有蓋掩体壕の調査方針と調査時の当初概要

3号木製有蓋掩体壕跡は、あさぎり町上東1787番地に所在し、所有者は敷地内に居所を構えておられた豊永憲二様である。現在居所は無人である。

戦後、隣接地にお住まいの豊永氏が前所有者から土地を購入し、現地中央部に盛土を行い、屋敷を構えたとの事である。屋敷玄関は県道43号線側に向き、出入りの便のため、コンクリート基礎部が一部削られているが、他は環状形で遺存している。また、戦後に掩体木製部材を用いて豚小屋を造り、その後は屋敷内の現存小屋に再利用を図っている。板材を中心として、当時部材が短く切断され、小屋外壁板や梁材の一部として利用されている。



写真 45: 3号木製有蓋掩体壕の前室左袖部コンクリート露出状況

現在は無人ではあるが屋敷内であることから、除草程度にとどめ調査範囲の確定を行った。調査概要はトレンチ調査での構造・範囲確認である。周辺地形図作成、遺構配置図作成、トレンチ部分詳細図(平面図・断面図)作成、記録写真撮影を行った。

現存する当時部材を使用した小屋については、現在も利用中であることから解体せずに、内外からの観察に留め、部材で作った大型の粗入れのみを解体し詳細観察を行った。小屋内部の片付け等を行い、来場者への見学の便を図った。

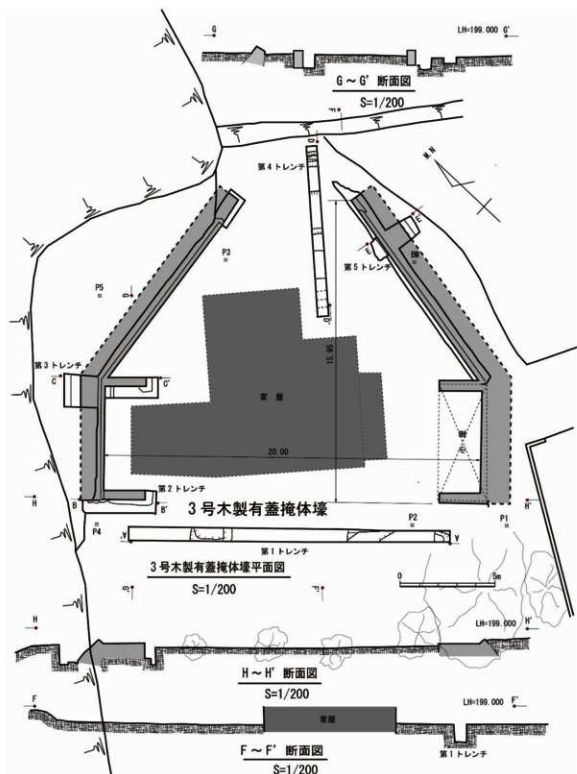
調査期間は、平成27年10月10日～14日である。

(2) 3号木製有蓋掩体壕各トレンチ(試掘坑)の概要

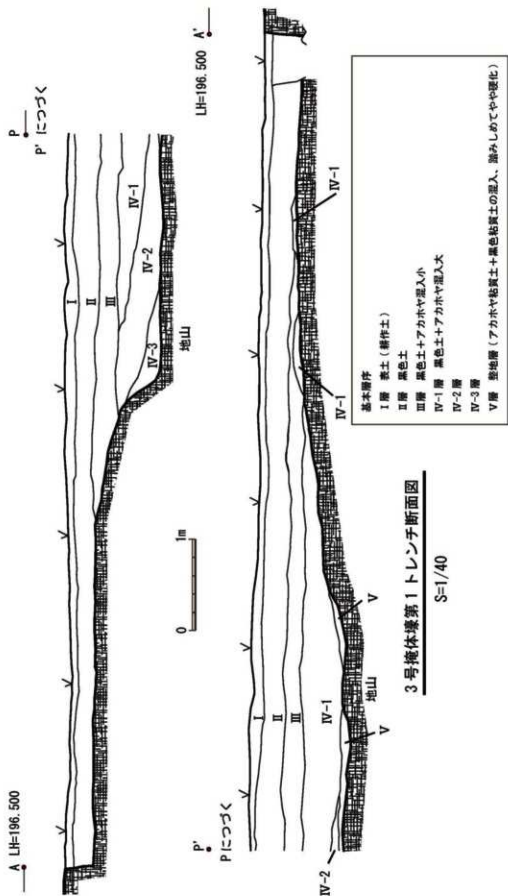
ア 第1トレンチ

掩体壕の前面の前庭部に、12m長の試掘トレンチを設定し、掩体内部の床面状況及び誘導路状況の確認を行う。地表下40cmで地山硬化面が東側・西側に確認され、中央部のみでは地表下110cmと深くなる。

周帯状上段の東側長は8.5m、西側長は6.5mを測る。トレンチ中央部最下層には、イモゴ層と黒色土が斑点状に踏み締めた硬化層(約10～15cm)が確認される。踏み締めた状態であることから床面整地層(格納床面)と判断する。このことから、山梨ロタコ3号掩体事例と同様に、中央部掘り下げによる格納状況と考えることができる。なお、この箇所からのコンクリートスラブの打設は確認できていない。



第26図 3号木製有蓋掩体壕平面図 縮尺 1/200

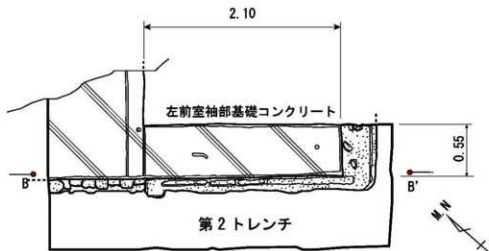


第27図 3号木製有蓋掩体壕第1トレンチ平面図・断面図 縮尺 1/40

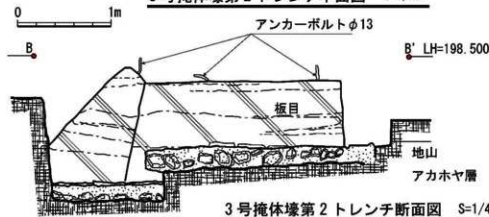
イ 第2トレンチ

前室左側(西側)の手前袖部の検出を行う。袖部周辺には直ぐに地山への捨てコン状況が確認できたが、周辺部には攪乱層が見られる。更に50cm下がり、コンクリート土台・擁壁側の捨てコンが検出されたが、土台はほぼ水平レベルが保たれており、内部側への内傾は見られない。

袖部外側の地山掘り下げて捨てコン状態の確認により、コンクリート打設は、基礎底部から当初50cm程度流し入れ、その後には袖部の捨てコンを行い、さらには台形部と袖部の両部を大規模に打設したと想定できる。また、その際に砂利が表面に露出(巣状)し、コンクリートの品質が低下している。



3号掩体壕第2トレンチ平面図 S=1/40



3号掩体壕第2トレンチ断面図 S=1/40

第28図 3号木製有蓋掩体壕第2トレンチ平面図・断面図 縮尺1/40

ウ 第3トレンチ

左側の前室と後室の変換点、奥側袖部の掘り下げを行い、コンクリート基礎部全容の検出を行う。基礎部外側は、ほぼ斜方向に地表から150cm下がり、地山への捨てコン打設を確認できた。

コンクリート基礎部には、板止め痕跡は方形4分厚材と板材の差し込み痕跡が確認できた。また、当地ではコンクリートには砂ではなくシラスを混ぜて練り込んだという作業員さんからの情報を聞き取れた。シラス混入の薄い整地層はこの状況を示すものかとも想定される。黒色粘質土への堀方ラインが確認され、捨てコンの厚さは

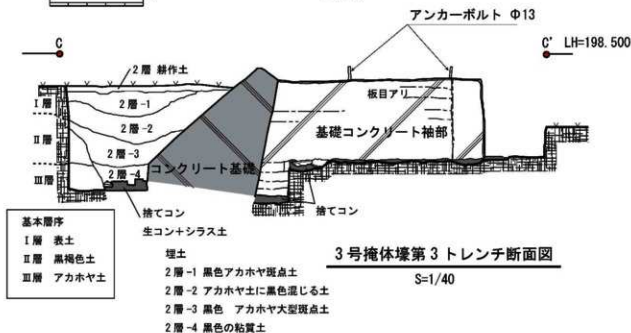
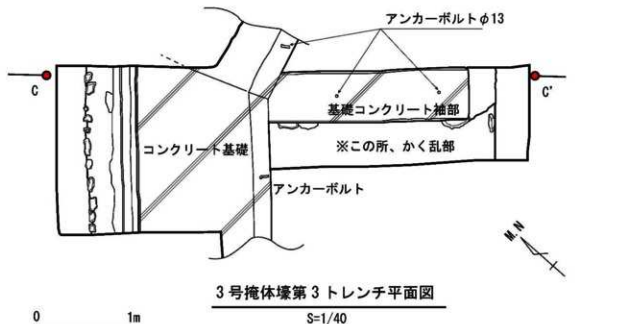


写真 46: 第2トレンチ外側(前室・奥室変換点箇所)の擁壁外側の掘り下げ状況

約 20 c m である。

掩体基礎部内側の掘り下げで、この掘部箇所では内側 40 c m は捨てコンセツに台形基礎部まで生コンを直に打設している。

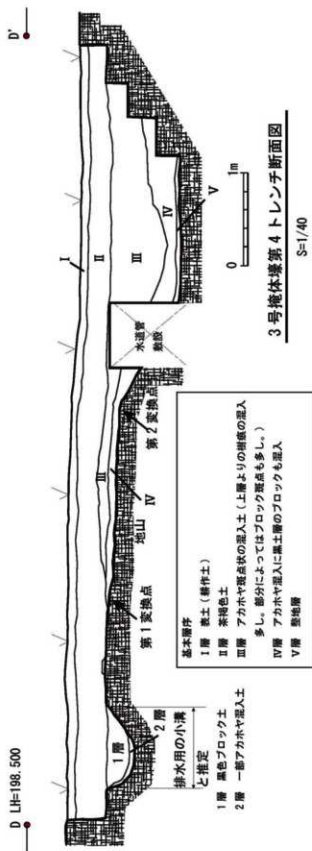
また、基礎部土台側には大きく内傾するが、分厚く丈夫に打設した捨てコン状況の確認ができた。



第 29 図 3号木製有蓋掩体壕第3トレンチ平面図・断面図 縮尺 1/40

エ 第4トレンチ

掩体内部の掘り下状況を確認するために、南北・主軸方向に 9m 長のトレンチを設定する。ここでは、掩体後室最尻部外側に幅 50 c m の排水用小溝が確認できた。また、掩体床面は、現地表下から 110 c m で赤ホヤ掘り込み硬化面を確認できたが、水道管敷設のため下端のラインは検出できなかった。



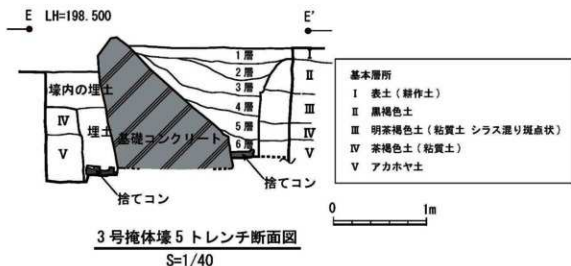
第30図 3号木製石室塚第4トレンチ断面図 縮尺 1/40

オ 第5トレンチ

奥室右側の擁壁コンクリート基礎部の状況を確認する。壕内部の周帯部側に水道管の敷設があり狭小範囲での掘り下げとなる。検出状況から、外側への捨てコンまでのレベルは 130.0 cm、内側捨てコンレベルは 150.0 cm となり、また、当時レベルでは周帯部側が、コンクリート基礎部天端からは -70 cm となり、この箇所では狭い空間であった事が確認できた。



写真 47: 第5トレンチ擁壁部の確認作業の様子



第31図 3号木製有蓋掩体壕5トレンチ断面図 縮尺1/40

カ 小屋部材の確認作業、使用材の解体作業

現在も当地に設置されている小屋(納屋)は、戦後間もなく地権者により建てられており、小屋の材料として掩体壕で使用された部材を多用して造られている。

内部の片付けを行い、使用木材の選び出し、板材で組立られた扉入れ大型ひつ(120×60×40 cm)の解体、不要品の片付けを行う。

ただし、小屋掛けの構造上取り外しが困難なコンクリート基礎にボルト締めされた方形柱材はそのままとした。

また、小屋内で確認された当時使用の板材各種全長は3種(約90・130・170 cm)の長さに揃えられている。



写真 48: 扉入れ大型ひつの解体作業

キ 木製部材

(ア) コンクリート基礎部にボルト通しの柱材・1点

前室右側手前の袖部から奥袖部までを通し、擁壁コンクリート基礎部に本部材は取り付けられている。部材は全長約3mの2本で、中央部は仕口で結合されている。

入口手前側の「ア材」は、断面14 cm×20 cmの長方形で4面共に平坦面を有し、一部の打ち欠きには材の当て

も想定できる。

奥側の「イ材」は、断面形状は長方形17cm×23cmとなる。外皮面が多く残り、枝の節が随所に所見できる。

1号掩体壕で確認された方形柱材には天井部を構成する板材を差し込むための「長方形のほぞ」があったが、本材には同様のほぞ穴は見られない。このことから2本の取付材は、当時使用トラス組の用途部材と想定でき、現地コンクリート基礎部への戦後の転用設置と考えられる。



写真 49: 小屋内でコンクリート基礎部にボルトが通された柱材

(イ) 方形柱材・2点

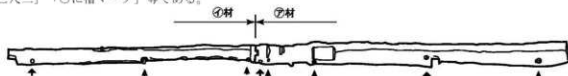
小屋の棟材(入り口手前左側上部梁材・小屋奥右側の柱材)等に使用されており、取り外しができないため、外観からの観察となる。いずれも釘打ちの痕跡が明瞭であり、使用部位は速断できないが袖部立ち上げの柱材等と想定できる。

(ウ) 墨書及びびステンシル銘入りの部材

今回の調査で墨書銘及びびステンシル銘が確認された部材は、全10点である。小屋建てにより多くの板材は差し込みの凸部が切られ、用いる部材長に合わせてカットされている。銘は「A C」3点、「本熊木材株式会社人吉第二工場」「○に熊マーク」「杉厚材」、「三尺二」「○に檜マーク」等である。



写真 50: カットされた屋根利用の板材



3号掩体壕コンクリート基礎部にボルト通しの柱材平面図 S=1/40

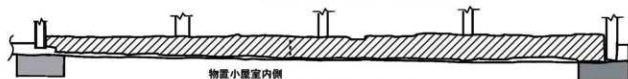
ボルト穴とボルト ▲
ボルト穴のみ ◆



同柱材側面図 S=1/40



同柱材取付状況平面図 S=1/40

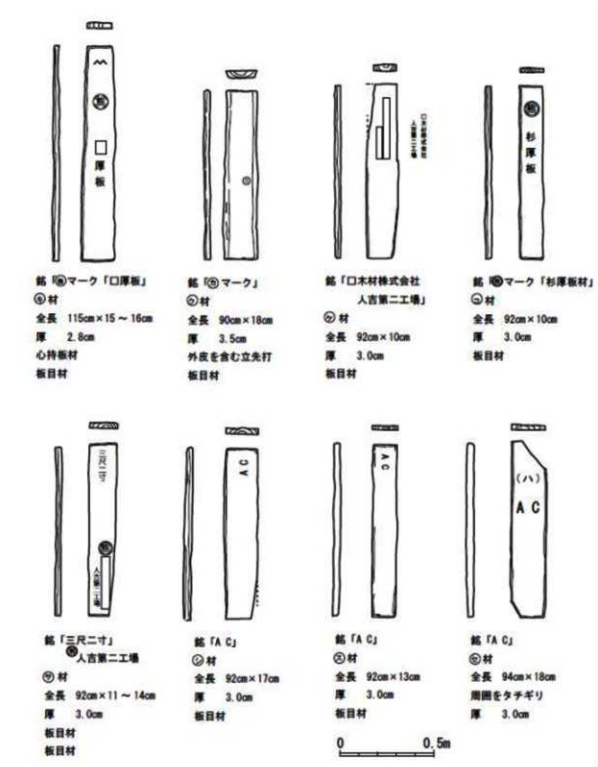


同柱材取付状況側面図 S=1/40

袖部基礎コンクリート

袖部基礎コンクリート

物置小屋築造後



第 33 図 3号木製有蓋掩体塚で使用された墨書銘及びステンシル板材 縮尺 1/20

3. 4号木製有蓋掩体壕

(1) 調査方針と当初概要

4号木製有蓋掩体壕跡は、あさぎり町上東2084-3番地に所在し、所有者は井本清一様である。戦後掘削の用水路に隣接した楡林内に位置しており、現地は削平・盛土等の工事はなされておらず昭和20年敗戦時の掩体壕状況を留めている。

当時を知る所有者からの情報は無く、コンクリート基礎部の露出が数カ所に見られたことから、今回の調査に結びついた。戦後間もなく掩体壕は所有者の井本家で解体されたとの事であるが、一部は納屋等の板材に利用されているという。

現在は戦後に植林された楡林であり倒木除去、雑木等の伐採、除草等により調査範囲の確定をまず行った。調査概要はトレンチ調査での構造・範囲確認である。周辺地形図作成、遺構配置図作成、トレンチ部分詳細図(平面図・断面図)作成、記録写真撮影を行った。

調査期間は、主に平成28年9月17・18日、9月22日～25日である。



写真 51: 4号木製有蓋掩体壕の調査当初の様子

(2) 4号木製有蓋掩体壕各トレンチ(試掘坑)の概要

ア 第1-1 トレンチ

前室左袖部のコンクリート基礎状況を確認するために設置する。基礎部では袖部平面幅50.0cm、全長220.0cm、2箇所の鉄筋金具(アンカーボルト・径18mm)が設置されており、現況では鉄回収の為に切断されている。

コンクリート基礎部の堀方は、V層の地山アカホヤ土まで掘り下げ、打設後に25cmの客土埋め戻しを行っている。当初コンクリート側壁に沿って-65cmで10～15cm径のぐり石が多く確認される。断面状態から薄い捨てコン層が確認されたことから、打設後に投げ込み基礎部を補強した状況と判断した。

袖部と擁壁本体部では打設の順番があり、擁壁側が-30cmの深い深度である。

台形基礎部フーチングも捨てコンを敷きならした上での直打ちであり、打設時にコンクリートの流し込みを保持した杉板表面が薄く剥がれ、コンクリート表面に付着していた。

イ 第1-2 トレンチ

左側前室袖部試掘坑の延長上に、掩体中央部のコンクリートスラブ(床)状況の確認を行う。現況では設置はされていない。2号掩体同様に、荒削りの後の弱い整地層が確認できる。

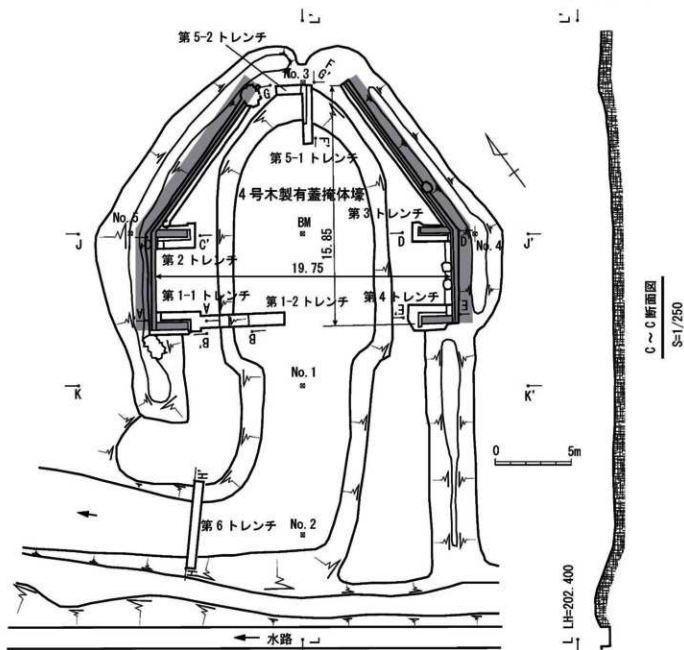
ウ 第2 トレンチ

前室変換部左側袖部の打設状況の検出作業を行う。基礎部では袖部平面幅50.0cm、全長220.0cmを測り、2箇所のアンカーボルトは切断されている。

III層黒色土、IV層赤褐色土への堀方ラインは明瞭に残り、周帯状の床面の一部が確認された。



写真 52: 第2 トレンチ作業風景



4号木製有蓋掩体壕平面図

S=1/250



A ~ A 断面図

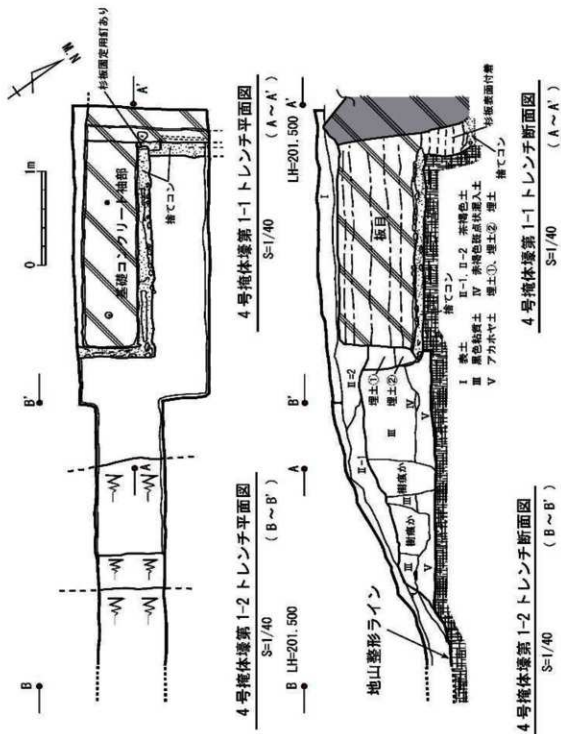
S=1/250



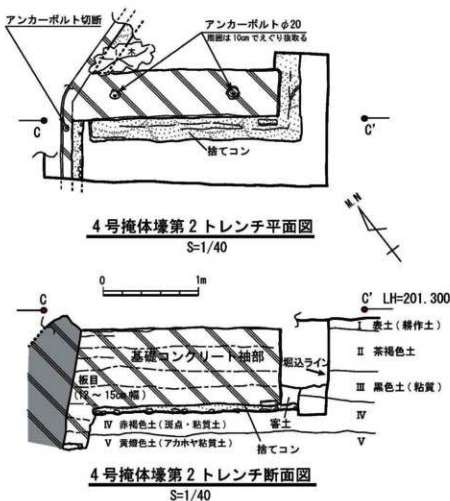
B ~ B 断面図

S=1/250

第34図 4号木製有蓋掩体壕平面図
縮尺 1/250



第35図 4号木製有蓋掩体壕第1トレンチ平面図・断面図 縮尺 1/40



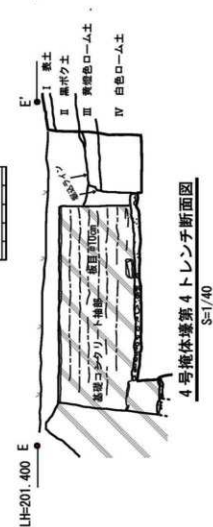
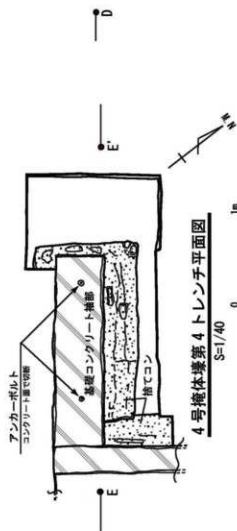
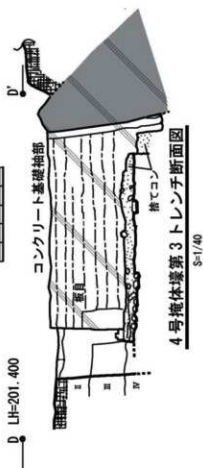
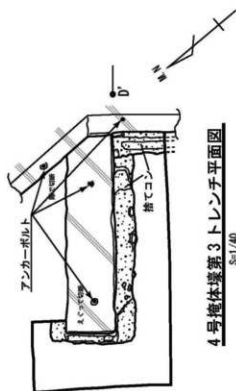
第 36 図 4号木製有蓋掩体壕第2トレンチ平面図・断面図 縮尺 1/40

エ 第3トレンチ

前後室変換部右側袖部の打設状況の検出作業を行う。

袖部規格等は他の袖部と同寸である。コンクリート面から-65cmで捨てコンが確認される。

小口側(西側)には垂木を縦に差し込み、板の押さえとして使用した4cm長方形の垂木痕跡が確認できた。同様に擁壁側にも同形差し込みが検出された。



第37図 4号木製有蓋掩体壕第3トレンチ平面図・断面図 縮尺 1/40

第38図 4号木製有蓋掩体壕第4トレンチ平面図・断面図 縮尺 1/40

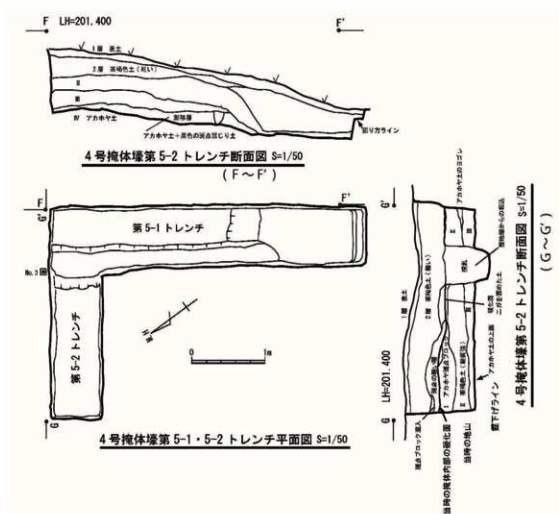
オ 第4トレンチ

前室右側袖部の打設状況の検出作業を行う。袖部規格等は他の袖部と同寸である。最深部の捨てコンの上面に径20cm楕円形石1個がコンクリートに付着して確認できた。

カ 第5-1・5-2トレンチ

奥室最深層部から格納部中心部への下がり状況と排水溝の有無の確認を行うために、中心線上に全長4mの5-1トレンチを設定する。また本トレンチに並行しての溝状遺構が検出されたことから溝状遺構の広がりを確認するために5-2トレンチを設定する。

溝状遺構は地山(茶褐色粘質緻密土)の上面から、切り込まれていることから後世の擾乱である。また、一部には強固な「整地層(赤褐色粘質土)」を版築・面的に形成する状況が確認され、格納庫周帯上に見て取れる。



第39図 4号木製有蓋掩体壕第5-1・5-2トレンチ平面図・断面図 縮尺1/50

キ 第6トレンチ

掩体壕につながる誘導路の構築状況の確認を行うために設定する。中央部で地表から20cmで地山ラインが確認される。ここでは砂利を敷く等の特段の成形はなされていない。また、両肩部についても、地山そのままであり、成形痕跡は見られない。

なお誘導を幅は、3.5～4.5mを測るが、他の箇所での誘導路を発掘しておらず、全体像は図れない。



ク 4号掩体壕の一部埋め戻し作業

地権者要望で、現状復旧のための埋め戻しを行い、コンクリート面も薄く土を被せる。

写真 53： 4号掩体壕の埋め戻し作業

4. 5号木製有蓋掩体壕

(1) 調査方針と当初概要

5号木製有蓋掩体壕跡は、あさぎり町岡原南 2084-2 番地と 2084-3 の境界部に所在し、所有者は前者が中村眞壽夫様と後者が井本清一様である。戦後は周囲に栗や梨の果樹を栽培していた、檜に需要が増したことから植林した。隣家との境界近くまで排土がなされ掩体の周辺に土砂が流れ込んでいる。

当時は小さな松が自生する原野であり、ここにボツンと小山の様な掩体壕が 2 基並んでいた。戦後間もなく掩体壕は周囲の人々が解体し、納屋等の板材に利用されたが、父親が取りに行くのを許さなかったため、自分の家には一切残されていない。

現在は戦後植林の檜林であり、誘導路は一部栗林につながる。倒木除去、雑木等の伐採、除草等により調査範囲の確定を行った。調査概要はトレンチ調査での構造・範囲確認である。周辺地形図作成、遺構配置図作成、トレンチ部分詳細図(平面図・断面図)作成、記録写真撮影を行った。

調査期間は、主に平成 28 年 9 月 22 日～25 日、10 月 9 日～12 日である。

(2) 5号木製有蓋掩体壕各トレンチ(試掘坑)の概要

ア 第1-1 トレンチ

前室左袖部のコンクリート基礎状況を確認するために設置する。基礎部では袖部平面幅 50.0cm、全長 220.0cm、2 箇所の鉄筋金具(アンカーボルト・径 18mm)が設置されており、各々 14・16cm で突出している。植林された檜が邪魔しており周辺部の掘り下げは困難である。

コンクリート基礎部の場方は、V層の地山アカホヤ土まで掘り下げ、打設後に 25cm の客土埋め戻しを行っている。当初コンクリート側壁に沿って-65cm で 10～15cm 径のぐり石が多く確認される。断面状態から薄いが捨てコン層が確認されたことから、打設後に投げ込み基礎部を補強した状況と判断した。

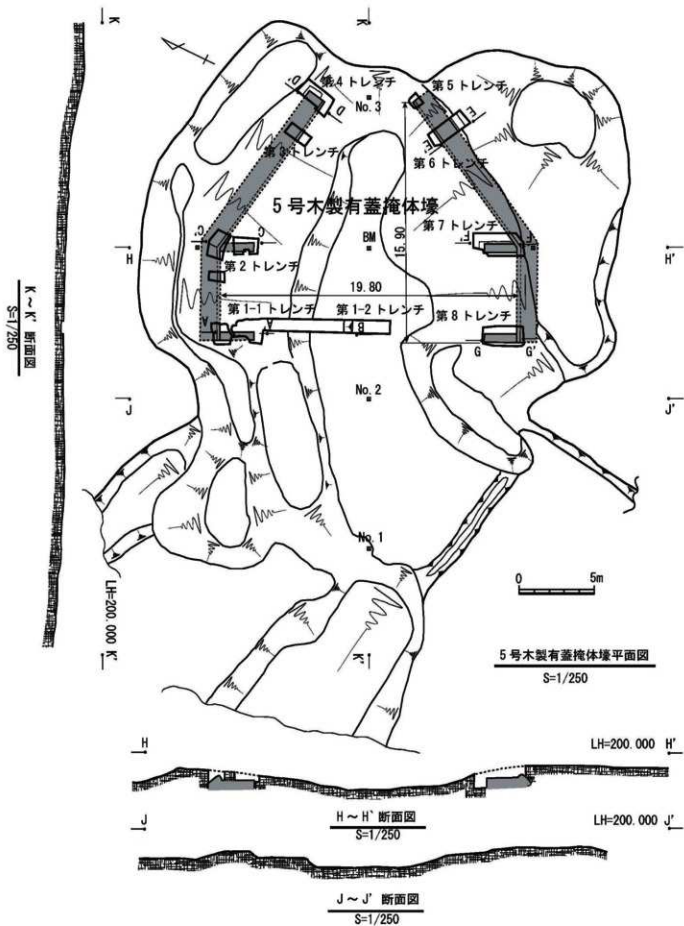
袖部と擁壁本体部では打設の順番があり、擁壁側が-30cm の深い深度である。

台形基礎部フーチングも捨てコンを敷きならした上での直打ちであり、打設時にコンクリートの流し込みを保持した杉板表面が薄く剥がれ、コンクリート表面に付着していた。

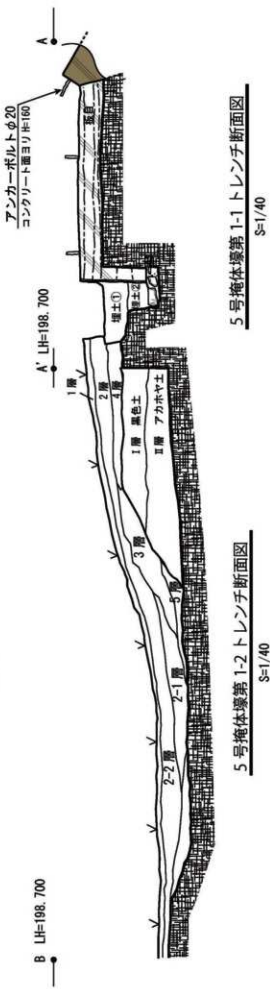
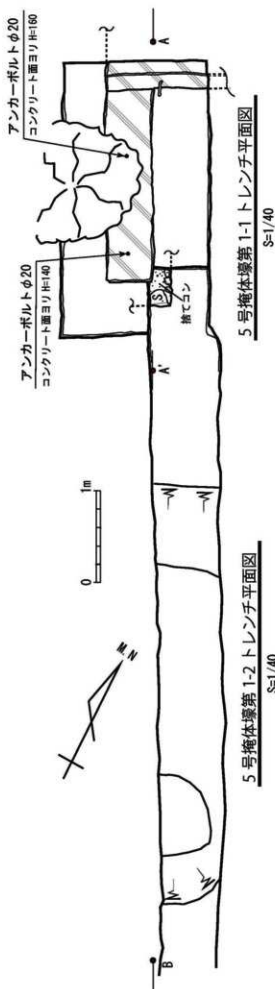
イ 第1-2 トレンチ

左側前室ソデ部の延長部にトレンチ設定する。本トレンチでは掩体中央部のコンクリートスラブ(床)状況の確認を行う。

当初は大きく地業を行い、その後カット部に赤ホヤ・粘土混じりの埋土で整地を行う。掩体基礎部側からの整地層が中心部側に流れこみ、特に中央部は現況から-20cm で大きく下がりカットされた部分等を成形されている。コンクリートスラブは検出されなかった。



第40図 5号木製有蓋掩体壕平面図 縮尺 1/250

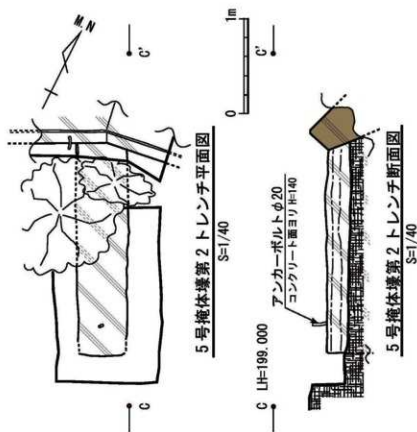


5号掩体壕第1-1トレンチ断面図

S=1/40

5号掩体壕第1-2トレンチ断面図

S=1/40

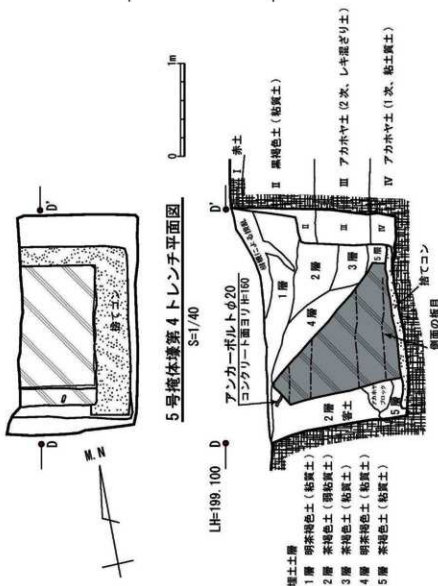


5号掩体壕第2トレンチ子平面図
S=1/40

5号掩体壕第2トレンチ断面図
S=1/40

5号掩体壕第4トレンチ子平面図
S=1/40

5号掩体壕第4トレンチ断面図
S=1/40



第42図 5号木製有蓋掩体壕第2トレンチ子平面図・断面図 縮尺1/40

第43図 5号木製有蓋掩体壕第4トレンチ子平面図・断面図 縮尺1/40

ウ 第2トレンチ

左側前室・奥室変換部の袖部のコンクリート基礎状況を確認するために設置する。丁度変換部に檜が根を張り、邪魔をしており周辺部の掘り下げは困難であった。



写真 54: 第2トレンチ掘り下げ状況

エ 第3トレンチ

左側奥室擁壁部の続きの確認としてコンクリート面頭部の露出作業を行う。

オ 第4トレンチ

左側奥室の端部(末部)コンクリート基礎部分の検出作業及び掘り下げ作業を行う。隣家との境界域にあり排土がなされ、掘り下げでは地表から1.9mまで下げ擁壁基礎部の捨てコンが検出された。なお、ここからは周辺地域からの地下水の湧水があり、雨上がりでは水中ポンプによる排水が必要となった。

擁壁部のコンクリート面基礎部は、台形形状で横(奥行)125cm、高さ138cm、内側にRC基礎部は内傾する。また、下層と周辺部には奥行面では178cm長、厚さ40cmの範囲で捨てコンが検出され、丁寧な施工がなされている。

ただ常時の湧水で、最下層の捨てコン状況の詳細観察は出来ていない。

カ 第5トレンチ

右側奥室の最端部(末部)の検出作業のため一部の掘り下げを行う。樹木が邪魔をしており周辺部の掘り下げは困難だった。

キ 第6トレンチ

ここでは、奥室右側コンクリート擁壁部の頭部露出作業及び最下層までの掘り下げ、地山への擁壁基礎部設置のための堀方の確認作業を行う。掘り下げでは地表から1.7mまで下げるが、最深部からの雨明けの激しい湧水で、常時排水を行いながらの作業となったが、捨てコン部には大型円礫2個が張り付いた状態で確認された。

右側奥室コンクリート基礎部の形状は、奥行は検出しておらず不明であるが、第4トレンチと同様に140cmと想定できる。

また、掩体外側の堀方は当初は幅広く、その後はコンクリート面基礎部のみをさらに掘り下げるといふ2段での作業を行っている。コンクリート打設後は、掘り下げで出た排土を擁壁外側に貼り付ける様に被せ対空への偽装作業も行ったことが断面観察から理解できる。

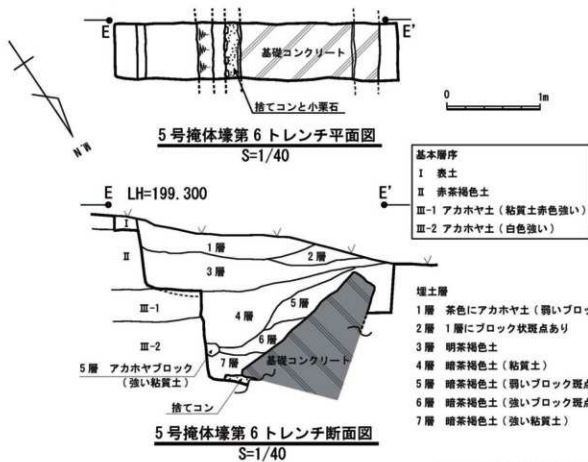
ク 第7トレンチ

右側前室・奥室変換部と袖部のコンクリート基礎状況を確認するために設置する。基礎部では袖部平面幅50.0cm、全長220.0cm、2箇所の鉄筋金具(アンカーボルト・径18mm)が設置されており、各々14・16cmで突出している。これまでに検出された状況と同様である。

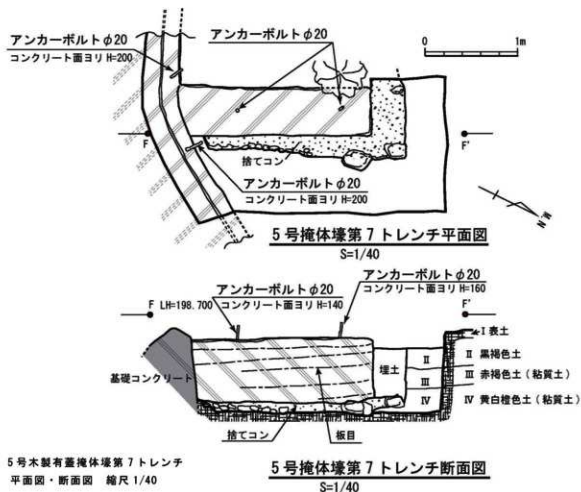
掘り下げ作業では、捨てコン部30m大の栗石が確認された。



写真 55 第8トレンチ掘り下げ状況



第44図 5号木製有蓋掩体壕第6トレンチ
平面図・断面図 縮尺1/40



第45図 5号木製有蓋掩体壕第7トレンチ
平面図・断面図 縮尺1/40

5号掩体壕第7トレンチ断面図
S=1/40

ケ 第8トレンチ

右側前室のコンクリート面基礎袖部の検出作業を行った。ここでも植林された檜が邪魔をしており周辺部の掘り下げは困難で、頭部の露出に留めた。

第4節 発掘調査現地説明会、発掘調査成果報告会

1. 発掘調査現地説明会：町民・一般向け

(1) 日 時 平成28年11月21日(土) 天気：曇り 10:00～12:30

(2) 場 所 あさぎり町生涯学習センター

(3) 概 要

- 当日資料は「陸軍人吉(神殿原秘匿)飛行場 神殿原木製掩体壕(2号)、狩所木製掩体壕(3号) 発掘調査説明会資料」A4版12枚である。
- 一般参加者・球磨郡内を中心に25人が参加。内熊本市内より2人、あさぎり町議2名参加。
- 報道関係：RKK人吉通信部、人吉新聞球磨支局、西日本新聞人吉支局、熊本日日新聞は事前告知での取材
- あさぎり町生涯学習センターで事業内容の紹介 →あさぎり中学校横の滑走路
→3号への誘導路 →3号掩体壕 →滑走路東端部 →2号掩体壕
→生涯学習センターで質疑、解散



写真 56：上右 発掘調査説明会 開会前の会場の様子

写真 57：上左 同説明会 教育課職員北川氏からの主催者挨拶、説明会の趣旨説明

写真 58：下右 同説明会 2号木製掩体壕での見学の様子

写真 59：下左 同説明会 3号木製掩体壕看板前でくまもと戦跡ネット高谷による説明の様子

2. 発掘調査成果報告会：関係自治体及び保存団体向け

(1) 日 時 平成 28 年 2 月 6 日(土) 16:30～21:00

(2) 発掘調査成果報告会概要

○概要は、高谷氏作成のプレゼン「陸軍人吉(神殿原秘匿)飛行場木製有蓋掩体壕中間報告」及び当日A4で4枚資料。山下完二氏からの「陸軍人吉(神殿原 こうどんぼる)秘匿飛行場と掩体壕」のA4で4枚資料。

○参加者は、あさぎり町北川氏、人吉球磨戦跡ネット山下代表、多田事務局長、会員3人、錦町手柴氏(人吉海軍航空隊基地跡活用プロジェクト班)他1人。

(3) 意見交換会

○錦町から「次年度のあさぎり町の調査計画」は。

→4号・5号掩体壕の発掘調査、木製品調査とし、報告書作成まで行う。

○錦町から「人吉・球磨戦跡ネットの構成員と将来の構想」は。

→会員は50名程度、会理念についての紹介説明、今後は平和教育に関わっていきたい。

○錦町から「黒石原奉安殿を合志市が買収した経緯」を知りたい。

→町保護委員会時代での不十分審議、市保護委員会での指定相当、黒石原区の解体決定、市470万円で買収予定・指定化。

○高谷氏から補足説明と関連情報

出水海軍航空隊の資料調査概要(2基の有蓋掩体壕調査と公園化、他の戦争遺跡の調査、米軍撮影写真や戦闘報告の調査、戦争体験者の聞き取り調査)の説明、専門委員会をつくり、チームを組み、調査の精度を上げる必要がある。

○人吉球磨戦跡ネットから、出水平和ガイドの事例に学び、連携を図りたい。

○あさぎり町から、2号掩体壕の管理をお願いしたい。困難な場合は、来年度埋め戻し。

○高谷氏から今後の啓発活動について、「団体の核部分は大切にし、多様な歴史観を容認し、多くの市民の受け入れや活動の広がり」をお願いしたい。



写真 60:左 発掘調査成果報告会の様子 プレゼンでのパワーポイント画面

写真 61:右 同報告会 くまもと戦跡ネット高谷による説明

第V章 総括

第1節 現地での証言

1. 「神殿原飛行場と掩体壕」2号掩体壕関連 山下完二さん(球磨郡あさぎり町在住)

(1) 概要

熊本県の南東の角隅、球磨盆地のほぼ中央部、球磨川の左岸に広がる平地、神殿原。江戸時代後期の250年ほど前、「幸野溝」が民衆の手で造られた。距離20km、幅5m、深さ1m程の大水路。神殿原に達したところで水は地下に吸い込まれて用水は無くなった。その溝の末端から広がる原野。東西に2000m、南北に500m程の広さ。野芝や芝苺が一面に生え、所々に小灌木がある位で見通しの良い平らな平原だった。多くの小学生たちの遠足の適地。その原野が先の戦争末期に陸軍に接収されて秘匿(秘密)の飛行場とされた。



写真 62: 証言者の山下完二さん

昭和20年4月3日に陸軍靖二〇九〇三部隊がやってきて飛行場造成が始まった。周辺町村からの動員、勤労奉仕男女青年隊、朝鮮からの連行者などによって、約80日間で1,300mの滑走路と、1,500mの誘導路3本そして掩体壕5基を持つ秘匿飛行場を造り上げ、6月23日靖部隊は去った。

今は、滑走路を取り囲むように5基の掩体壕の基礎コンクリートが残されているだけで、飛行場が造られた記録は何もない。1,3号壕には木製部材が一部分残存している。

(2) 動員

昭和20年4月から分散教育との命令で、旧制中学校、女学校等の全てで、学校には行かず近くの公民館や寺院、ところによっては農家の納屋なども使われて、昔の寺子屋のような教育になった。一億総決戦体制である。上級生が下級生に教えたり、面倒を見たり、午後は農家の手伝いなど食糧生産の手伝いをさせられた。どの学校にも兵隊が駐屯していた。

小学校上学年や旧中学生・女学生の1,2年生は主に農家の手伝いをさせられ、3~5年生は兵器工場、航空機工場の作業などに動員された。岡原小学校にはトラック部隊が駐屯し、10台ほどのトラックが岡原霧島神社境内に置かれていた。免田小学校には建設部隊本体(靖20903)が駐留したが、高等科2年を終了したばかりの若者(勤報隊と呼ばれた)が集められ、飛行場建設等に従事させられた。

滑走路用地には小型のブルドーザーが整地に使われ、鎮圧には直径2m位のコンクリート製のローラーが使われ、50人ほどで引かされていた。

上・中球磨の町村から毎日「苦役」と言って、50人位ずつ役場が住民を動員して3か月足らずの期間で飛行場が造成された。

(3) 2号掩体壕のこと

昭和20年4月、私は県立人吉中学校に合格。岡原村から免田駅まで歩き、汽車で通学することになった。家から免田駅までの通学路の中間地点、道路から100mほど南のちょっとした丘で地面を削る工事が始まった。一軒の家を建てるより少し広いと思われたが、手前の田んぼと同じくらいの高さになると、県道から掘りこんだところへ向かって、幅30mの広い道路が取り付けられた。掩体壕とその誘導路であった。

基礎工事が終わると間もなく木材で半円形の柱が並べ立てられ、やがてその上に土が被せられ芝生や、雑木が植えられた。空爆や砲撃から飛行機を守るためということはすぐわかった。入口の向きは滑走路とは逆の方向、北向

きであった。だから県道48号線からは丸見えだった。出来上がってすぐはきれいな誘導路だったが、間もなく雨季に入り、車が通ったら凸凹になり何度も砂利が入れられた。

2号掩体壕が、人目に付く県道48号線にくっ付けて設置されたのは何故だろうかと思っていたが、2号壕からすれば、免田駅まで直線でほぼ2km、1号壕を経由して岡原のトンネルまで3kmと、物資保管や配送に最も良い処であったということではなかったろうか。

(4) 岡原のトンネルのこと

飛行場が出来上がった後、輸送部隊のトラックに乗せられて運搬作業をさせられた時、岡原村字岡本に掘られた横穴トンネルに行ったことがある。何を運んだか全く記憶には残っていないが、トラックが入って行ける位の大きなトンネルで、全体が赤っぽい岩肌で東に直線で掘りぬかれていた。何をするのか聞いたら色々な物資を保管するとのこと、ここは水が滴らないから倉庫に良いとも言われた。飛行場を造る時、砂利の採取が出来る場所が近くに無く、滑走路に敷き詰める砂利を採る為に掘られたとも聞いた。最初は、朝鮮の人たちを住ませた田の近くにアンチモニーの鉱山が有って、その廃土や捨てボタが使われたが、粘っこく滑走路に適さないということと、量も少なかったことからトンネルを掘らせたとも聞いた。

朝鮮からの50人ほどの人達は、岡原の岡本谷の田んぼの中に造られたトタン張りの長屋に住まわせられ、飛行場の滑走路造りに従事させられた。飛行場造成工事が終わったらすぐ居なくなってしまい、その後の行方は分からない。

トンネルは、戦後危険だということで入口が閉じられていたが、昭和50年ごろ掘り崩され運動場となり、現在は「森園サッカーグラウンド」となって広く活用されている。

(5) 飛行場完成後

飛行場完成後は、5機の複葉練習機が配備され時々飛行練習も行われたが、その巻き起こす土埃が大変だった。航空兵(12~15名)は免田町の料亭「寿」に宿泊していた。飛行場警備の部隊は、上村小学校と1号掩体壕の近くに兵舎を造り駐屯していた。

現在のあさぎり中学校運動場の東端あたりに整備テントが在り、飛行機は空襲警報が出た時は家畜品評会場付近の林の中に押し入れて隠した。近所の農家から牛が引き出されて飛行場のあちこちに繋ぎ、牧場のように偽装した。

7月30日、丑の日ということで丁度正午ごろ、周辺町村の人々が上村の麓の谷水業師へお参りの列が続いていた。空襲警報が鳴り北西の空にB29が一機、いつもより低い高度で飛来し、その列に向かって数発の爆弾と焼夷弾を投下した。麓の農家の牛小屋に焼夷弾が命中し、牛一頭が焼け死に昼食中の娘さんが頭部に火傷を負った。これは飛行場を狙ったものでなく、あくまでお参りの人々の列に対する攻撃であった。(飛行場の南端から2.5kmほど、3号壕より1km程南にあたる。)

(6) 練習機の不時着

7月の夕方、カライモの草取りをしている時、日没直前だった。練習機が北西の方から低く飛んできた。神原では晴天時はいつも西風が吹いている。だから着陸は東の方からするのにとどうして西の方から降りるのかな、と思っていた。何かエンジンの音が変わり、切れ切れだと思っていた途端、誘導路から外れ近くの畑の畔に車輪を引掛けてひっくりかえってしまった。近くの農家の人たちが駆けつけ、尾翼の方にロープを掛けて引き起こしたが、エンジン部分がすごく重くそれ以上はどうにもならなかった。乗員は二人だったが、どうしていたのか全く覚えていない。練習機が胴体も翼もキャンバス布で張られていることを知り、模型飛行機と同じなんだなと思ったことが印象的だ

った。数日のうちにその練習機は2号掩体壕に運ばれ、脚の代わりにドラム缶が置かれその上に乗せられていた。

8月15日の終戦から数日のうちに、飛行機の部品は外され持ち去られて無残な姿であった。物資不足の時代、鉄骨やアルミパイプ、鉄線などは貴重品であり、さらにエンジン部分には磁石が使われているということでハンマーや鶴嘴などで破壊し、誰彼となく持ち去ったのである。その後、4機まとめて油をかけ燃やされ、屑鉄屋さんが片付けたとのことだった。

(7) 現在の地図上の飛行場及び各掩体壕の位置

百太郎溝や大きな道路や水路、旧村の境界線を元に当時の位置を推定して区画した。滑走路から三本の誘導路(幅30m、長さ約1,500m)が延びたところに掩体壕が造られている。

滑走路の東の端から永山(1号壕)への誘導路は、戦後の耕地構造改善事業で取り払われてしまった。並木(2号壕)への誘導路は、用排水路と一緒に造られていたのほとんどそのまま残されている。狩所(3号壕)への誘導路は、戦後の開拓団への耕地掘下げ後、集落の生活道路として活用され現在に至っている。4・5号壕への誘導路は、1号壕近くで分かれて繋がっていたのであろうが、地図等の記録もなく、地主さんたちも記憶していないことから確定できない。

(8) 木製掩体壕の形、造り、向き

撃から飛行機を守るために入れる半地下式防空壕。主に木造で組み立てられた。一基が一機分で、入口は滑走路とおおよそ反対の方に向けてある。爆風を受けないためであろう。幅15cm、厚さ3cm、長さ1.2mほどの板を4枚張り合わせて円形ドーム形にして、それを少しずつずらして5寸(15cm)釘で打ち固めて、縦方向に5〜6本の梁(はり)で縦に固定した。その上を杉板や杉皮で覆い、土を50cmくらい乗せて芝や雑木を植えた。出来上がった時にはすでに入れる飛行機は無く、飛行機が格納されることはなかった。5基とも基礎コンクリートが同じ寸法、構造で残っている。この中で、1号壕と3号壕には木製部材が残され保管状態も悪くない。

1号壕は、所有者の那須明氏が終戦直後丁寧に解体し、部材の一部を納屋に転用するなどして保存されている。また、3号壕は、居住者が全て亡くなり、その遺族が後整理をする中でこの壕が発見されることになったのだが、その五角形の壕の中に家が建てられていた。しかも、小さい納屋は掩体壕の基礎部分を基礎とし、木製部材を活用して造られている。

(9) 飛行場跡地はどうなっているか

飛行場用地が解放され、広い用地が必要な公共施設、中学校、保育園、熊本県農業研究所、公民館(平和祈念館)、堆肥センター等が中央部に造られ、周囲は公共住宅、個人住宅に供用され、さらに水田や畑地として区画整理、造成され、豊かな農地として活用されている。

2. 「15歳のころ、神殿原飛行場の造成作業に従事」 森山哲夫さん(球磨郡錦町在住)

神殿原飛行場の造成作業のために各地域に命令が出されて動員がかかった。勤労奉仕、通称で勤奉隊と呼ばれた。私の家は、当時錦町一武の「元ん別府(もとんびゅう)」という山裾だったが、一武地域の割り当て30〜40人の中の一員として動員された。球磨郡全体では相当の人数になったのではないかなと思う。昭和20年5月頃、私は高等学校を卒業したばかりの15才で最年少だったが、女性を含め40歳以上の大人が大半だった。

4月には既に陸軍飛行場を造成するための軍が配置されており、作業、生活全てが軍隊式で進められた。一部地区の者は水島組の配下に入った。免田小学校が宿泊所で、そこから徒歩で現地に通った。機銃掃射を受けたときは麦畑に隠れた。共同炊事で専門の炊事班が置かれており、部屋毎で行動した。夜は、配属将校により点呼が行われた。高菜の漬物、干しイワシ、みそ汁など教室の板間で食べた。不思議とひどい思いはしなかった。弁当を持参して通ったが、作業時間は朝8時から夕方5時まで。風呂は八幡町の風呂屋へ通った。



写真 63: 証言者の森山哲夫さん

私たちの仕事は、上村の下原地区(現在のあさぎり町清水地区)の野生の芝生を剥ぎ取って滑走路に敷き詰めることだった。その上にアンチモンを敷き、填土を繰り返した。陸軍の飛行機の赤トンボが飛び立つのを見たが、コンクリート舗装ではないためその砂塵はものすごく、上地区の人たちは大変だったと思う。すべて手作業で、機械といえば排土するためのブルドーザーのみだった。免田での作業は10日間ほどだったが、少々のお金は配布された。すべて役場を通して支給された。

掩体壕の造成は、自分たちが帰る間際から始められた。そのため一部しか見えていないが、厚い杉板を折り曲げ、球磨郡内から集められた大工さんが半円形になるように打ち付けていった。その上に土を盛り上げ、松の木などを植えた。敵機から見つからないよう偽装する計画だったのだろう。

私の家からすれば木上にあった高原海軍飛行場は低位置にあったことから、よく見えた。3月には米軍機から攻撃されて8人の人たちが亡くなった。当時のことはよく覚えている。私は当時の戦争はおかしいと思っていたし、負けると思っていた。その反骨精神のために教師や兵隊に制裁を受けたことも多々で、半殺しの目にもあった。

私の脳裏から離れないのは、朝鮮人労働者のことだ。20歳前後の人たちだったが、トロロッコで運搬しながらその上でアリランを唄っていた。劣悪な環境下で、その後あの人たちがどうなったか、多分存命ではないと思うが、子孫の方がおられるはずで何とか探し出して聞き取りをしたい、というのが私の悲願だ。

3. 「復員して目にした異様な建物」1号掩体関連 那須 明さん(球磨郡あさぎり町在住)

私は農業をしていたが、昭和19年9月、山口県に通信兵として招集を受けた。佐世保から船に乗せられ現地に向かった。1ヵ月が新兵教育で半年通信兵としての訓練を受け、佐賀県の唐津に派兵されたが、専門の仕事をするまで至らず倉庫番で終わった。そこで終戦を迎え、帰郷できたのは8月末だった。

帰郷して我が家の裏の林の中に奇妙な建物があるのに驚いた。その上部には雑木が植えられていた。父に訪ねてその状況を知ることとなった。当時の、村長から建設の依頼があったとのこと、使用計画としては5年位とのことだった。



写真 64: 証言者の那須 明さん

父と二人で解体撤去作業に取り掛かった。掩体壕の基礎部分は頑丈なコンクリートで埋め込まれているため解体もできず、林の中にその形のまま残した。

杉の皮が板の上に乗せられていたが、その上部の土を取り除くのが大仕事で、約半年はかかったと思う。板材は大量だった。3年後の昭和24年に納屋を建造したが、その材材として利用した。良質の材木であり土台や床材として活用、70年経過した現在も健在である。金属類が不足していた当時、引き抜いた釘は、周囲から重宝がられた。

近くに兵舎もあったが、それは別の人が風呂場等に転用したようだ。

4. 「3号掩体壕の姿」3号掩体関連 松本和幸さん・山代レイ子さん

(1) 山代レイ子さん(あさぎり町在住)

3号掩体壕のあった場所は一段下がった凹みであった。

敗戦後にその窪地には豚小屋が作られていて、その小屋横の藁小屋の中で小さい時に持ち主の娘さんとよく遊んだ。その後、整地盛土がなされて現在の家が造られた。掩体壕の木製品の入った小屋もその時に建てられた。

(2) 松本和幸さん(あさぎり町在住)

敗戦時、自分が球磨農業学校(現南陵高校)に入学した年で、この土地の所有者は「福島さん」で、元屋敷は西側にあった。

周りはヒノキ林で、沢山の兵隊が来て、木材で組んでドーム形掩体壕が出来上がった。狩所側に滑走路からくる飛行機を転回させるクランク箇所があった。

学校実習園が滑走路横にあり、ドラム缶が積み重ねてあった。一枚羽の金属製機体(薄い赤味色)が1機いた。複葉練習機(赤色)が2機一緒に飛行場を周回していた。狩所の山側の墓所横には、燃料のドラム缶が入った防空壕があった。

5. 「戦後残された4号・5号掩体壕の姿」4号掩体関連 中村真壽夫さん(球磨郡あさぎり町在住)

私の父親は陸軍軍属で、7人兄弟の三男として生まれた。この周辺には田んぼを四町近く持ち、梨や柿も作っていた。昭和20年岡原国民学校5年生の時に、家所有の山地に一基、200mほど離れた現井本清一さん所有地に軍が木製掩体壕を作った。滑走路から伸びる道(誘導路)は、軍用道路と呼んでいた。

敗戦後に現地をたずねると、木製のトラスが組まれて上部には土が盛られ松も植林されて舗装されていた。周りが原野だったので、ぼつんと小山が二基あり目立っていた。

敗戦後近くの人たちで掩体壕は壊され、土を剥いだあとは、分厚い松材をとりに来て、納屋や自宅二階の床板として使用された。自分の家は父親の支持で、物資はとりに行かなかった。



写真 65:
証言者の中村真壽夫さん

第2節 歴史資料

1 陸軍第八九振武隊の軍事郵便

(1) 資料(軍事郵便)の概要

本軍事郵便資料は、市民団体「三木飛行場を記録する会」代表の富田逸民氏から連絡を受け提供いただいたものである。兵庫県三木福井の吉永初男さん宅から平成26年発見された陸軍人吉秘匿飛行場(免田飛行場)で敗戦をむかえた「陸軍第89振武隊 櫻井隊」の資料である。資料は手紙13通、葉書9通、隊員の写真12枚、訓練中おきた隊員事故死の電報1通、計35点からなっている。

昭和45年4月～7月頃、地域の世話人であった父の清太郎さんや母ヤスさんあてに送られたもので、仏壇引き出

しに保管されていたものである。

陸軍三木飛行場は、敗戦前年に三木市・加古川市・稲美町にまたがり開設された訓練用飛行場で、滑走路3本、駐機場、格納庫を備え、多くの特攻隊が訓練を行っていた。

ここでの第89振武隊長の櫻井甫久夫少尉は、以下の通り手紙にしたためている。

種々御手厚きおもてなしを頂き有難御禮上候。

且小官の御無理を知りつつ申上候、

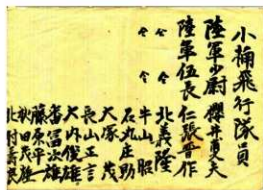
無理御聞入れ下され我が隊に縁も深き舞濱じ下され候事、実に感激に堪へざる次第深く御礼申上候。

我等卑小なる微身と雖も唯、一撃にて醜虜を屠り御奉公の誠を致す熱意は胸中に烈々と燃え居候へば、何卒御案神(心)あつて御期待下され度候。

飛行機のりと空のとり・・・何時飛び去り何時果てるやら知れぬ身には有之候へども三木の思ひ出は永久に美しく少年の胸の中に生きて居るなこむと思われ候。

乱筆書き連ね申候ども先づは御礼迄に御座候。

草々 櫻井少尉



資料1: 小楠飛行隊桜井隊員名

また、部隊員で神奈川県横浜市神奈川区入江町出身の長山正重伍長は、以下の通り陸軍便箋1枚に書き連ねている。

前略 走り書きにて御免下さい。

長い間種々有難うございました。厚くお礼申し上げます。軍隊に入りてより幾度か外出致しましたが、本当に三木の小母さんの家が一番嬉しく感じました。自分等も家に帰ったように騒ぎましたが、小母さんはじめ皆様も、お爺さん、お婆さん、或はお父さん、お母さん、お姉さん、妹又弟のように可愛がられたり、仲よくしたり、この思い出は生涯を通しての一番楽しきことでした。しかし、堅い様ですが吾々は軍人でありませう。

一度基地に展開せんか、もう吾々の念頭には最早何もありません。只管皇国を侵寇する奴等を如何として斃すか、之だけです。お母さん、おっと小母さんや皆様の事は全部忘れてしまうと思います。限りある「のうみそ」ですから、けれどもそれで喜んで頂けると信じます。

邦家及び貴家の御萬福をお祈りして別れます。

長山 正重拝



資料2: 小楠飛行隊桜井陸軍書

激しい特攻訓練の合間に吉永家を訪れ、暫しの休息のなか、若い特攻隊員と住民との交流をつづった全国ではあまり例を見ない貴重な資料である。

(2) 部隊の概要

戦後も存命であった京都府出身の「仁張晋作伍長(現姓足立・敗戦時階級は軍曹)」による部隊の証言は以下のとおりである。

部隊は「靖一八四二三部隊」であり、通称は「小楠飛行隊」と呼称していた。陸軍の九五式中等練習機による3隊編成の中練特攻隊・本土決戦部隊である。軍事郵便内櫻井隊の上位に「岡田隊」との記載が見られるが、これはこの3隊を総括した指揮官である士官の名前と想定される。

小楠飛行隊は、第八九振武隊(櫻井隊)、第八八振武隊(吉武隊)、八七振武隊(白水隊)の3隊で構成されていた。第八九振武隊は、通称櫻井隊と呼ばれ、隊員12名で編成されていた。

部隊の沿革と敗戦までの動きは、昭和20年3月に千葉県横芝飛行場内第39教育飛行隊で編成。4~6月三木飛行場で訓練。7月加古川飛行場で訓練。ここで機体を特攻機仕様様の「黒色」に塗彩する。図版写真の「九五式中等練習機の特攻仕様様機」は濃いグリーン(草色)に塗られていたとされる。黒色で塗彩される例は、玉名飛行場九十・九十一振武隊でも同色であった。宮崎県新田原飛行場へ移動。第八八振武隊は隈庄飛行場へ、当第89振部隊は都城西飛行場に移駐するが、ここで1名(大内俊雄)殉職。7月中旬に陸軍人吉飛行場着。ここで敗戦をむかえる。



資料3: 大内隊員戦死電報

(3) 京都府加古川局より発送された軍事郵便

この時点は「空五二三部隊」に桜井隊は帰属しており、近隣の加古川飛行場での訓練を行っている。



前略 早や初夏の候と入りし此の頃日中の暑さ、これからが思ひやられません。昨日は誠に心からの演習に要切つて通達受け居ります。演習の都合にてお家附近を超低空出来得ず、此の点お返し居ります。お家止つてゆつくりくつらうと本当に自分の家に帰つた様な気分になり、羨しい感じが致します。小生(長山)にも初男位の様があら。又心からの清子、治子さん、本田さんのマスケット有難う。先は右御礼まで 乱筆にて失礼 敬具

資料4: 「牛山 長山」葉書

○空五二三部隊 小笠原隆気付 櫻井隊

○京都府 加古川局 20・6・13



資料5: 「仁張惣右衛門」葉書

○京都府加佐郡川西村

○京都府 河守局 20・6・20



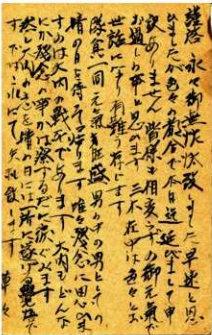
謹啓 時下暑氣日増しに相加り申し候處
 尊堂益々御降勝奉大賀候。陳者過日は
 御禮申上候。御厄介相掛け、其上種々御馳走に相成り先越き厚く厚く
 向替之折柄御静養の程御折申上候。
 先は御禮迄で斯の如に御座候。

※陳者(のぶれば)

(4) 球磨郡免田局より発送された軍事郵便

その後、部隊が移駐した新田原飛行場・都城西飛行場からの軍事郵便は確認されていない。唯一、訓練中おきた大内俊雄隊員事故死の電報1通が残されるのみである。

免田郵便局付けで、兵庫県三木の吉永さん宅へ送られた軍事郵便封書が1通、葉書が3通である。その内訳は、櫻井隊「牛山昭・長山正言の連名」封書(日付不明)、「番富次男」葉書(7月21日)、「牛山昭」葉書(7月26日)の3通、振武87隊(白水隊員)隊員である「久保左利」葉書(日付不明)である。



資料6: 「番 富次男」葉書

○靖一八四二三部隊隊員 岡田隊 白水隊

○免田局 20・7・21

謹啓
 水々御無沙汰致しました。早速と思いましたが、色々都合で本日迄、延びまして申し訳ありません。皆様も相変わらず御元気で過ごして下さいます。三木在中は色々とお世話になり有難う存じます。
 隊員一同元氣旺盛、男の中の男として、晴れの日を待っています。

唯々残念に思いますのは大内の戦死であります。大内もどんなにか残念の事を察するだに涙ぐみます。然しこれはこれにて先礼いたします。

草々



資料7:「久保左利」葉書

- 靖一八四二三部隊気付 岡田隊 白水隊
- 局・日付は不鮮明

拝啓
度々の御書面有難く拝見致しました。早速御返事差し上げないと思つていましたが、何しろ慌ただしく申し訳ございません。櫻井隊も一緒に居ます。ここに来ましたので、早く先般、久保のみ先般、ここに来ましたので、早く知らせてあげます。御心配かけて申し訳ありません。今達は夜間飛行をやり何時も二時頃折ています。お手紙を書けないですが、慌ただしき折何とぞお許し下さい。何れ又書きます。ご一同様によろしく。では又後御元気で。

敬具



資料8:「牛山 昭」葉書

- 靖一八四二三部隊 岡田隊 櫻井隊
- 免田町 20・7・26



拝啓
すつかり夏らしい天気になりました。その後小父様始め皆様方には、お変わり無い事と存じます。この間は朝早くからお見送り、誠に有難うございました。お陰様で一同無事に到着致しましたが、唯、残念に思ふのは、大内の事許りです。いくら楽しくてもものたりぬ感じでした。すつと云つて、くよくよしては居ません。あ、の世敵をより一層やつつける事が、仇討ちともなり、あの世か大内への最大の土産と存じます。お用事や郵便かけた事に深くお詫び致します。乱筆失禮。

敬具



お便り有難うございました。

その後皆様方にはお変わりありませんか。夜町会の御仕事には本当にお疲れ様です。お除様で一同元気でやっておりますから何卒御安心下さい。小生も一時も離れたことにはありません。どうか御心配なく。今度仁張伍長殿は軍曹に進級されました。母様もお祝ってあげて下さい。小母様もお祝してあげて下さい。一部は疎開して居ります。仲々張切あつて居ります。あつて居りましたらと幾度か思い出さず大内が居つたならと。今度も笑つて出てくる様です。でも今は白木の箱の中自分達と一緒に居ります。必ず必ず大内の方分速もやつてやり抜く覚悟です。夏も盛りとなり、外では汗が流れます。三木も相変わらず話も聞きました。今日相良が突然帰つて話を聞きました。一人もふかえるかと本當に心強いです。廣をもこがすこの晝日中、疎開作業も苦勞です。清子さんの「奥様あら失礼」本当に失礼です。それからあの歌どうも思い出せません。多分一航空日本の歌でしょう。若かしたら一空の船長かも知れません。この血の廻りの悪い頭、つくづく愛想が盡きました。では又どうか皆様お体を大切に。私達も頑張ります。初男ちゃん大事にして下さい。小父様初め皆様様に宜しく。

母の様な小母様へ

昭祥

資料9 「牛山 昭・長山正言」封書

- 靖一八四二三部隊 岡田隊 櫻井隊
- 局名・日付不鮮明

(5) 本資料、生存者証言の歴史的意味

この軍事郵便は陸軍人吉秘匿飛行場に、敗戦時に櫻井隊と白水隊の「二隊の中練特攻隊」が待機していた事の歴史的証明となるものである。そしてそこからは特攻作戦に向けての隊員の心情を推し量ることができ、戦時下の状況を知る手がかりである。

また、戦後も存命であった京都府出身の仁張晋作伍長証言からは、「部隊の数字番号の記入はなく、機体全体が黒色だった」「後部座席にドラム缶は乗せていなかった」「免田の飛行場の設備はなく、終戦まで訓練はしなかった」「免田での住居は民家で、小さな旅館ではなかったように思う」「地元の有志の方々に球磨川で小舟にのせてもらい、鮎漁を楽しんだ」等の貴重な証言もさらに寄せられている。

本土決戦に向けて編成された九州内だけでも 200 隊編成されたという中練特攻隊は資料も乏しく、その実態は謎



資料10:「牛山 昭・長山正言」封書に同封された一式戦闘機「隼」のスケッチ

も多い。玉名飛行場には九〇・九一振武隊、黒石原飛行場には九四・九五振武隊、熊本飛行場にも九六・九七振武隊が待機していた事等とあわせ、人吉秘匿飛行場の事例は新発見の歴史資料となった。

2. 陸軍人吉秘匿飛行場から戦後持ち出しの航空機部材と思われる資料

本資料は旧上村在住の方より、錦町に寄託された資料である。錦町教育委員会の了解の基で資料紹介をする。

陸軍人吉秘匿飛行場より戦後に航空機部品資料として回収したのち、方形の平たい化粧箱にいれられた資料である。

形状は横 55 cm × 縦 38 ~ 54 cm。素材は鉄製で片方は端部が残されており、もう片方は折り返し部である。表面には小型リベット打ちで7列、さらにリベット止めで 15 × 10 cm の方形口が着けられている。また、青銅製パルプ金具が取り付けられているが、これは鉄板に貫通はしていない。

収集後に展示ケースに入れるために当初の曲線から平坦に延ばされており、本来は緩やかに湾曲する円筒状部材である。

所有者は飛行機部材と称されているが、鉄材質であることから飛行場で使用する地上機材等の部品と想定できる。



写真 66: 右 陸軍人吉秘匿飛行場から戦後持ち出しの航空機部材と思われる資料

写真 67: 左 同資料拡大

第3節 木製掩体壕の技術的系譜

ここでは、現在木製有蓋掩体壕に関連する文献資料2件の解説を行い、木製有蓋掩体壕の理解を深めたい。

1. 「膠着梁木造掩体壕 参考図及び概要」

本資料では、戦前ドイツで開発し先行している合板技術を、掩体壕の梁材として利用するための民間研究である。膠着する技法は異なるものの、細部においては陸軍人吉秘匿飛行場例と類似することから本稿でとりあげる。

この資料は長野県松本市で発見された資料で、表書は『膠着梁木造掩体壕—参考図及び概要—昭和20年1月30日』と記載されている。

長野県松本市本町に所在した「中央構材工業株式会社 技術部」が「特殊木構造大張間建築トシテノ膠着建築」として概要をまとめている。

主要箇所を抽出する。

「膠着建築ノ概要」では「戦時下建築資材、特ニ鉄材ノ漸次急迫化スル一方、大張間ノ建築ノ要求ハ日ヲ追ッテ益々

大トナル為ニ「最大限、節約及び構造力学的満足ヲ充スルタメニ考案サレタルモノ」で「小ナル部材ヲ用ウ着劑ニヨツテ膠着シ大部材トナシ、建築架構ニ用ユルモノニシテ特殊ナ合成梁ヲ形成スル」目的で開発された技法で膠着剤としては「尿素系合成樹脂ヲ用イテ居ル」とされている。



写真 68：左 木製格納庫事例(20m×20m規格) 立川航空機製造所疎開工場での施工例



写真 69：右 膠着梁大張間掩体壕(20m×30m規格) 山梨県飯野町龍王現場での施工例

ここで当時の関係者「池田三四郎氏証言(1988・9・29)」の一部を記す。

「昭和19年、まだ松本の半地下工場の工事はまだ始まっていなかった。主には、各飛行場にある飛行機の格納庫の建築をしていた最中であった。

北海道から全国にいたって鉄材が不足していたため、木構造による大型の格納庫を造り始めた。松代では、今の地震観測所のところへ穴を掘る大工事が始まった。そこには、天皇・内閣・軍の参謀本部が東京から疎開してきて中へはいる予定だった。一方、松本では、松本総工場があった。

昭和20年1・3月膠着梁木造掩体壕10分の1模型製作。

源地国民学校(現 松本市立源地小学校)第二体操場借用し寸取図を作成する。3月には尿素樹脂接着剤による膠着強度試験を行い、昭和20年5月 膠着梁木造掩体壕「梁」強度試験、掩体壕の屋根を支える梁の強度を見る試験を行う。上に石を乗せ、幾つ乗ったかでその強さを見た。

8m×20m釘打ちでの半地下工場の生産松本工場の建設が開始され、のちに釘打ちではなく、膠着梁のものもできた。昭和20年7月20m×20mの釘打ち掩体壕覆土の試験を行う。双発機(ki-83)を格納できるように作られた。

昭和20年、本格的に松本の工事が始まった。工事には当時の松本の市民と、日大の学生も総動員された。小松地区一帯に約6000人が、三菱の半地下工場と軍格納庫および飛行場へ向かう道の整備に動員された。その資金は、軍保証という保証で八十二銀行から出された。半地下工場は、8m×20mの大きさ、釘打大張間建築で、屋根の上には空中から発見されないように土を覆せてあった。これは150棟造られた。

この時使用した木材は、北海道から筏に組んで海を運ばれてきた。双発機が入る格納庫の20m×30mのものは、試作だけで実用化されなかった。」

池田研究にノートにも示されているように、使用する木材強度の検討・選定をはじめ木製部材の結束においては「膠着剤使用」「釘結束」双方の研究がなされ、掩体(壕)、格納庫、半地下工場等の施設形状にも及んだ。

詳細内容は紙数の関係で別稿に譲るが、本人吉秘匿飛行場掩体遺存木製部材例にもあるように次の三点で類似性が見られる。①膠着梁は、長辺板材3枚で、両側材と中央材を違い違わせ「梁構成」する点、②材全長は140cmを基本とする点、③梁同士の間隔は芯芯間で60cmをなす点である。これらの近似点は、使用を想定する小型戦闘機1機を格納する掩体壕規格が、陸軍でほぼ統一されていた事情にもよると想定することができる。



写真 70:左 基礎部分における梁及び底地板変位測定状況



写真 71:中 立型釘打掩体内部構造の一部



写真 72:右 昭和 20 年松本市源池国民学校での 10 分の 1 模型

長野県松本市池田満雄氏の『諸研究栞文』ノート (長野県松本市平田豊志氏提供資料)

2. 『海軍 W 工法構築要領』

この資料は前掲書と同様に、戦前種々検討された戦時下で急速施工・省資源を目的とした「特殊木工法」の一種である。

書名は『W工法構築要領 海軍施設本部 昭和二十年二月一日』で、明治大学校地内遺跡調査団の新井悟氏・南アルプス市教育委員会の田中大輔氏の提供によるものである。

本資料は、現在防衛庁防衛研究所図書館に保管されている旧海軍施設本部が極秘に刊行した『築本築秘第四号 築城施設参考書第四号ノ十二』で、図書館の分類上「⑥土木建築 475」に属する。

主要箇所を抽出する。

本工法ハ簡単ナル足場及び支柱ヲ設ケ‘アーチ’成型上ノ定規トナシ木板ヲ重ネ合せ上部ニ覆土ヲ行フ簡易施設ニシテ最モ急速設置ニ適シ就中飛行機掩体、兵舎、又ハ防備工場等ニ適応シ得ルモノトス

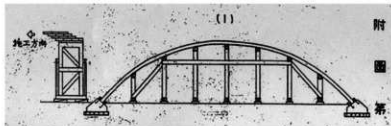
本工法ハ木板ヲ主材料トシテ釘ヲ以テ綴リ合せ容易ニ‘アーチ’型ヲ構成スルヲ得其ノ有利トス



第 46 図: 右 W1 工法 附図 1 抜粋

第 47 図: 左 W1 工法 附図 4 抜粋

[明治大学校地内遺跡調査団の新井悟氏・南アルプス市教育委員会の田中大輔氏からの提供資料]



さらに、本施設の利用範囲として「径間大ナルモノ(概ネ 15 米以上) 飛行機掩体、大型組立工場等」を、基礎の構造は「径間大ナルモノ(15 米以上) ‘コンクリート’ 基礎」と規定している。

また基本‘アーチ’の組立は「木板三枚ヲ重ね合せ正確ニ釘綴ス」「之ヲ‘アーチ’ノ一方ヨリ送り他端基礎ニ達セシメ(手前ハ適宜長ノ重ね木板ヲ張り一環ノ‘アーチ’ヲ形成シ釘打ス」とある。

この様に本資料は海軍施設部の施工例であるので、陸軍掩体壕について、一概に合致するものではないが、木製掩体の技術系譜からは、前掲書同様に重要な資料であると判断できる。

第4節 調査成果と今後の課題

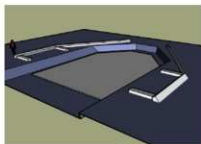
1. 当初の木製有蓋掩体壕の構造理解

平成21年刊行の『神殿原秘匿飛行場永山1号木製掩体壕の調査概要報告』にも記載したように、1号掩体地権者の那須明氏、2号掩体の当時建設状況を日撃した山下完二氏の証言から、第0図「1号木製掩体壕の復元イメージ図」を当初に示した。

永山1号掩体壕は山梨県南アルプス市ロタコ例（御勅使河原秘匿飛行場2号掩体）と異なり、掩体内部の掘り下げを行わない「平地式」であると想定して今回の発掘調査に臨んだ。

しかしながら、今回の2～5号木製有蓋掩体壕の発掘調査により、ロタコ資料に見られるように掩体内部上段には周帯状肩部が、下段には格納面を有する「半地下式」構造である事が、残り4基の掩体壕で確認された。1号掩体は檜植林のため未発掘であるが、状況等からは同様の構造と想定できる。

ただし、ロタコ事例とは異なり、格納面にはコンクリートスラブは打設せず、地山掘削及びシラス土の突き固めによる成形であることも判明した。想定される陸軍規格設計図を用い、基本寸法通りに造営した状況が見て取れた。以下詳細に後述する。



第48図 山梨県南アルプス市のロタコ例でのコンクリートスラブの状況



第49図 1号木製掩体壕の復元イメージ図
永山1号掩体壕の調査成果を基に、当時証言を含めて2007年山下完二氏が作製

2. 発掘調査による陸軍人吉秘匿飛行場木製有蓋掩体壕の概要

(1) 有蓋掩体壕の規模・構造の把握

上神殿原所在の2号木製有蓋掩体壕を例に規模を示す。第50図に示す様に、東西長・横幅約22m、南北長・全長約18m、左右袖部基礎間15.5mと、当初発見の第1号掩体壕を含め全ての掩体壕はと同規格であることが判明した。

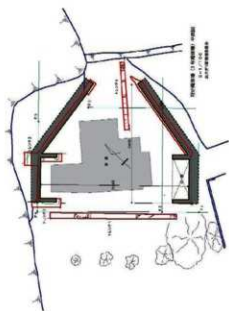
これは先行調査の山梨県ロタコ事例とも一致し、統一した設計図による施工であることが改めて確認された。

ただし、掩体壕内部中央には、全ての掩体壕で「コンクリートスラブ(床)」は見られなかった。陸軍人吉掩体壕2・4・5号(3号は現行家屋のため中央部の掘り下げは困難)ともに、掩体内部に弱い硬化層が確認できた。しかし、2号では、左側袖部から掩体中央に向かい上段周帯部では、粗い掘り下げ面に版築状の地山整形を行い、部分的に捨てコンを流し込み、上面を水はけの良いシラスで転圧した状態が確認できた。5号掩体壕でも後室最深部に、一端地

山まで掘り下げた後に、掘削土を用い版築状の地山整形を行っている。

一旦全域をオープンで開削し、コンクリート基礎部の位置決め、打設を行い、内部周部には盛土で造形し、最後は版築して突き固める工法を知ることができた。

いずれにしても、本掩体壕は陸軍単発小型機（例えば敗戦時は旧式となっていた一式戦闘機「隼」等）を収納できる全国の統一の設計図で施工されたことが理解できた。



第50図 2号木製有蓋掩体壕寸法入り平面図

(2) 前室左袖部の構築方法の把握

2号掩体壕では、①台形基礎部 → ②間部 → ③袖部の順番にコンクリートが打設されていた。台形基礎部は地山に直接「捨てコン」を敷設し、幅13cm板材でコンクリート範囲を決めている。また、間部では、同一レベルで内側への圧を保持するようにした後、袖部を施工する。南アルプス市ロタコ調査事例での2回打設の手法と異なる。水平設置であるので、異なる状況が判明した。

ここでは袖部と繋がる台形基礎部の斜方向基盤敷設が行われた。捨てコン状態も含め、内側傾斜（14度）で勾配をかけて敷設し、天井部圧を受ける状況が判明した。

3号掩体壕では、前室左袖部、前・後室変換袖部の現地構築を行っていた。ここでの打設手順は①台形基礎部②間部の下部分、③袖部の順番であるが、2号に見られるような「台形基礎部・間部の斜方向での設置」ではなく、ほぼ水平設置である。また、前・後室変換袖部では捨てコンを行わず大型栗石で周辺部を囲い、直接コンクリート打設するなど現場で適宜施工した状態が見て取れた。

これらの事例は、ロタコ事例で報告されたように、「施工現場での試行錯誤、裁量があったことをうかがわせる」との言に筆者も賛同する。

(3) 戦後も残された木製部材、現地での木製部材の発見

今回2号掩体壕では、右袖部②番のボルトに当時のままで木製基礎部材（全長190cm、残存径は10cm）が発見された。これまで1号で確認されている、方形柱材とは異なる現地利用の部材利用が判明した。

なお、材は広葉樹系の芯持ち小径材であり、ボルト通し部は長軸径長12cm、楕円穴を穿つ。また、鉄製ボルトねじ切り箇所より下側に鉄索材（全長9cm）が錆びた状態で付着しており、中間スペンサーの様な筒材が装着されていたのではなかろうかと想定できる。

天場は平坦面を持つが、天井部保持の垂直柱固定の状況は残存部位では確認できない。いずれにしても、コンクリート基礎部の現地打設と同様に、施工現場での部材不足等による臨時運用と理解したい。

また、今回の調査で戦後掩体壕を解体し使用されていた木製部材で、3号掩体壕基礎を利用し現地に納屋を設置した資料が確認された。



写真73 物置小屋

3号木製有蓋掩体壕内に、戦後設置された小屋の外観と後ろが母屋

これらは小屋外壁、小屋棚、RC基礎部壁にボルト固定された部材等である。特にコンクリート基礎にボルト締めされた長方形基礎材は2点で、1号で確認された様な「ほぞ穴」はなく、二本を仕口で結合されていた。これは1号掩体では確認できなかった資料であり、掩体壕木組部の用途位置が判明しない。さらに小屋の横木として方形柱材が4点あり、立ち上りの柱材の用途と想定できる。現存板材はの多くは短く92cmにカットされており、その量は82枚、「A C」「本熊木材株式会社人吉第二工場」等のステンシル書き銘入りの部材は全9点である。

今回の調査で、木製有蓋掩体壕で使用されていた全国で唯一の当時木製品資料の増加を見た。

今後これらの遺存木製品による建築士・設計士による具体的設計での位置特定を含めたシミュレーション作業の必要性を強く感じる。合わせて日本における木製有蓋掩体壕の民間研究資料で前節記述の池田満雄さんの『諸研究控え』と現地状況との比較検証を行う必要があると考える。

3. 関連調査による陸軍人吉秘匿飛行場の姿

前節では陸軍人吉秘匿飛行場の核部分である発掘調査等の記録をまとめた。本節では外郭である当時証言・軍事郵便・米軍資料について簡単にまとめる。

(1) 当時証言

当時証言では本報告書体裁頁数の関係で、各掩体壕每一名づつの証言を掲載した。

掩体壕造成当時の様子、滑走路造成のための動員とその苦勞、一緒に働いた朝鮮人労働者への思い、そして戦後自宅裏につくられた掩体壕解体の思い出、改めて72年ぶりに姿を現した掩体壕に平和を重ねる思い等、多彩な内容であった。今後、本報告書刊行を機に、新たな証言を収集いただけるように地域の皆様方をお願いしたい。

本飛行場に敗戦時に待機特攻隊として駐屯していた「第八九振武隊」の軍事郵便が発見されたのは、偶然の賜である。

筆者が兵庫県野飛行場地下作戦司令部等の調査を進めるなかで、三本飛行場の歴史検証を進められている宮田逸民氏とであい、本軍事郵便の所在を知った。氏のご厚意で資料公開のご同意をいただき、本報告書には免田郵便局発送の6通を紹介できた。



写真 74: 振武隊員の決意のハンカチへの寄せ書き（宮田逸民氏提供）

(2) 軍事郵便

軍事郵便は1874年に軍隊を含めた省庁が非常時に用いる郵便制度として布告された「飛行運送規則」に端を発したもので、一般の郵便制度とは異なる制度化であった。

戦地から発信されたものに限らず、訓練生の書簡等も含める事もある。これらの軍事郵便を「兵士の証言」として位置づけ、「兵士の実像を探る」試みが行われている。また、研究史的には兵士と銃後をつなぐ「パーソナルメディア」としても位置づけ、銃後（地域）研究の視点も付加されている。

まさに免田局から発送された一連の資料は、戦争末期、本土決戦に向けて一丸となって進む日本の状況をこの資料で知ることができる。今回の訓練地や駐屯先部隊からの近況等を伝える内容にも、当時の追い込まれた隊員の悲痛な言葉がそこに見てとれる。中には部隊長である櫻井少尉の間質を受けていないものもあり、その心情を察する資料群である。今後地域の郷土史会で公開を進め地元証言等との付き合わせて特攻隊員逗留先等の比定等に結びつ

けていってほしい。

(3) 米軍空撮資料

最後に本空撮等の米軍資料について述べる。

この資料は「空襲戦災を記録する全国連絡会議」事務局長の工藤洋三氏から提供を受けたものである。氏の長年のライフワークである米軍空襲資料の研究・資料調査で米国公文書館から直接入手されたもので、中表紙写真と本文表紙写真の2種である。

米軍は日本側の内通者からの独自情報により、本飛行場を知ることとなり米軍標記上は近隣の免田の地名から「MEND A I R F I E L D」と認識していた。九州本島への上陸作戦では攻撃の優先を与えられており「90」日本、「37」八代地区、固有攻撃番号は「2557」番である。

本写真は米極東航空軍の写真偵察機であるF13による撮影で、記載英文にあるように「飛行場報告第144号」にまとめられている。本書未掲載の別紙料ではあるが、撮影は「3PR5M317」のミッションで、本飛行場をはじめ隣県ではあるが特攻用の小規模な秘匿飛行場である加久藤飛行場等他の計12箇所を1945年8月5日に撮っている。

画面は市房山付近から斜め俯瞰で撮影され、中央円形の中に陸軍人吉秘匿飛行場の滑走路がとらえられている。白煙のようなものは露であり、球磨川がこの下にあることから、空襲時に本飛行場の位置を判断しやすかったのではなかろうか。10km程西に位置する錦町木上の人吉海軍航空隊飛行場（通称は高平原飛行場）が写真の奥の方にとらえられている。



写真 75: 写真偵察機 F13 腹部の偵察カメラ類の様子（工藤洋三氏提供）

4. 今後の課題

(1) 木製有蓋掩体壕調査事例の集約と RC 有蓋掩体壕調査資料との比較検証

全国では現存する RC（コンクリート製）有蓋掩体壕は約 50 基とされる。

一部は地域の文化財に指定するために、発掘調査が実施されその構造が徐々に判明しつつ、その後の整備事業では、本体のみから排水溝等の付帯施設の復元も行われている。

以下、今回の神殿原資料が半地下式構造であることから、九州内の類似事例を一事例のみ紹介する。



写真 76: 出水海軍航空隊 2号掩体の外観



写真 77: その掩体内部の掘り下げられた半地下状況の様子

鹿児島県出水市にあった海軍出水飛行場 2号掩体は、平成 25 年に整備のために出水市により発掘調査が行われた。掩体壕内部には帯状の肩部を有し、天井部までの十分な比高を保っている。なお、格納機は海軍「零式艦上戦闘機」、海軍機上練習機「白菊」である。内部での排水遺構等はみられず、コンクリートスラブは施工されていない。

今後全国の調査事例の増加と集積をまちながら比較検証を進め、木製有蓋掩体壕の位置づけを行っていく必要がある。

(2) 地元啓発と広域連携での戦争遺跡の保存整備活用

今回の調査等で確認した 5 基の掩体壕の中で、最も見学し易いのは上北神殿原「2号木製有蓋掩体壕」である。

1年を経過し、埋戻しは行われたが、袖部のコンクリート基礎部は残されており、隣接する県道との位置等からも良い状態にある。今後はこの掩体壕を中心として平和教育・啓発活動のプログラム化を進めていきたい。啓発リーフレットの発行や平和ガイド等、直ぐに取り組みのテーマもある。

また、本秘匿飛行場が位置するあさぎり町と隣接する錦町では、町内の人吉海軍航空隊基地跡を地域資源としてとらえ遺構の残存状態の測量調査による把握からはじめ、保存・整備事業につなげようと事業を展開中である。

さらに、飛行場に隣接し陸海軍機の主脚部品や尾輪を製作していた「岡本工業株式会社人吉工場」を利用し、「人吉海軍航空隊基地跡資料館（仮）」を平成 30 年度に開館を目指している。

隣接して性格の異なる陸海軍の飛行場の調査・保存等は全国にも例が無く初めての取り組みである。両町での有機的な連携をお願いしたい。

隣県ではあるが先述の出水市では鹿児島大学教育学部佐藤宏之研究室と連携し、「出水市戦争遺跡等保存活用プロジェクト」を立ち上げ、戦争の記憶の発見、発掘及びアーカイブス化等に取り組んでいる。地域でこれまで取り組まれてきた平和学習のプログラムの再構築もめざし、出水民泊プランニング、平和学習ガイドとの連携も緊密である。

本人吉球磨地域と出水市は県境をはさみ隣同士の位置にもあり、すでに観光コース等では連携を深めている地域である。今後は共通項の戦争遺跡・戦争遺産を通して、荒尾市・大牟田市の産業遺産での連携のように進むことを願っている。



写真 78 県道 48 号（岡原通り）・北側から見た 2号木製有蓋掩体壕
刈り入れ後の掩体壕開口部と全容

[図 版 編]



米軍撮影の陸軍「九五式中等練習機の特攻仕様機」

米軍記載では1945年10月23日、菊池飛行場とあるが、実際は「熊本（健軍）飛行場」である。

部隊は本土決戦用に待機した練習機による特攻隊の「第九六振武隊・薫風隊」である。

(米国立公文書館蔵 工藤洋三氏提供)



① 1号掩体壕の確認調査

陸軍人吉秘匿飛行場1号木製有蓋掩体壕現地での保存された木製部材を、ボルトに差し込んでの当時状況の確認作業



② 2号掩体壕全景

陸軍人吉秘匿飛行場2号木製有蓋掩体壕の北側開口部からの全景



① 3号掩体壕の調査の様子

陸軍人吉秘匿飛行場3号木製有蓋掩体壕の調査の様子で、掩体壕内部には戦後家屋が建てられ、当時木製品を使用して、右側袖部のコンクリートを基礎として物置が作られた。



② 3号掩体壕の物置小屋

陸軍人吉秘匿飛行場3号木製有蓋掩体壕横のコンクリート右袖部を基礎として戦後建てられた物置小屋。



① 4号掩体壕全景

陸軍人吉秘匿飛行場4号木製有蓋掩体壕の全景。4号掩体壕のRC基礎部露出の状況；奥室最深部より前室側を見る。



② 5号掩体壕全景

陸軍人吉秘匿飛行場5号木製有蓋掩体壕の全景。誘導路・開口部側から掩体内部を見る。



①1号掩体塚の調査

2008年4月の1号掩体塚一次調査の様子



②1号掩体塚の調査

2008年4月の1号掩体塚一次調査の様子



③1号掩体塚の調査

2008年6月の1号掩体塚(二次構造確認)調査の様子



④1号掩体塚の調査

2008年6月の1号掩体塚二次(構造確認)調査の様子



⑤1号掩体塚の調査

2008年6月の1号掩体塚二次(構造確認)調査の様子



⑥1号掩体塚の調査

2008年6月の1号掩体塚二次(構造確認)調査の様子



① 1号掩体壕の調査
2008年8月の1号掩体壕三次（遺存木製品）調査の様子



② 1号掩体壕の調査
2008年8月の1号掩体壕三次（遺存木製品）調査の様子



③ 1号掩体壕の調査
2008年10月の1号掩体壕三次（遺存木製品）調査の様子



④ 1号掩体壕の調査
2008年10月の1号掩体壕三次（遺存木製品）調査の様子



⑤ 1号掩体壕の調査
2008年10月の1号掩体壕三次（遺存木製品）調査の様子。ビニールハウス内保管の板材



⑥ 1号掩体壕の調査
2008年10月の1号掩体壕三次（遺存木製品）調査の様子。納屋床板使用の板材



① 2号掩体壕第1トレンチ
左側手前袖部のコンクリート敷設状況と堀方ライン



② 2号掩体壕第1トレンチ
直打ち状況、堀方ライン



③ 2号掩体壕第2トレンチ
コンクリート基礎部の検出状況



④ 2号掩体壕2号トレンチ延長部の状況
手前は左側奥袖部のコンクリート、先は上段周帯部。※中央部攪乱での掘り下げあり



⑤ 2号掩体壕4号トレンチ状況
全体状況とアンカーボルト2本の様子



⑥ 2号掩体壕5号トレンチ状況
出土した木製品の様子



① 2号掩体壕 5号トレンチ状況
出土木製品とボルト・スペーサー拡大の様子



② 2号掩体壕 5号トレンチ状況
出土の鉄釘



③ 2号掩体壕 第6トレンチ状況
検出されたコンクリート基礎の尻部・端部
とボルト設置状況



④ 2号掩体壕 第7トレンチ状況
中央側に埋土流入の土層状況。



⑤ 2号掩体壕 第8トレンチ状況
急激な客土の埋土状況



⑥ 2号掩体壕の環境整備
オープン部への安全ロープ設置と土壌による
縁辺部補強状況

図版 8



① 3号掩体壕第1トレンチ状況
西側より見る上段周帯部、中央は下段の格納床
面



② 3号掩体壕第3トレンチ状況
袖部外側の掘方及び捨てコン状況



③ 3号掩体壕第3トレンチ状況
擁壁最下層の基礎打設と袖部基礎打設
での高低差の状況



④ 3号掩体壕第3トレンチ状況
袖部の基礎設置状況と捨てコン状況



⑤ 3号掩体壕第3トレンチ状況
外側（前室・奥室変換点箇所）の掘り下げ完了



⑥ 3号掩体壕第3トレンチ状況
外側の掘り下げと外傾するコンクリート基礎
の状況



① 3号掩体壕第3トレンチ状況
外側基礎部造営での直に下がる堀方ライン



② 3号掩体壕第3トレンチ状況
外側最下層の捨てコンの敷設状況、板目状況



③ 3号掩体壕第4トレンチ状況
掩体後室側より中央部の掘り下げ状況を見る



④ 3号掩体壕第4トレンチ状況
掩体後室の外側に掘られた排水用小溝



⑤ 3号掩体壕第5トレンチ状況
擁壁基礎部内側の状況、堀方ラインの確認



⑥ 3号掩体壕第5トレンチ状況
擁壁基礎部外側の状況と捨てコン状況



① 3号掩体壕柱材
小屋内の「ア材」の基礎部への設置状況



② 3号掩体壕柱材
小屋内の「イ材」での打ち欠き状況



③ 3号掩体壕柱材
小屋内の「ア・イ両材」の仕口での結合状況



④ 3号掩体壕柱材
小屋内の方形柱材利用の様子



⑤ 3号掩体壕板材
小屋内のステンシル銘入りの部材



⑥ 同材の拡大写真
小屋内のステンシル銘入りの部材
「本熊木材株式会社」
「人吉第二工場」



① 4号掩体壕第1トレンチ状況
袖部の掘り下げと捨てコン状況



② 4号掩体壕第1トレンチ状況
袖部と擁壁基礎部の状況



③ 4号掩体壕第1トレンチ状況
擁壁基礎最深部の状況



④ 4号掩体壕第1トレンチ状況
擁壁基礎最深部への杉板表面付着の状況



⑤ 4号掩体壕第1・2トレンチ状況
東側から掩体中央部を見る



⑥ 4号掩体壕第1・1-2トレンチ状況
周帯の確認状況



① 4号掩体壕第2トレンチ状況
全室と後室の変換部の状況



② 4号掩体壕第3トレンチ状況
打設時の垂木差し込み痕跡



③ 4号掩体壕第4トレンチ状況
袖部コンクリート基礎の状況



④ 4号掩体壕第5-1トレンチ状況
格納部から肩部・後室最深部の状況



⑤ 4号掩体壕第5-2トレンチ状況
版築状の硬化面状況



⑥ 4号掩体壕第5-1トレンチ
中心線上に攪乱溝と周帯状の状況



① 4号掩体壕第6-1トレンチ状況
誘導路上面の地山の状況



② 4号掩体壕第5-1トレンチ状況
格納部側の床面状況



③ 5号掩体壕第1-1トレンチ状況
袖部の検出状況



④ 5号掩体壕第1-2トレンチ状況
袖部の検出状況



⑤ 5号掩体壕第4トレンチ状況
掘り下げ作業の様子



⑥ 5号掩体壕第4トレンチ状況
排水作業の様子



① 5号掩体壕第4トレンチ状況
外側堀方ラインの状況



② 5号掩体壕第4トレンチ状況
斜方向に打設した捨てコン状況



③ 5号掩体壕第6トレンチ状況
擁壁先端部と外側堀方層部の状況



④ 5号掩体壕第6トレンチ状況
外側堀方ライン及び埋土の状況



⑤ 4号掩体壕の測量調査の様子



⑥ 5号掩体壕の測量調査の様子



① 3号掩体壕遺存木製品
七材



② 3号掩体壕遺存木製品
七材拡大
銘「横に一線」「ハ」「AC」



③ 3号掩体壕遺存木製品
サ材



④ 3号掩体壕遺存木製品
サ材拡大 銘「三尺二寸」



① 3号掩体壕遺存木製品
サ材拡大 銘「丸に熊」
「人吉第二工場」



② 3号掩体壕遺存木製品
シ材拡大 銘「AC」



③ 3号掩体壕遺存木製品
ス材



④ 3号掩体壕遺存木製品
ス材拡大 銘「AC」



① 3号掩体壕遺存木製品
コ材



② 3号掩体壕遺存木製品
コ材拡大 銘「丸に熊」
「人吉第二工場」



③ 3号掩体壕遺存木製品板材
全長110～120cmに切り揃えられた板材



④ 3号掩体壕遺存木製品板材
全長90～95mに切り揃えられた
板材

参考引用文献

- 1 山下完二「神殿原陸軍飛行場」『子どもと歩く戦争遺跡 熊本県南編』熊本の戦争遺跡研究会 2007
- 2 高谷和生「熊本の旧軍飛行場の概要と菊池飛行場花房給水塔の保存」第12回戦争遺跡保存全国シンポジウム愛知大会 2008
- 3 高谷和生『神殿原秘匿飛行場永山1号掩体壕の調査概要報告』平成21年1月6日改訂版 玉名荒尾の戦争遺跡をつたえるネットワーク あさぎり町教育委員会提出資料 2009
- 4 高谷和生「陸軍人吉（神殿原秘匿）飛行場」『熊本の戦争遺跡』熊本の戦争遺跡研究会 創思社 2011
- 5 高谷和生「陸軍人吉秘匿飛行場木製掩体壕」『熊本の近代化遺産下巻 県北・県南・天草』熊本産業遺産研究会編 弦書房 2014
- 6 北川賢次郎『陸軍人吉（神殿原秘匿）飛行場 神殿原木製掩体壕（2号）、狩所木製掩体壕（3号）発掘調査説明会資料』あさぎり町教育委員会 2016
- 7 田中大輔『南アルプス市埋蔵文化財調査報告集第13集 ロタコ（御勅使河原飛行場跡）滑走路跡及び掩体壕跡の埋蔵文化財確認調査』南アルプス市教育委員会 2007
- 8 田中大輔『南アルプス市埋蔵文化財調査報告集第21集 ロタコ（御勅使河原飛行場跡）横穴壕群の詳細分布調査報告書』南アルプス市教育委員会 2009

あとがき

神殿原永山 1 号掩体壕との出会いは、私自身が玉名・荒尾地域の近現代遺跡を知り、県内全域での戦争遺跡調査へと広がっていくきっかけとなるものでした。

平成 21 年より、当時「神殿原飛行場」と呼んでいた「陸軍人吉秘匿飛行場跡」に関わり、8 年が経過しました。

地域で戦後一貫して平和教育を実践してこられた山下完二先生と出会い、先生の平和への強い思いや将来を担う子ども達に戦争の悲惨さを伝えたいとの願いに心をうたれました。

また、教育委員会の北川賢次郎さんの地域の文化財に向かい合う真摯な態度は、長く熊本県で文化財行政を担当し、今は市民活動を進めている自分自身の原点を改めて見つめ直す事となりました。

今回、あさぎり町教育委員会のご尽力により、平成 27 年・28 年と 2 年にわたる調査を無事に終え、県内初の戦争遺跡（太平洋戦争期）調査報告をまとめる事ができ感慨無量です。

あさぎり町様に感謝申し上げます。

本書は、熊本県内で初めて刊行される太平洋戦争期の埋蔵文化財発掘調査報告書となります。

今回の調査は、県内自治体のさきがけとして、全国で 2 例目となる木製有蓋掩体壕跡の発掘資料報告に留まらず、飛行場等に関わった当時の方々の貴重な証言も収録できました。

また、関連調査を通して、当飛行場で敗戦をむかえた特攻隊員の軍事郵便・手紙の発見もありました。さらに米軍の九州上陸オリンピック作戦のため、用意周到に準備していた「MENDAIRFIELD」偵察機写真の発見へとつながりました。

地域の新たな歴史の解明は、原始古代であろうと近現代であろうと手法は全く変わりません。一部の行政担当者からは「戦争遺跡に対しての基準を持ち合わせていない」等の言葉を聞くことがあります。残念な限りです。

本書の刊行を通して、本遺跡の歴史像解明をさらに進め、戦争に関わってきた人々の姿から「戦争と平和」を考えるきっかけとなることを願っています。

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク代表

肥後考古学会幹事

高谷 和生

報告書抄録

ふりがな	りくぐんひとよしひとくひこうじょうあと
書名	陸軍人吉秘匿飛行場跡
副書名	木製有蓋掩体壕跡の埋蔵文化財発掘調査
シリーズ	あさぎり町文化財調査報告書
シリーズ番号	第4集
編著者	高谷 和生 北川賢次郎
編集機関	あさぎり町教育委員会
所在地	〒868-0408 熊本県球磨郡あさぎり町免田東1774 TEL.0966-45-7226 FAX0966-45-7227

発行年月日	2017年(平成29年)3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	字	市町村	遺跡 番号	発掘・調査 期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
いちごうもくせい ゆうがいえんたい ごう 1号木製有蓋 掩体壕	熊本県球磨郡あさぎり町	うまひがしな がやま	43514		平成20年 1月～9月 4日間	945	学術調査
にごうもくせい ゆうがいえんたい ごう 2号木製有蓋 掩体壕		うまきたこう どんぼる			平成27年 9月 5日間	483	
さんごうもくせい ゆうがいえんたい ごう 3号木製有蓋 掩体壕		うまひがしか りどころ			平成27年 10月 5日間	700	
よんごうもくせい ゆうがいえんたい ごう 4号木製有蓋 掩体壕		おかはるみな みながおか			平成28年 9月 6日間	1,080	
ごごうもくせい ゆうがいえんたい ごう 5号木製有蓋 掩体壕		岡原南永 岡			平成28年 9月～10 月	1,440	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
陸軍人吉秘匿 飛行場跡	戦争遺 跡	近代(昭和 20年)	木製有蓋掩 体壕	木製基礎部連結 材、梁板材、釘	球磨盆地にアジア太平洋戦争敗戦間際に構築された 陸軍秘匿飛行場跡 全国で唯一の木製有蓋掩体壕使用材の報告 全国2例となる木製掩体壕調査例 熊本県内初の戦争遺跡埋蔵文化財調査報告書

要約	<p>太平洋戦争期の熊本県内の正規飛行場は陸軍7箇所、海軍2箇所、特攻用秘匿飛行場5箇所の計14箇所である。そのなかでも本県の戦争遺跡の特徴を示す一群の秘匿飛行場は、沖縄特攻作戦とその後の本土決戦に向け、本県が置かれた地勢学的な路相の結実である。今回の調査は、全国的には山梨県南アルプス市ロタコ事例が先行調査で1例みられるものの、国内2例となる木製有蓋掩体壕5基の報告事例である。そこからは陸軍により統一された掩体壕規格、現地運用でのRC基礎の打設、掩体内部の構築等、太平洋戦争末期の軍状況を示す良好な報告となった。特に2号掩体壕からの木製部材出土、1・3号掩体壕で当時使用され遺存していた木製基礎部連結材や梁板材の確認は、全国初となる本調査最大の成果である。半地下工場等を含め、大戦末期に急遽施工された木製構造建築物の技術的系譜を解く資料報告となった。また、本飛行場に関わる当時証言、敗戦時に待機した中継特攻隊「第八九挺隊隊員」の軍事郵便、米軍F13偵察機による空撮写真資料により多角的に本秘匿飛行場の全容を知ることができた。本報告は熊本県南部の人吉球磨盆地に太平洋戦争敗戦間際に構築された秘匿飛行場の全容をほぼ解明し、熊本県内では初となる戦争遺跡の埋蔵文化財調査報告である。</p>
-----------	---

あさぎり町文化財報告書 第4集
陸軍人吉秘匿飛行場跡 木製有蓋掩体壕跡
2017年(平成29年)3月31日
編集・発行 あさぎり町教育委員会
〒868-0408
熊本県球磨郡あさぎり町免田東1774
TEL 0966-45-7226
印刷 協和印刷所
熊本県球磨郡あさぎり町免田東1496-20

